

第46集 平成22年 阿蘇合宿レポート

日本への回帰



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰
(第四十六集)

——第五十五回全国学生青年合宿教室（阿蘇）の記録より——

「中国との間では、もともと良好な関係が続いていたわけですが、昨年の尖閣沖の漁船衝突事件などによって、それが一時期揺らぎました。…」

菅直人首相が「外交に絞って講演をした」との報道に接して官邸のホームページを開いてみた（二月二十日、民間外交推進協会での講演「歴史の分水嶺に立つ日本外交」）。右はその中での首相の言葉である。中国とは「もともと良好な関係が続いていた」「一時期揺らぎました」とこともなげに語ってゐるが、本当に「良好な関係が続いていた」のであらうか。

確かに、日中間の物的・人的な往来は年々拡大して、今やわが国の輸出入額の二十三%余が対中貿易となつてゐる（平成二十一年、ちなみに対米国は十三・五%）。年間百万余の中国人観光客が押し寄せるやうにもなつてゐる。これだけを見れば良好な関係と言ふべきだらうが、少し目を転じれば、互惠・平等の外交原則から著しく乖離した両国の関係が浮上する。昨年九月、菅内閣が鼎の軽重を問はれた中国漁船による尖閣諸島沖「領海侵犯事件」も、「もともと良好な関係が続いていたわけではなかったから起きたのである。」「一時期揺らぎました」で済まされるやうな事案ではないのだ。さらに首相は尖閣沖の「領海侵犯事件」と言ふべきところ

を「衝突事件」などと焦点をぼかして第三国政府のやうな言ひ方をしてゐる。菅内閣は事件の当事者ではなかったのか。かうしたところに国家の尊厳と自立をわがこととして受け止められない戦後思潮が顔を覗かせてゐる。目先の数量化可能な経済分野しか念頭にないから、「もともと良好な関係が続いていた」となる。しかし経済には好不況が付きものだし、それだけが国と国との関係ではないことは言ふまでもない。

それでは、首相に言はせれば「良好な関係が続いていた」はずなのに、なぜ「領海侵犯事件」が発生したのか。外交原則から大きく反れた日中関係とはどのやうなものだったのか。

ここ三十年來を振り返れば、①歴史教科書の記述が昭和五十七年（一九八二）以降、中国側の干渉で三たび改変された②総理の靖国神社参拝が昭和六十一年（一九八六）以降、中国からの横やりで、小泉内閣の五年間を除いて、取止めになった③尖閣諸島（沖縄県石垣市の一部）が平成四年（一九九二）二月制定の中国国内法（領海法）に中国領として書き込まれた等々が挙げられる。「歴史教科書」も「戦歿者慰霊」も「領土保全」も、これらすべて国家の存立に欠くべからざる絶対要件である。そのいづれに關しても日本は容喙を受けてゐるのだ。かうした退嬰的な日本外交を指して対中「位負け」外交との評があつたが、昨秋の尖閣沖「領海侵犯事件」の顛末を見ても、それが改められる気配は皆無だつた。

まことに畏れ多いことながら、尖閣諸島が中国国内法に中国領と記載された年の十月、兩陛下の中国御訪問がなされてゐる。即ちわが外務省は輔弼ほひつの任を抛棄して、御訪中に異議ありとする国内の声をも退け、「天安門事件」(一九八九年六月、民主化を要求する学生達を人民解放軍が武力弾圧した事件)で浴びた国際的非難を躲かばさうとする中国政府を助けたのである。

かうした「位負け」外交に対して、マス・メディアは(産経紙は趣を異にしたが)批判するどころか、むしろ①と②に関してはその対日攻勢の拡声器役だった。そのため与くみし易しと見縊みくびられ、やがて③を招来したのだ。③についても信じられないことだが「是正を要求する」旨の口頭抗議で終つてゐる。これでは尖閣沖で取締る巡視船に中国船が体当りしてくるのも当然だらう。ここで看過できないのは、これら①②③の全てが自民党政権時代のことだったことである。従つて、首相が中国とは「もともと良好な関係が続いていたわけでありませう」と公的に語つても、それについて自民党は何も言へないのである。まさに国の尊厳を見失つた戦後政治の病理である(さらに現民主党政権には、子ども手当支給、扶養控除廃止、夫婦別姓導入、外国人参政権付与等々、国の内部崩壊につながる社会主義志向といふ問題点が内包されてゐる)。

現在、東シナ海でのガス田開発では交渉の合意を待たずに既成事実が積み上げられ、潜水艦を含む中国艦隊は宮古海峡を抜けて西太平洋に出てゐる。三年前には日本海を北上した中

国艦隊が津軽海峡を通過して太平洋側へ出てゐた。津軽海峡や宮古海峡の艦隊通過は国際法違反ではないが、対日攻略の遠謀からきてゐることだけは確かだ。

昭和二十年（一九四五）八月のポツダム宣言受諾から六十年余り。一貫して、わが国は主権喪失期に占領軍スタッフによつて起草された『日本国憲法』を奉じてきた。日本国民よ！「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して」生きよ、自らの力で自らを守らうと考へることはないのだ」と説く『日本国憲法』を独立（昭和二十七年四月）後も奉じ続け、それに背くことは憲法違反になるとして、ひたすら自らの手足を、そして頭を縛つてきた。その結果が対中「位負け」外交である。歴史教科書の記述や戦歿同胞の慰霊といふ国家主権の聖域にまでその影を引き込んでゐる（昨年十一月には、ロシア大統領の国後島訪問といふ暴挙を許してしまつた―大統領は事前に訪中してゐた―。その後、地域発展相や国防相などの閣僚も訪問し、韓国や中国に開発投資を呼び掛けてゐる。これまで積み上げてきた領土返還要求の経緯は無にされたに等しい）。

建国の昔、御東征の神武天皇率ゐる軍勢は、その途次、大熊の毒氣あてに中られ眠り込んでしまふが、高天原からの神剣を得るや忽ち甦り、天皇の「長く寝つるかも」の雄叫びの下、再び進軍した。自分で自分の頭や手足を縛るとは、進んで眠り込むやうなものだから、国の誇りや尊厳が慮外のこととなるのは理の必然だつた。いくら経済力が大きくならうとも、それ

だけでは他国の信は勝ち得なかつた。悲しいかな、これが戦後六十五年を経た国の姿である。この間、米ソ冷戦を日米安保体制で乗り切りはしたが、それも双務性に裏付けられた同盟関係からはほど遠いものだった。平成の民はいつ「長く寝^ねつるかも」の雄叫びを発するのか。

本冊子は昭和三十一年八月、霧島(鹿児島県)で第一回が始まった毎夏の宿泊研修の、五十五回目の記録である。昨夏の暑き盛り、阿蘇(熊本県)の地で営まれた研修の様子を各頁の行間からも御賢察いただきたい。われらがずっと願ってきたことは、この宿泊研修の中から、東征の御軍が忽ち甦^{よみがえ}ったやうな「神剣」を見出して欲しいといふことである。遙か太古の神話に連なる祖先の歩みの中に、数多の「神剣」が蔵^{かく}されてゐる。そのことに気づいて欲しいと願ふものである。

最後にあたり、諸事御多用の中を九州・阿蘇高原までお運び賜り、さらには御講義要旨の掲載をお許しいただいた中西輝政先生に厚く御礼を申し上げます。

平成二十三年二月十一日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき

講義

第一日目（八月二十日）

古典輪読に学ぶ日本人の知恵

..... 日章工業(株)代表取締役 藤新成信 1

元寇 文永の役の実像―「蒙古襲来絵詞」を読む―

..... 元福岡県立小郡高等学校長 志賀建一郎 19

第二日目（八月二十一日）

この国はどこへ行くのか..... 京都大学大学院教授 中西輝政 43

柿本人麻呂..... 昭和音楽大学名誉教授 國武忠彦 75

第三日目（八月二十二日）

歴史の玉の緒..... 独立行政法人国立病院機構都城病院長 小柳左門 103

第四日目（八月二十三日）

持続する志―橋本左内「啓発録」に学ぶ―

……………（株）寺子屋モデル代表世話役 山口秀範…

131

会員発表

インテリジェンスについて

……………FTIインターナショナルリスク日本支社 伊藤俊介…

151

短歌入門

短歌創作導入講義―『短歌のすすめ』を読む―

……………元富山県立富山工業高等学校教諭 岸本弘…

165

創作短歌全体批評

……………東洋紡績（株） 庭本秀一郎…

185

一年の歩み……………福岡中央公共職業安定所 古川広治…

201

合宿教室のあらまし……………

217

合宿詠草抄……………

243

あとがき

講義

—合宿導入講義—

古典輪読に学ぶ日本人の知恵

日章工業(株) 代表取締役

藤 新 成 信



はじめに―本合宿に取り組む心構へについて

- 一、学問の目的とは―人生の指針となつてゐる「太子のお言葉」
- 二、「輪読」の実習―吉田松陰『講孟笥記』から
- 三、「心にひびく学問」を

はじめに―本合宿に取り組む心構へについて

最初に「教育往復書簡」といふ新聞記事をご紹介します（七月十六日の産経新聞―九州・山口版）。そこに本会参与の折田豊生氏（熊本市役所環境保全局勤務）から寺子屋モデル代表山口秀範氏宛てのお手紙が掲載されてみました。そのお手紙には今日の私の講義テーマに関連する「古典輪読」、さらにはこの合宿で皆さんが体験する「短歌創作」や「創作短歌の相互批評」といふことについても大変わかりやすく書かれてをりました。

「（輪読とは）文章を読んで感想を述べ合いながら、筆者が伝えようとしていることを正確につかむための修練をするのですが、実際にやってみると、個々の受け止め方や読み方の深さの違いの大きさに驚かされます。その違いはいわば個々人の総合力によるものですが読む力も、通り一遍のやり方で養うことはできません。独りよがりの考えを戒め、正確に聞き取り、読み取り、そして表現すること。それを鍛え合うことが大切なのは、間違った言葉では健全な思索を期待することが難しいからです。輪読や短歌創作・相互批評によって言葉の修練を繰り返しながら、本音で言葉を交すことがなければ、人と人とが繋がりが合

う力にはなりませんし、それなくして自己改革はあり得ません。」

何故古典を輪読するのか。皆さんは、それぞれ何かを求める心があつて、この合宿に参加されてゐると思ふのですが、それを敢へて言はせてもらへば、「自己改革」のためにといふことではないでせうか。それは例へば古典の輪読を行ふ中では、ある一つの言葉について共に考へ味合ふことで、お互ひを高め合ふことが出来ます。輪読の中では筆者の伝へたいことをより正確に受け取るやうに努めます。何人かの読書会ですから、いい加減な読み方は出来ない、それはすぐに知られてしまふのです。そのことは必然的に、「いかに生きていくべきか」を真剣に考へることに必然的に繋がるやうに思ひます。書物を一人で読むだけでは、学べない多くのことを輪読を通して学ぶことが出来ると思ひます。

私たちは生きて行く中で我が身に降りかかってくることを、どう解釈していいか、中々分らないといふことが多々あると思ふのですが、古典や先人の遺された言葉は、それらに対し一つの変らぬ姿を示し続けてゐるのではないでせうか。したがって、その言葉とどう接するか、どう付き合ふかといふことがとても大事なことになると思ひます。さういふ意味で、この合宿で皆さんは、沢山の言葉に出会はれると思ひますが、輪読の時間だけでなく班別の研修（討論）の中で、しっかりとそれらの言葉に迫っていただきたい。そして班員同士「本



音で言葉を交す」やうに努めて、この合宿で真の友達に出会っていただきたいものと思ひます。

一、学問の目的とは——人生の指針となつてゐる「太子のお言葉」

開会式の中で上村和男理事長は「学問の目的についてしっかり考へてほしい」と言はれました。「維摩経義疏」の中の聖徳太子の言葉を味はひながら、学問の目的について皆さんとご一緒に考へてみたいと思ひます。左記の資料は黒上正一郎といふ方が書かれた『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』といふ書物から引用したものです。この本について一言申しますと、私の持つてゐる本は昭和四十四年の版ですが、昭和五年、旧制の第一高等学校で行はれた著

者・黒上氏による連続講義を学生の手でまとめられた最初のものと同つてをります。当時の一高生有志により結成された「一高昭信会」といふ会が現在の国民文化研究会（国文研）の基ですから、黒上氏は、言はば、国文研の源流の方と申し上げることが出来ると思ひます。

自行外化を憶して以て心を調伏すといへども、若し自他の二境を存して修業せば、即ち修する所廣からずして、物と其の苦樂を同じくすること能はず。所以に勧めて應に著を離るべしと明かすなり。

「自行外化」とは、自ら行ひ、「外」つまり自分以外の他人を「化する」、感化、強化する、あるいは影響を与へるといふ意味でせうか。そのことを「憶して」、心に念じて、「以て心を調伏する」とは、心を整へ、しっかりと念じ、懸命に努力する。まづ自ら率先して行ひ、人を感化し、それを念願し、努力するといふ意味だと思ひます。考へてみれば、このことは、ここにいらつしやる全ての方々日々なさつてをられることでせう。学生であれば、教室で、ゼミで、部活やサークルでの、友達つき合ひの中で、お互ひに助け合ひ、励まし合つたりしてをられるに違ひありません。社会人の方々は、年長者や上司であれば、後輩や部下に対して

アドバイスを与へ、共に成長しようと努力してをられることでせう。このことは会社だけでなく、あらゆる組織で皆真剣に取り組んでをられることだと思ひます。

しかし問題は、果してそれだけでよいのかと聖徳太子は言はれてゐることです。「自他の二境を存して修業せば、即ち修する所廣からずして、物と其の苦樂を同じくすること能はず。所以に勧めて應に著を離るべしと明かすなり」と太子は説かれてゐます。

自分と他人の「境」を存在させたままでは、即ち自他の間の心の壁を取り払はないままでは、「修する所廣からずして、物と其の苦樂を同じくすること能はず」、その結果得られるものは少なく、幅広くみんなの役に立つものを得ることはできない。「物」、生きとし生けるもの、あるいは他人と共に、「苦樂を同じくする」ことはできない。つまり他人と喜びや悲しみを共にして生きてゆくことはできない。だから、「應に著を離るべしと明かすなり」、著とは「執着」のことだと思ひますが、己に執着する心を離れなければならないと言はれるのです。このことは大層難しいことですし、「共に生きる」といふことの切実な意味を私が本当に分つてゐるかと言はれれば自信がありませんが、何時しか太子のこの言葉は私の心に残り、人生の指針となつてをります。学問の目的とは何かといふことを考へる際に、皆様もこの太子のお言葉をよくよく味はつて頂きたいものと思ひます。

話は少しそれますが、私は今日、ここに参ります時、我が社の社員（八年前の江田島での合宿にも参加してをりますが）と車の中でいろんな話をしながらまわりました。「江田島での合宿教室に参加してどうだった？」と聞きましたら、「それまで自分のことだけを考へてゐたことに気がついて良かったと思ひます」と言つてくれました。考へてみますと会社内で起る様々な問題の原因は、多くの場合、自己への執着する心に起因してゐると私は思ひます。「あの人が悪い」と人の所為にし、「あの人をどうすればいいか」とか、「あの人がこうなつてくれればいい」とか、自らを顧るゝことよりも、人を變へようゝと考へがちです。さういふ時は、却つてますます容易ならざる事態になつてゐるといふ経験は、多くの方がお持ちではないでせうか。この合宿では、古典を通して、そこに表現されてゐる意味を尋ね、その深さを味ひながら、学問の目的を考へていただきたいものと願つてゐます。

二、「輪読」の実習—吉田松陰『講孟劄記』から

ここで普段私も行つてゐる輪読会の様子を少しご紹介したいと思ひます。現在九州工業大学の学生や地元福岡の社会人の方々と共に、毎週末に集ひ、吉田松陰の『講孟劄記』の輪

読をしてゐます。数へて七、八年続いてをりますが、地元宮若市在住の大先輩である、小野吉宣さん（福岡県立高校の英語教師）に大変なご尽力を賜はり、温かくも楽しい輪読会を続けさせて頂いてをります。

さて、吉田松陰といふ方は、幕末期の人物で安政の大獄で落命しましたが、その激しくも一途で誠実な生き方とその思想が弟子達の心に火を点け、やがて明治維新につながっていったことはよく知られてをります。『講孟劄記』が書かれた経緯については、次頁以降の引用文の最後にある通りです。「癸丑・甲寅、墨・露の変、皇国の大体を屈して陋夷の小醜に従ふに至る者は何ぞや」とありますが、幕末の、嘉永六年（一八五三）から翌安政元年にかけてペリ率ゐるアメリカの艦隊、ならびにロシアのプチャーチンの艦船が日本に来航したことに始まります。これは鎖国を布いてゐた日本にとり大変な事態に立ち至ったことを指してゐます。さうした中で、松陰は海外の実情を実地に学ばんと禁を犯して渡航を企て、そのアメリカの艦船に乗り込みますが、失敗し、罪人として国元の萩（山口県）へ送還、囚人としての生活が始ります（一方、幕府は外国の圧力に屈して、天皇のお許しを得ないまま条約を締結してしまひます）。その萩の野山獄において、生涯獄を出る望みのない十一名の囚人と共に学び合ふ勉強会が始まります。その際に松陰が残した講義録が『講孟劄記』です。

日頃、一緒に輪読に参加してゐる学生がここにをりますので試みに読んでもらひませう。それでは第一班の鷺頭祥平君（九工大大学院二年）、お願ひします。

「梁惠王上」首章

王、何ぞ必ずしも利と曰はん、亦仁義あるのみ。

（前略）蓋し仁義は道理のなすべき所なり。利は功效の期すべき所なり。道理を主とすれば功效は期せずして自ら至る。功效を主とすれば道理を失ふに至ること少なからず。且功效を主とする者は、事皆苟且にして成遂する所あること少し。仮令少しく成遂する所あれども永久を保するに足らず。永久の良図を捨て目前の近効に従ふ。その害、言ふに堪ふべからず。苟も能く一向に義理の当然を求め、終始なく作輟なき時は、又何ぞ事の成らざるを憂へん。孟子惠王の利心を挫くも亦是が為なり。是、諸葛武侯の所謂「鞠躬尽力、死して後に已む。成敗利鈍に至りては、則ち臣の明の能く逆観する所に非ざるなり」の義なり。是、道学の根元、先賢の論ずる所備れり。今必ずしも贅せず。今且諸君と獄中に在りて学を講ずるの意を論ぜん。俗情を以て論ずる時は、今已に囚奴と成る。復た人界に接し、天日を押するの望みあることなし。講学切嗣して成就する所ありと雖も、何の功效かあらんと

云々。是、所謂利の説なり。仁義の説に至りては然らず。人心の固有する所、事理の当然なる所、一として為さざる所なし。人と生まれて人の道を知らず、臣と生まれて臣の道を知らず、子と生まれて子の道を知らず、士と生まれて士の道を知らず。豈恥づべきの至りならずや。若し是を恥づるの心あらば、書を読み道を学ぶの外、術あることなし。」

続けて、第五班の大森淳史君（九工大三年）、願ひします。

「抑々近世文教日に隆盛、士大夫書を挟み師を求め、兀兀孜孜たらざるはなし。その風懿美と云ふべし。吾が輩獄中の賤囚、何ぞ喙をその間に容るることを得んや。然れども今の士大夫、学を勤むる者、若し其の志を論ぜば、名を得んが為と、官を得んが為とに過ぎず。然れば功効を主とする者にして、殆ど義理を主とする者と異なり。思はざる可けんや。嗚呼、世に読書人多くして、真の学者なき者は、学を為すの初め、その志已に誤ればなり。精を励ますの主多くして、真の盟主なき者は、治を求むるの初め、その志已に誤ればなり。真学者・真明主出づるに非ざれば、僅に順境を語るべくして、未だ逆境を語るべからず。吾が輩逆境の人、乃ち善く逆境を説くことを得るのみ。」

癸丑・甲寅、墨・露の変、皇国の大体を屈して陋夷の小醜に従ふに至る者は何ぞや。朝野の論、戦の必勝なく、転じて变故を滋出せんことを恐るるに過ぎず。是亦義理を捨てて功効を論ずるの弊、与に逆境を語るべからざる者に非ずや。世道名教に志ある者、再思せよ、三思せよ。」

有難うございました。

実際の輪読会では、今のやうに大きな声で読んだのちに文節ごとに意味を取り、感想を述べたり、質問を出し合ったりします。筆者の伝へたいことを正しく理解し、それをどう受け止めたかが大事ですので、二時間の輪読会でもほんの数頁しか進まないこともあります。今日は私の方で意味を取りながら感想を交へて進めたいと思ひます。

「王、何ぞ必ずしも利と曰はん、亦仁義あるのみ」、これは孟子の言葉。王様は何故そのやうに、利益のこと、国を富ませることばかり言はれるのですか、仁義があるだけではないですか。このやうに松陰は孟子の言葉の大事な一節をいつも冒頭に置いて自分の意見を述べて行きます。梁の恵王といふ王様は、今から二千三、四百年前の、中国の戦国時代の魏、別名梁と

いふ大国の王様です。戦略に長け、全国から賢者を呼び集め国を強くしようとしたことから、その意味では立派な王様であったと言へるかも知れません。

それに対して松陰は、「仁義は道理のなすべき所」、仁義といふのは道理にとつては当然のことであり、「利は功効の期すべき所」、利は結果として期待すべきところではないか。「道理を主とすれば功効は期せずして自ら至る」、道理を主とすれば、必ず結果、効果といふものは生れるはずである。「功効を主とすれば道理を失ふに至ること少なからず」、最初から結果や効果に重きを置いていくならば、道理を失ってしまうといふことが少なからずあるものだ。「且^{かつ}功効を主とする者は、事皆苟^{こう}且^{じょ}にして成^{せい}遂^{すい}する所あること少なし」、しかも「功効」すなはち、結果や、成功ばかりを主とする者は、「事皆苟^{こう}且^{じょ}にして」、物事はいつも一時的な間に合せ仕事になって、完全に成し遂げることが出来ないものだ。「假^た令^{れい}少^{せう}しく成^{せい}遂^{すい}する所あれども永久を保するに足らず」、わづか成功しても永久にそれを保持し続けることは出来ない。次の言葉は私の好きな言葉ですが、「永久の良^{りょう}図^とを捨てて目前の近効に従ふ。その害、言ふに堪ふべからず」、永久を保つための良いはかりごとを捨て、目前の手近な結果、効果を狙って、それに従ってしまった時ほど、甚だしく害をなすものはない、それは言ふに堪へられないものだ。

私たちの普段の実生活は、成功と失敗、達成と未達といふ結果を常に求められてゐますけれども、苦しい時には私は松陰のこの文章を思ひ出し、勇気をいただいてをります。「苟も能く一向に義理の当然を求め、終始なく作輟なき時は、又何ぞ事の成らざるを憂へん」、ひたすらに、人として当り前の生き方を求めて、終ることなく途中でやめず、努力してゆけば、必ず事は成就するものであるから、何も心配することはないではないか。「孟子惠王の利心を挫くも亦是が為なり」、惠王の利に重きを置く心をあへて否定したのは、さういふことだったのです。

「諸葛武侯の所謂『鞠躬尽力、死して後に已む。成敗利鈍に至りては、則ち臣の明の能く逆観する所に非ざるなり』」。生死にかかはるこの言葉の真の凄さは分りませんが、諸葛武侯といふ人は『三国志』の中の劉備玄德に仕へ、出師表、後出師表といふ有名な文章を残した人です。「鞠躬尽力」、鞠躬といふのは、身を鞠のやうに縮め全力を出し切る様子であり、「死して後に已む」、文字通り私は死ぬまで努力する、死ぬまでここを動かないといふ強い言葉です。「成敗利鈍に至りては、則ち臣の明の能く逆観する所に非ざるなり」、成功や失敗、完成するとか負けるとか、さういふことに関しては今私が予測することは出来ない、とにかく自分は死ぬまで頑張る。この諸葛武侯の言葉は、よほど松陰も好きな言葉だったのでせう。

「是、道学の根元、先賢の論ずる所備はれり。今必ずしも贅せず」、もうこれ以上言ふことはない。今はそれで充分なんだと述べてゐます。

「今且諸君と獄中に在りて学を講ずるの意を論ぜん、今皆とこの獄中において勉強してゐる意味を話さうではないか。「俗情を以て論ずる時は、今已に囚奴と成る」、一般的に考へるなら私たちは囚人であり、「復た人界に接し、天日を拝するの望みあることなし」、二度とお天道様を拝むこともない。だから「講学切勵して成就する所ありと雖も」、一生懸命勉強して何かを得たとしても、「何の功効かあらん」、それが一体何の役に立つと言ふのだらうかと、しかしこれは言ふ処の利の説ではないか。だが仁義の説で考へればさうではないはず。本来、人の心が持つてゐる「事理の当然なる所」に従ひ考へれば当然のことではないか。「人と生れて人の道を知らず、臣と生れて臣の道を知らず、子と生れて子の道を知らず、士と生れて士の道を知らず。豈恥づべきの至りならずや。若し是を恥づるの心あらば、書を読み道を学ぶの外、術あることなし」。自分達は地位も名誉も全て失つてゐる。さうだけれども、人と生れて人の道を知らなければこれほど恥づかしいことはない。臣と生れて臣の道を知らなければ、子と生れて子の道を知らなければ、武士と生れて武士の道を知らなければ、こんなに恥づかしいことはないじゃないか。だからこそそれを知るために、私たちは勉強するんだと松陰は言

つてゐます。これは松陰の学問の究極の目的であり、生きる力の源だと思ひます。

しかし振り返ってみると「近世文教日に隆盛」、今の世の中、皆一所懸命勉強してゐる。「士大夫書を挟み師を求め、兀兀孜孜たらざるはなし」、武士たちが勉学にいそしむ様が目に浮かぶやうです。「その風懿美と云ふべし」、美しい風潮といふべきではありません。しかし自分は獄中の囚人であるから何のコメントもできない、ただ、今の士大夫は、或は学を勤しむ者の、その志を論ずるならば、名を得る為か官を得る為に過ぎないのではないか。いい就職がしたい、有名になりたい、それだけではないのか。それでは功效を主とする考へ方で、義理を軽んじ、功效を主とする人間ではないか。「読書人多くして、真の学者なき者は、学を為すの初め、その志已に誤ればなり」。学問が盛んな今、真の学者がゐないのは、その学問を始める最初の志が誤つてゐるからなんだ。「精を励ますの主多くして、真の盟主なき者は、治を求むの初め、その志已に誤ればなり」。一所懸命やつてゐる藩主、リーダー、今であれば総理大臣と言つても良いかも知れませんが、本当の名君、明主がゐないのは、そもそも、政治を志望した志がそもそも最初から間違つてゐるからだといふのです。「真学者・真明主出づるに非ざれば、僅かに順境を語るべくして、未だ逆境を語るべからず」、本当に優れた志ある学者や君主でなければ、わづかに順境を語るだけで、逆境を語ることに、言ひかへれば逆境に活路を

開くことは到底できない。自分たちは逆境の人間だ。「乃ち善く逆境を説くことを得るのみ」、諸君、僕らは逆境を説くことができるのだ。

私は父の後を継ぎ会社の経営の任に当ってをりますが、お蔭様で苦勞をいただきながらも、今日に至ってをります。企業も人も不況によって育てられ、はじめて成長させて頂くことが出来るものと思つてゐます。

私は苦しい時、松陰のこの「利と義の説」を読む度に、勇氣をいただくと共に、人間として当り前のことを実行することが如何に難しいかを考へさせられます。現代の日本は、成功した者ばかりを取り上げ、失敗した者を軽視する風潮があるやうに思ひます。一人一人の人間が生きて成長していく本当の姿に、あまり光が当られてゐないのではないでせうか。

三、「心にひびく学問」を

最後に中西輝政先生の「なぜ国家は衰亡するのか」(PHP新書)の中からの文章を紹介したいと思います。時間都合で割愛します。今日は吉田松陰の『講孟簡記』の一章を読みながら「心にひびく学び方」を述べてきましたが、それは現在の学問があまりにも「心に

「ひびく学び方」を顧みないと思ふからです。勿論、知的に整理された論理的文章をたくさん読み知識を広げて行くことは大切です。時事問題を読み解いていくには広い知識も必要です。正しい歴史観、人生観に立ち、広い知識の上に政治、経済問題を分析、判断する能力を持つことが大事なことは言ふまでもありません。ただ、さうしたことに取り組む意欲は「心にひびく学問」を積み重ねる中から生れて来るのではないかと思ひます。何をどのやうに学ぶべきか、明日の二日目の中西先生のご講義を通して、さらに考へていただきたいと思います。

冒頭に引用した折田さんの書簡の中に「個々人の総合力」といふ言葉がございました。私は諸先生・諸先輩方の「総合力」の深さに心惹かれて、学生時代から、輪読会に参加をし、また現在も学生の皆さんと共に、否、むしろ学生の皆さんから学ばせて頂いてをります。本日から四日間にわたり最後まで、人の話を親身になって聞き、本音で語り合つて、有意義にお話し頂きたいと思ひます。

ご清聴ありがとうございました。

講義

— 歴史講義 —

元寇文永の役の実像

— 「蒙古襲来絵詞」を読む —

元福岡県立小郡高等学校長

志賀建一郎



はじめに

「弓箭の道、先をもて賞とす。ただ懸けよ」

「文永の役」に関する誤った教科書の記述とその批判

「元寇」余話—もし一時的にせよ、モンゴル勢が居座つてゐたら…—

はじめに

私は、かつて高等学校で日本史を教へてゐました。「元寇」について正しい認識を広めなければならぬと兼ねてから考へてをりましたが、退職後、元寇についての正しい理解を広める社会教育面での活動を始めたいと思ひ立ち、その準備を進めてゐる時に大学時代の先輩、中村学園大学教授の佐藤鉄太郎先生と再会しました。そして「元寇」についてのご研究の概要を知り、その通りだと感激して直ちに「元寇研究会」の設立と会長へのご就任をお願いしました。会は平成二十年十一月に発足することができまして、現在、私はその研究会の副会長として元寇への正しい理解を広く得るために、九州各県の中学校高等学校や社会教育関係の方々を中心とする約六十名の方々と共に活動をしてゐます。

元寇とは、ご承知のやうに十三世紀後半の鎌倉時代、元の大軍（元の服属下にあつた朝鮮半島の高麗や、旧南宋との連合軍）が二度にわたつて北九州に攻め寄せ（文永の役・弘安の役）、それをわが鎌倉武士が奮戦して退けたことですが、以下お話しするやうに、この事件について、ことに「文永の役」に関する教科書の記述には問題がありまして必ずしも正確ではないのです。そ

の点について今日は考へてみたいと思ひます。「元」は十三世紀に勃興したモンゴル（蒙古）民族がシナ大陸を平定した後の国号ですので、元寇は「蒙古襲来」とも呼ばれてゐます。このことも先刻、ご存知のことと思ひます。

本日の私の歴史講義は佐藤教授の新学説を基礎にして進めて参りますが、その論点は現存する「蒙古襲来絵詞」（竹崎季長絵詞）の後世の加筆部分を修正しながら、これを基礎史料として「誤った」元寇像を正していくことにあります。

尚、参考文献として教授の關係著作を列挙します。「蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究」（錦正社）、「元寇後の城郭都市博多」（海鳥社）、論文「『蒙古襲来絵詞』に見る日本武士団の戦法」（『軍事史学』第三十八巻第四号）。

それでは「蒙古襲来絵詞」の中の「文永の役」（文永十一年、一二七四年）、「弘安の役」（弘安四年、一二八一年）に関する箇所を一緒に読んでみませう。

「弓箭の道、先をもて賞とす。ただ懸けよ」

「蒙古襲来絵詞」の文永の役関係記述（岩波書店『中世政治社會思想上』の「竹崎季長絵詞」か



ら

1 (絵詞の中の通し番号、以下同じ) 【文永の役】 息ちきの

浜はま(博多の北海岸)に軍兵その数を知らずうちたつ。
季長すえながが一門の人々あまたあるなかに、ゑだの又太
郎ひでいゑことに申しうけ給はるによりて、兜を
着換へて、これをしるしにて相互ひに見継ぐべき
よしを申すところに、異賊赤坂(後に黒田氏の福岡
城)に陣をとるにつきて、一門の人々あひむかふ
に、大將軍大宰少貳三郎左衛門景資かげすけ、のだの三郎
二郎すけしげ(景資の家来か)をもて、ゑだの又太
郎ひでいゑのもとに、「見参けんさんにいり候し時、一所に
て合戦候べきよし申候き。赤坂は馬の足立ち悪く
候。これにひかへ候はゞ、さだめて寄せ来り候は
んずらん。一同に懸けて追物射おひものいに射るべき」由申
さる、につきて、兼日かねての約束を違へじとて、各々

ひかへし間、「大将をあひまたば、軍遅かるべき程に、一門のなかにて季長、肥後の国の先を懸け候はん」と申て、うちいづ。

2 〈判読不明の箇所多く、省略〉

3 博多の陣をうちいで、肥後の国□□系□一番と存じ、住吉の鳥居の前を過ぎ、小松原をうち通りて赤坂にはせむかふところに、葦毛（白い毛に黒や褐色が混った毛色）なる馬に紫逆沢瀉（沢瀉おどしとはオモダカの葉の形におどしたもの）の鎧に紅の母衣（鎧の背につけた飾り、流れ矢を防ぐ）かけたる武者、その勢百余騎ばかりと見えて、凶徒の陣をかけてやぶり、賊徒追ひ落として、首一、太刀と長刀の先に貫きて、左右に持たせて、まことゆゝしく見えしに、「たれにてわたらせ給候ぞ、すゞしくこそ見え候へ」と申に、「肥後の国菊池の二郎武房と申すものに候、かく仰せられ候はたれぞ」と問ふ。「をなじきうち竹崎の五郎兵衛季長懸け候、御覧候へ」と申てはせむかふ。

4 武房に凶徒赤坂の陣をかけ落されて、二手になりて、大勢は麓原そはらに向きて退く。小勢は別府の塚原へ退く。塚原より鳥飼の汝干渴を大勢になりあはむと退くを追懸くるに、馬、干渴にはせたはして（足を取られて）、その敵を延ばす（取り逃がす）。凶徒は麓原に陣をとりて、色々の旗を立て並べて、らんじやう（関の声）暇なくしてひしめきあふ。季長はせむかふを、

藤源太すけみつ（季長の郎従）申す、「御方はみかた続き候らん。御待ち候て、証人を立て、御合戦候へ」と申を、「弓箭きゅうせん（弓矢）の道、先をもて賞（功勞が認められる）とす。ただ懸けよ。」とて、おめいて懸く。凶徒、龜原より鳥飼潟の塩屋の松のもとにむけ合せて合戦す。一番に旗指（旗を持つ従者）、馬を射られて跳ね落さる。季長以下三騎痛手負ひ、馬射られて跳ねしところに、肥前の国の御家人白石の六郎通泰、後陣より大勢にて懸けしに、蒙古の軍ひき退きて龜原に上がる。馬も射られずして異敵のなかに懸け入り、通泰つゞかざりせば、死ぬべかりし身なり。思ひのほか存命して、互ひに証人に立つ（幕府の引き付け役人に報告）。

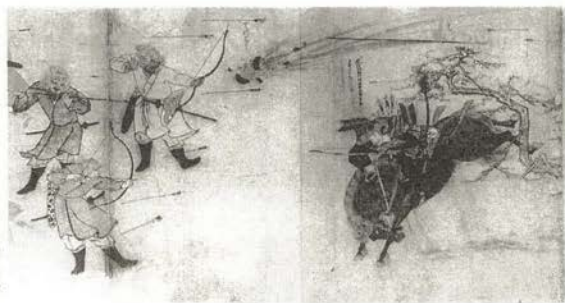
9 「弘安の役、菊池武房の名声」 人々おほしといへども、菊池の二郎たけふさ、文永の合戦に名をあげしをもて、武房のかためし役所の石築地の前にうちむかて、「將軍の兵船は、ほばしらを白く木にぬりてしるく候（目立つ）とうけ給候。おしむかて一箭射候て君の見參にまかり入候はむためにあひむかひ候。御存命候はゞ御披露候へ」と言ひてうち通る。

お読みになって感想はいかがでせうか。平家物語のやうな洗練された美しさはないにしても、明るく、たくましい当時の武士の心意気がしつかりと感じ取れます。

この「蒙古襲来絵詞」は文永の役と弘安の役の両戦闘に奮戦した竹崎季長（肥後の武士文永の役当時、二十九歳）が後に絵師に描かせ書家に記させて神社に奉納したものです、先ほど読んだ箇所は絵詞の「詞」の一部です。この絵詞の「絵」の部分は小中学校、高校の教科書に収められておますので、ほとんどの人は記憶にあるはずですが、「詞」まで読んだ人はさう多くはないと思ひます。皆さんが知ってゐる「絵」は馬上の竹崎季長がモンゴル兵に弓矢で攻撃されて、中央に「てつはう」が破裂してゐる絵ではないでせうか**蒙古襲来絵詞1**。

佐藤教授はこの「絵」に対して三人のモンゴル兵や「てつはう」、矢の一部は、この絵詞を所有してゐた天草の大矢野氏が江戸時代になって加筆したものだとの学説を提起されました。「絵」をよく見るとわかるのですが、後世になって張り合はされた二枚の絵の継ぎ目にモンゴル兵が描かれておます、はされた二枚の絵の継ぎ目にモンゴル兵が描かれておます、継ぎ目の下部を見れば二枚の絵は上下にずれて張り合はされ、

蒙古襲来絵詞1



(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

その後加筆されたものであることは明らかです。それでは当初の絵はどのやうなものだったのでせうか。

蒙古襲来絵詞2

は三人のモンゴル兵の後方が描かれていますが、追撃されて逃げるモンゴル兵とさらに後に弓を射る兵士が描かれてゐます。この部分こそ季長が描かせたかった情景に違いありません。佐藤教授はこのほかにも多数の加筆部分を指摘して、竹崎季長が描かせた当初の姿を復元しようとされたのです。この作業によって初めて「蒙古襲来絵詞」の史料価値が定まるのです。つまり季長が描かせた当初の絵詞こそ、元寇に関する最高のしかも貴重な根本史料となるのです。

佐藤教授はこれらの史料批判を加へた上で絵詞を研究されて、後世に記された伝聞等によらない元寇の実像を提起されたのです。

それにしても、欧亜にまたがって世界を席卷したモンゴル

蒙古襲来絵詞2



(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

兵と実際に戦った日本武士がよくこの絵を残してくれたものだと思ひますし、さうであればこそ、後世の加筆部分の検証もされずに教科書に記載される現状は実に残念だと思ひます。

「文永の役」に関する誤った教科書の記述とその批判

それでは次に、現行の高校教科書では元寇はどのやうに記されてゐるのでせうか。文永の役に焦点を当て二つの教科書の記述を見てみます。この他の教科書もよく似てゐますから、次の記述が現在の通説と言つていいでせう。問題のある箇所はゴチックにして番号を付けてあります。

(1) 山川出版社『詳説日本史』

「フビライハーンは、中国を支配するため大都（北京）に移し、国号を元と定めると、高麗も服属させ、日本に対してたびたび朝貢を要求してきた。

しかし、幕府の執権北条時宗がこれを拒否したので、元は高麗の軍勢もあわせた約三万の兵で、1274（文永一）年、対馬・壱岐を攻めた後、大挙して九州北部の博多湾に上陸した。かねてより警戒していた幕府は、九州地方に所領を持つ御家人を総動員して、こ

れを迎え撃ったが、元軍の集団戦法やすぐれた兵器に対し、①一騎打ち戦を主とする日本軍は②苦戦におちいった。しかし元軍も損害が大きく、たまたまおこった③暴風雨にあって⑤しりぞいた（文永の役）。」（原文は横書き）

（2）明成社『最新日本史』

「文永十一年（一二七四）、高麗の軍をあわせた二万数千の元軍は、軍船九百をつらねて来襲し、対馬・壹岐の両島を占領して博多に上陸した。日本軍は、①一騎駆けの戦法で応戦したが、元軍の集団戦法や「てつはう」とよばれた爆発物などにとまどい、②苦戦して④大宰府まで退却した。しかし、元軍も大きな損害を受け、いったん船に⑤引き揚げたところ、幸運にも③暴風雨が吹荒れ、結局、元軍は⑤退散した。これを文永の役という。」

（3）教科書に記載された通説の問題点

①「一騎打ち戦」「一騎駆けの戦法」：元軍の集団戦法に対して日本軍は一騎打ち或いは一騎駆けで応戦したのか。

元軍の集団戦法に対して日本軍は一騎打ちで戦ったといふ観念は日本人の記憶に定着してをり、私自身が授業でこのやうに教へてみましたから、佐藤教授の学説を知って愕然としました。本来一騎打ちは両者共に一騎づつで戦ってこそ意味があるものですが、集団で密集し

てゐる相手に対して一騎で攻め込むことは戦術上全く意味がないことは自明なことなのですが、一騎打ちで戦ったといふ觀念がどのやうに定着していったかについては別の考察が必要だと思ひます。ともかくその根拠を見てみませう。

通説の根拠は「八幡愚童訓」(八幡神の神徳を童子にも理解させるといふ書、著者は石清水八幡宮社僧で、成立は通説では十四世紀初頭、佐藤教授は戦国時代にまとめられたとする)に求められてきました。その記述は「日本ノ戦ノ如ク、相互名乗り合テ、高名不覚ハ一人宛ノ勝負ト思フ処、此合戦ハ大勢一度ニ寄合テ、足手ノ動処ニ我モ我モト取付テ押殺シ、虜ケリ」(日本思想大系二十、「寺社縁起」岩波書店)といふものです。この記述には人名などの具体性が全くありません。佐藤教授はこの記述は後世の人が面白をかしく記したものだらうと記して、「絵詞」の記述を分析すれば、すべての戦ひに対して日本軍は集団で戦つてゐることを前述の論文の中で立証されました。

たしかに先ほどの「絵詞」の記述でも、菊池氏は百余騎で攻撃し、白石六郎は「大勢」で追撃して季長の窮地を救ひ、季長自身も少ないとはいへ主従五騎で突撃してゐます。しかもそのとき季長の家来の藤源太すけみつは「御方はみかた続き候らん。御待ち候て、証人を立て、御合戦候へ」と引き留めにかかったほどなのです。「八幡愚童訓」には軍忠状などの記録に基づ

いた部分もあるとの指摘もありますが、たとへば「九国ニハ少弐・大友ヲ始トシテ（中略）馳集ル。大将と覚シキ者ダニモ十萬二千余騎、都合ノ数ハ何千萬騎ト云事ヲ不知」等の大げさな数字や八幡神の神威を高めることへの強い傾向もあり、一騎打ちを史実としてはならないと思ひます。当時の武士は、季長が恩賞を求めて文字通り「一所懸命」に戦つたやうに、きはめて現実的な側面を持つてゐたと考へれば、一騎打ちは後世の人々の心に残る恐怖感を種にした一種の想像画だったと言へるのかも知れません。

《結論》 日本軍は集団戦法で戦つた。

② 「苦戦におちいった」「苦戦して」…元軍博多上陸後の戦ひで日本軍は苦戦したのか。モンゴル軍が博多湾から上陸した後の戦ひで、「日本軍が苦戦した」との根拠も「八幡愚童訓」によるものと思はれます。赤坂に拠るモンゴル軍に対して菊池氏が攻撃した時の戦況を同書は次のやうに記してゐます。

「赤坂ノ松原ニテ 爰ニ菊池二郎其勢百三十騎、侘磨たくま（詫摩氏、大友の一族、文水・弘安の役の恩賞で神崎莊等を得る）ノ別当太郎百騎、都合二百三十騎ニテ推寄テ散々ニ驅散シ、上ニ成下ニ成リ執重リ打合程ニ、家子郎等残少打タレ、菊池はかり計ハ打漏サレテ死人ノ中ヨリ起上リ、頸くび共数多持セテ城内ニ入りケレバ、名ヲ後代ニ留メケリ。是偏ひとへ大菩薩ニ祈念ヲ致セシ効也。

(中略) 関東ニ参テ下賜ハル甲冑ヲ子孫ニ伝ント思ヘ共、神恩報謝ニ当社ニ持セテ奉ル

つまり、菊池氏は百三十騎で攻撃したが家来達は残り少なく討たれ、武房はからうじて討ち漏らされて死人の中より起ち上がったと記すのです。しかし、すでに見たやうに季長は赤坂からモンゴル軍を撃退して引き揚げてくる菊池氏に対してその数を百余騎と記し、その様子を「凶徒の陣をかけてやぶり、賊徒追ひ落として」「すゞしくこそ見え候へ」と記してゐました。どちらの記述がより事実に近いかは一読して明らかではないでせうか。しかも「絵詞」の前記9に「菊池の二郎たけふさ、文永の合戦に名をあげしをもて」と季長が記したことからは菊池武房は英雄視されてゐたことがわかります。しかも「八幡愚童訓」は関東から下賜された甲冑を菊池氏が八幡宮に寄進したのは八幡大菩薩への祈念の効に対する神恩報謝のためだと記すなど、記述の目的が菊池氏の活躍を正確に記すことよりも八幡神の神威を強調するための記述と見受けられるのです。これを以て教科書が記す「日本軍は苦戦した」との記述は根拠を失ふことになります。

《結論》博多を攻撃の途次赤坂に立てこもったモンゴル軍を日本軍は撃退した。

③「暴風雨にあつて」「暴風雨が吹き荒れ」：暴風雨によって退いたのか、或いは暴風雨は吹いたのか。

元寇と神風は後代の人々にも多大な心理的影響を与へてきました。特に弘安の役において肥前の国鷹島周辺水域に集結した元軍に台風が襲ったことは事実であり、それを後世の人々が神風と感じたことは当然のことであつたと思ひます。だが、文永の役においても暴風雨が吹いた為に元軍が退却したのかといふと、これはきちんと検証しなくてはなりません。「高麗史」(「高麗史日本伝」岩波文庫)には次のやうに記されてゐます。

「蒙・漢軍二万五千と我が軍(高麗軍のこと)八千と、梢工(船頭)・引海(水先案内か)水手(水夫)六千七百と、船艦九百余艘とを以て、日本を征す。一岐島に至り、千余級を撃殺し、道を分ちて以て進む。倭は却走し、伏屍は麻の如く、暮れに及びて乃ち解く。会、夜大いに風ふき雨ふる。戦艦、巖崖に触れて多く敗る。金佻(役職は左軍使)、溺死す。」

ここで注目すべきは「暮れに及びて乃ち解く」の言葉です。十月二十日に博多湾から上陸して龜原に陣を敷き、赤坂まで進出し博多を目指したが撃退され、追撃され当日の夕刻に戦陣を「解いた」といふのです。解いたのか、撃退されたのかは後で考へますが、その後は博多湾上の自船に引き揚げたのでせう。風が吹いたのはその後の夜だといふのです。つまり、暴風雨のために彼らが退却したとは考へられません。また、「元史」(「元史日本伝」岩波文庫)には次のやうに記されてゐます。

「十一年（一二七四）三月、（中略）千料舟（二百人乗りの大型船）、巴圖爾（蒙古語、勇ましいこと）軽疾舟・汲水小舟各々三百、共に九百艘を以て、士卒一万五千を載せ、期するに七月を以て日本を征せしむ。冬十月、其の国に入り之を敗らんとするも、官軍整はず、又た矢盡き、ただ四境を虜掠して帰る。」

十月に日本に入り国を取らうとするが失敗した、その原因は「官軍整はず、又矢盡き」と記してゐて暴風雨については記してゐません。以上のことから、高麗軍の軍艦が狭い博多湾を夜間に脱出しようとして座礁したことはあり得ることですが、その原因が暴風雨であつたかどうかは不明と言ふべきでせう。勿論、高麗史に暴風雨と記されてゐる以上そのやうな報告がなされたことはあり得ることですが、それは又別問題です。それよりも九百艘の軍船が何故に夜間博多湾を脱出しようとしたかが問題なのではないでせうか。暴風が吹いたか否かは別にしても、彼らの様子は敗退後の博多湾緊急脱出と考へる方がより正確なのではないでせうか。

《結論》暴風雨が原因で退却したとは考へられない。

④「大宰府まで退却した」：日本軍は大宰府・水城まで退却したのか。

このことは山川出版社の教科書には記されず、明成社のみ記されてゐますが、一般的に

はそのやうに理解されてゐます。これも出典は「八幡愚童訓」です。

「日モ暮方ニ成シカバ、彼方かなた此方ニ私語ささや始リシ。何事哉ラント恠ムニ、武力及ビ難ク、水木ノ城（今の水城）ニ引籠リ支テ見ントノ逃支度ヲ構ケリ。是ヲ聞テ我先ニト落シカバ、一人モ逗とどマル者無シ。」

「暮方」と言へば先に記したやうにすでに元軍は退却してゐたのですから、追撃してゐた武士は勿論のこと状況を把握してゐる人々はこのときに退却する必要はないはずで、ですからこのことは戦況とは関係がなく、教科書に記載する必要は全くありません。

《結論》博多は戦場にはなつてをらず、主力の武士が退却する必要は全くない。

⑤「しりぞいた」「退散した」：元軍は「自発的に」しりぞぎ・引き揚げ・退散したのか。文永十一年（一一七四年）十月二十日の日中に実際に何が起つたのか。「蒙古襲来絵詞」の記述は白石六郎に助けられたところで終つてゐます。そして夕刻には元軍は退却してゐる。この間の事情を語る史料を佐藤教授が発掘されたので、それを紹介したいと思ひます。

その一つは『福田文書』で、肥前国彼杵そのま荘の御家人福田兼重の建治元年（一二七五）九月廿五日付申状（下位者からの上申文書、訴訟時に原告が出す訴状。「中世九州社会史の研究」外山幹夫、吉川弘文館）で、次のやうに記されてゐます。

「右、去年十月廿日異賊等襲来渡于寄来畢早良郡之間、各可相向当所蒙仰之間、令馳向鳥飼塩浜令防戦之処、就引退彼山（凶）徒等、令驅落百路原」

後半部分は「鳥飼塩浜に馳せ向かはしめ防戦せしめるのところ、彼の山（西新の鹿原山）の凶徒等引き退くにつき百道原に駆け落とさしむ」と、百道の海岸に駆け落とすと報告してゐるのです。

次は『日田記』（芥川龍男、財津永延編著 文献出版）で、これは豊後国の御家人日田氏の子孫が古文書を元に江戸時代に記したのですが、次のやうに記されてゐます。

「文永十一年十月二十日蒙古ノ賊襲来ス 日田弥二郎永基 筑前国早良郡二軍ヲ出シ 姪ノ浜百路原兩処ニ於テ一日二度ノ合戦ニ討勝テ異賊ヲ斬ル事夥シ」

百道とさらに西方の姪浜で二度の合戦に勝利したと記されてゐますが、この二つの文書の発掘は大きな価値があるもので、十月二十日の午後の状況が初めて明らかになつたのです。つまり、百道等から上陸した元軍は鹿原山に陣を敷き、一部の軍勢を博多に向けて進撃させて赤坂（現福岡城跡）まで到達するのですが、菊池氏によって追ひ落され、鹿原山に引き揚げる途中で竹崎季長や白石六郎の攻撃を受け、さらに鹿原山を追ひ落された後、百道と姪浜で戦つて敗れて海上まで追ひ落されたといふことになるのです。勿論この過程では大將少貳景資

が率ゐる日本軍の本隊も参戦してゐるでせう。この一連の流れを佐藤教授は略図「**文永の役**」の**進行図**にまとめてをられますので、それを紹介します。福岡の地理に明るい方には、今も残る当時の激戦地の地名を見て感慨を覚えることと思ひます。

ところで、先に記した元史の「官軍整わず、又た矢盡き」や高麗史の「暮れに及びて乃ち解く」をどう理解すればよいのでせうか。これらは生還した者からの報告に基づくのでせうが、敵地上陸しながら目的を達成できず、その日の内に撤退したことを「敗北した」との報告ができない以上、何らかの説明がなされたのでせう。「官軍整わず」や「乃ち解く」の言葉には、混成軍故の不和や混乱によって撤退したとのニュアンスがこめられてゐるやうに思ひます。しかし、「矢盡き」の一語に



は戦闘においても敗北してやむなく撤退したとの無念の思ひも込められてゐるやうに感じます。

《結論》博多北方の沖の浜で待機してゐた日本軍は、赤坂まで迫つた元軍を敗走させて龜原山から追ひ落し、さらに百道や姪浜の戦ひで勝利して、わづか一日で撃退した。

「元寇」余話—もし一時的にせよ、モンゴル勢が居座つてゐたら…

それでは中華人民共和国や大韓民国の高校教科書には日本への遠征をどのやうに記してゐるのでせうか。まづ韓国の教科書を見てみます。

朝鮮の国々にとって北方の紛争は不可避のものでした。高麗王朝においても建国した十世紀以来、契丹、女真族、モンゴル族との絶え間のない紛争がありました。一、二七〇年、モンゴルに屈服してその支配下に置かれます。教科書にはモンゴルとの抗争に活躍した人物や勢力として「金允侯^{キムユウ}」や「三別抄」をあげてゐます。特に三別抄はモンゴルへの屈服を拒絶し珍島や濟州島に根拠地を移しながら徹底抗戦を貫きましたが全滅します。ただ、興味深いことに、この勢力は我が国に対して兵力と食料の支援を求めてきたのです。我が国はその間

の状況を理解することができず、これに応へなかつたのですが、すでにフビライの国書は我が国に届いてゐた時期でもあり、我が国との連携も可能だつたとも思ひます。

元寇については次のやうに記されてゐます。しかし「モンゴルと講和して以後、高麗は二度実施されたモンゴルの日本遠征に軍隊と物資の提供を強要された」（『高等学校国定国史』日本語版「韓国の高校歴史教科書」明石書店、二〇〇四年）と記すのみで、その結果についても言及してゐません。「金允侯」や「三別抄」が対モンゴル抵抗の勇者ならば、同じ立場にあつた日本の対モンゴル戦における妥協なき戦ひと撃退について記すべきではないでせうか。この教科書で学んだ韓国の青年は後年日本の元寇の歴史を知つたときに、恐らくは理解の道筋を持ち得ないでせう。

次に中華人民共和国の教科書ですが、「日本出兵」（元寇）には全く触れてゐませんし、高麗への侵略にも全く触れてゐません。それに対して、チベットには多くの記述が費やされてゐます。一部を紹介します。

「統一的多民族国家の発展」の項目に「今日の新疆、チベット、雲南、東北の広大な地域、台湾および南海諸島はすべて元朝の統治範囲の中にあつた。元朝の領域は現在の中国の版図にとつて、第一段階の基礎を定めたものであつた」（人民教育出版社歴史室『中国古代史』日本語版

「中国の歴史」(明石書店二〇〇四年)。又「元朝の時チベット族地域が正式に中国の版図に入った」との記述や「モンゴル族はわが国北方の悠久の歴史を持つ民族である」との記述もあります。中華人民共和国は自国の歴史を「統一的多民族国家の発展」として把握しようとしてゐます。「秦漢は多民族の国家であり、辺境民族の発展にしたがって、各民族の文化も鬱勃として発展してきて、統一の前提下に多様な風俗を持つ秦漢文化を形成した」とあるやうに、秦漢以来の多民族国家を強調し、今日のチベット等の異民族支配を正当化するのです。このことは日本人の「中国」に対する印象とは大きく異なつてゐます。日本人の印象では「中国」は孔子や孟子を生み漢字を發明した国で、漢民族の国家なのです。だから北方民族であるモンゴルが中国全土を支配したときに、最後まで抵抗した南宋の遺臣の悲しみを共有できたのです。ところが多民族国家論に立てば、モンゴルもチベットもウイグルも、すべての周辺諸民族は本来統一されるべき、多民族国家の一部に成り下がってしまひます。それでは、外モンゴルに現存するモンゴル国や朝鮮半島の国々は多民族国家の中に入つてゐるとでも言ふのでせうか。数年前、「高句麗は歴史的に中国である」とする主張に韓国などが激しく反撥した出来事がありました。ならば楽浪郡や带方郡の故地は多民族国家の立場からすれば本来どこに帰属すべきと言ふのでせうか。

これらのことは実は他人事ではないのです。先に記した教科書に「元朝の領域は現在の中国の版図にとつて、第一段階の基礎を定めたものであった」との記述があったことを想起してください。もしも元寇において日本軍が敗れ、九州の一部にでも彼らの勢力が居座ることがあったとしたら、それは彼らの言ふ「元朝の統治範囲」となってしまうのであります。

これら中華人民共和国の歴史的國家論を彼らはどのやうにして導き出してくるのでせうか。最後に教科書中の「歴史教育の目的」の記述を見てみませう。

「(本書編纂の) 目的は学生にいつそう歴史を認識する方法を掌握させ、唯物弁証法と史的唯物論の基本観点を運用して、問題を解決し、運用する能力を高めさせることにある。国情をいつそう良く理解して社会主義国をいつそう熱愛するようになり、中国の特色を持つ社会主義を建設する信念を固め、わが国を富強、民主、文明の現代化した社会主義国として建設し、また、世界の平和、正義と進歩の事業に献身する精神を樹立することにある」

唯物弁証法や史的唯物論などの言葉は、彼の国では未だ死語にはなつてゐないので。それらの「基本観点を運用して」、かれらが周辺諸国や世界に対して今後何を仕掛けてくるのか、私どもは注目し続けると同時に、いかなる仕掛けに対してもそれを拒絶し、撃退する意志と力を持ち続けなくてはならないと思ひます。そのためには、竹崎季長が発した「弓箭の道、先

をもて賞とす。ただ懸けよ」の気概と、菊池武房に「たれにてわたらせ給候ぞ、すゞしくこそ見え候へ」と声をかけた天性の明るさを我がものにしたいと切に思ふのです。

講義

この国はどこへ行くのか

京都大学大学院教授

中西輝政



はじめに

「JAPAN AS NO.3」

中国の台頭

新しい日本人の登場を

インテリジェンスの重要性

何をすべきか

【質疑応答】

はじめに

日本といふ我々の祖国が今非常に心許ない状態に陥ってしまつてゐる。

我々は日本の立て直しにどのやうに關つていくべきか、何が一番、この日本の再生の鍵を握る問題なのだらうかについて、今日は三つの柱でお話をさせて頂かうと思つてをります。

第一は、演題にあるやうに、この国はどこへ行くのかといふことです。今日日本は大変な状態になつてをります。何が何故に大変なのか、いつの間にこれ程状態が悪くなったのか、導入としてお話しします。

二番目は、この日本の現状に臨んで、我々はどのやうに關つていけばいいのか。日本の危機に際して、幕末の吉田松陰のやうな我々の先人が、国の立て直しにどのやうに關つたか、現在の日本に即して言へばどういふことなのかといふことを考へてみたいと思ひます。

三番目には、若者が、今の状況をどのやうに見立て、どのやうな知識、そして学びや働きが求められてゐるのか。どんな日本に立て直さなければならぬのか。以上の三本の柱で今日は話をすすめさせて頂かうと思つてをります。

[JAPAN AS NO.3]

まづ最初に、この国はどこに行くのかといふことです。「国の盛りに人となり国衰へて老いとなる」。これは佐藤春夫が大東亜戦争の敗戦直後に詠んだものです。私も今年満六十三歳になりました。団塊の世代の一人です。人となったときは高度経済成長の真つ盛りで、高校二年生の時に東京オリンピック、大阪万博は大学四年生、東海道新幹線ができドイツを追ひ越して世界第二の経済大国になったと言はれた国の盛りに成人した世代です。勤めてゐる大学も来年定年退職です。

しかし翻つて、今の日本の状況を見ると、このまま老いさらばへて朽ちるわけにはいかない。一見、この国は「まだもつてゐる」かのやうに見えます。しかしこの国は今、静かに、あるいは音を立てて崩れてゐます。しかも今の日本人の心象風景はどうでせうか。国際関係、経済、教育、社会問題など、目に見えないものはどうなつてゐるのだらうか。ヨーロッパの新聞に「JAPAN AS NO.3」と書いてあった。このままいくと間違ひなくNo.4、No.5になる。欧米のマスコミが、「世界一の長寿」を誇つてきた日本で、百歳以上の高齢者が実はほとんど



生きてゐなかつた、まさに統計の欺瞞だ、と面白をかしく書いてゐるやうに、家族の崩壊を象徴する事件が頻発してゐます。

今、円高株安が続いてゐますが、おそらくアメリカも今年後半には経済が非常に悪くなるでせう。中国の経済も今年から来年にかけて陰ってくる。ヨーロッパの通貨もをかしくなってくるでせう。ユーロ通貨も破綻するかもしれない。今年の前半にはギリシャ危機がありました。深刻なのは、アメリカと中国の経済が悪くなつてくると、輸出に頼つてゐる日本にとっては打撃です。冷戦構造が終つて二十年も経ち世界経済の環境は悪化したのに、日本の産業は輸出中心になつてしまひ、輸出でしか稼げない、自前では食べていけない日本になつてゐる。

民主党は、昨年夏、大判振る舞ひのマニユエス

トを掲げて選挙に勝ちました。無駄を省けば十七兆のお金がある。子ども手当も何もかもできると言つてゐた。ところが菅直人内閣になると、舌の根も乾かぬ内にマニフェストを修正して消費税を引き上げますと言ふ。選挙人に向かつて真つ赤な嘘をついた。どうにもならないなら責任を取るべきでせう。議会制民主主義はモラルがベースです。政党政治が崩れかかつてゐるといふことを実によく表してゐます。

財政の問題もさうですね。財政の逼迫は今に始まつたことではありません。これまで余りにもなほざりにしてきた。やがてこの国は借金で立ちゆかなくなる。日本の国債は国内で消化してゐるから大丈夫だと言つてゐたが、中国が隠れて買ってゐる。株も下がりさうで下がらないのは中国がかなり日本株を買ひ始めてゐるからです。日本は借金だらけで円高になり成長が止まってデフレだといふのに中国だけが買ってゐる。

また、世界中がリーマンショックの余波を受けて失業率が高止まりして下らない。日本経済のやうにデフレが各国に広まっていくでせう。民主党政権を早く終らせて経済政策を一転させないと就職、雇用の問題に直結します。若い人の雇用が心配です。一方、これだけ円高になると、国内で最後まで頑張つてきた日本企業がもうだめだと悲鳴を上げて外国に逃げていく究極の空洞化現象が目の前に起らうとしてゐます。大勢の若者の雇用がかかつてゐるし、

国民全部が関ってくる問題であり何が何でも円高は阻止するべきです。

今回の円高は政治の無策を実によく表してゐます。日本銀行がどんどん貸し出しを増やし、国債を買ふことによつて円安に仕向ける。これしか方法はないしこれなら簡単にできる。世界では、通貨引き下げ競争をしてゐます。自国通貨を安くすると輸出が有利になるからどんどん自国の通貨を切り下げていく。ついこの間まで「ギリシャ危機」を報じた日本の新聞・テレビは、ユーロが大幅に下落しヨーロッパは大変だといふ報道をしてゐました。ギリシャでデモが起つて大変だ、パルテノン神殿の観光がストップしたとニュースになってゐました。これが面白がつてゐていい訳ではなかつたのです。ヨーロッパでは、将来的にユーロは信用ならないと思はせた。さうしたらユーロが世界中で売られてユーロ安になつた。言ひ換へれば円高、ドル高になつた。するとアメリカはこれは大変だと、ドル安に誘導した。すると何もしない円が勝手に円高になつて独歩高、いはば日本は、「ばばくじ」を引かされ、一番損をしてゐる。政治力がない、決断できない、国益を守らうといふ気がない証拠です。

オバマは「五年間でアメリカの輸出を倍増する」、「物作り大国アメリカの復活」と言つてゐます。宗旨替へが早いですね。ついこの間まではマネーゲームのアメリカと言つてゐたところが金融で稼ぐなんて不健全だ、マネー経済は危なくてせうがないから、これからは「物

作りに回帰します」と。その手始めに巨大自動車メーカーGMの再建に乗り出しました。アメリカはあれほど金融に特化した国だったのに物作り大国になれるのかと思ひますが、一応はやる気のやうですね。リーマンショックを機に、今のアメリカは「金融立国で、ウォール街が稼ぎ頭」といふ時代は終った。

このまま放置すると大変な大波が来ます。普天間問題の騒ぎどころではない。日本の総理大臣が何回替ったってかまひません。外国では、「日本の総理は頻繁に替はる」ことは、もう二十年も前から日本のトレードマークになってゐる。いまさらそんなことは恥ではない。私は個人的にも、今の政権は一日でも早く更迭しなければならぬと思つてゐます。

中国の台頭

日本を取り巻く情勢で、今一番目に付くやうになつてきたのは、中国海軍の増強と海洋進出といふ問題です。普天間問題なんてごく小さな問題になつてしまひました。日米の同盟関係は、偏にアメリカと中国の軍事バランスにおいて、アメリカが優位であり、アメリカに守つて貰ふといふことにおいて意味を持つわけです。ところが、軍事力の増強を続ける中国は、

最近、マラソンで言へば「アメリカの背中が見えてきた」と考へ始めてゐます。ですから色んなところで中国のアメリカに対する態度は急変してゐます。アメリカは、中国に対して本当に弱腰になってしまつてゐます。その穴を埋めるのは今や、日本の防衛力の増強でやるしかないのです。つまり、アメリカの対中抑止力に穴があき始めたのです。

三月に韓国海軍の哨戒艦が撃沈された。北朝鮮の潜水艦がやったと五月に国際調査団も報告で言つてゐますが、日本政府もアメリカも北朝鮮がやったと断定した。これを繰り返させないために、米韓合同軍事演習をこの間日本海でやりました。しかし何故日本海でやったのか。韓国の哨戒艦が沈められたのは黄海でした。それ故最初黄海でやる予定になつてゐたのに、「黄海は北京の玄関口である、航空母艦の演習は絶対許さない」などと中国が抗議をした。そしたらアメリカの国防総省は航空母艦は参加させず、また、ステルス機能を持ったF22といふ最新鋭の第五世代戦闘機を沖縄にもつてきてこの演習に参加させることで辛うじて抑止力を見せつけようとしたのですが、沖縄の嘉手納基地まで来て常駐してくれるか、と思つてゐたら、いつの間にかゝるなくなつてしまひました。あんなへっぴり腰の演習は見たことがありません。中国の反撃を怖がつてゐるこんな弱腰のアメリカ海軍といふのは少なからずショックでした。つまり、中国が軍事的な大拡張に乗り出してきてゐるといふ大きな流れと、こ

のアメリカの弱腰とは無関係ではありません。

日本でも問題になりましたが、四月には中国海軍は、排水量八千トから九千トのあらゆる方向に向つてミサイルが撃ち出せる最新鋭の駆逐艦を二隻。そして日本の海自でも探知できないやうな音の静かな最新鋭のキロ級潜水艦を二隻。さらに他の軍艦を合せて合計十一隻の大艦隊で、沖縄本島と宮古島の間を通り抜けて西太平洋に出て、 Guam 島までの中間点にある沖ノ鳥島といふ日本領土のすぐ側で初めて大きな演習をしました。アメリカ艦隊でもそんな大艦隊で来たことは最近はありませんから、日本の自衛隊が監視に行くのは当たり前のこととせう。ところがその監視をしてゐた海上自衛隊の護衛艦に対して、中国海軍の駆逐艦のヘリコプターが飛んできて、護衛艦に九十メートルの距離まで近づく。これを一週間に一回づつやったわけです。これは冷戦中の米ソ間でもやらなかつたすごい挑発行為です。近年、こんな好戦的なことを世界の主要国がやったといふことは聞いたことがありません。

これはもう日本の特に民主党政権の弱腰、普天間問題をめぐる日本の外交政策の迷走、日米同盟関係の亀裂、アメリカの弱腰など見越してやつてゐることは間違ひない。

しかし、つい先日、アメリカ政府から「今年の末までに中国は航空母艦の建造に着手する」といふ中国の軍事力に関する報告が出ました。これを見てみると、おそらく二、三年の内には

中国海軍の航空母艦が沖縄周辺を常時練習航海する。あるいは、二〇一二年か一三年には実戦配備で出て来る。沖ノ鳥島、あるいは五島列島沖、さらには八丈島、硫黄島はもちろんのことですが、伊豆七島周辺のあたりに中国海軍の航空母艦が日常的に遊弋ゆうよくするやうになれば、米海軍の抑止力は崩壊する。横須賀に空母ジョージワシントン一隻で居続けることができるでせうか。中国は本土に弾道ミサイルを持つてゐて、アメリカの軍艦に向けて発射したら、ものすごく正確な標的を攻撃できるやうになってゐる。さういふあらゆる種類の軍拡を中国はやってゐる。大陸からミサイルを撃てば、アメリカから太平洋を渡ってくるアメリカ海軍の航空母艦その他の軍艦は十中八、九の確率で命中する。大量に発射する弾道ミサイルは防ぎようのないミサイルです。これは大変な脅威です。中国の人民解放軍は、F22なんかと対抗できる第五世代戦闘機を二〇一八年までに実戦配備すると発表しました。もうすぐです。あと五年といふ人もあれば、七、八年、いや十年は行けるだらう。いや中国海軍は空母の運用なんかできない。「へまばっかりやるに決まってる」といふ人がゐます。しかし、遊弋してゐるだけでいいのです。もしこれで日本人や韓国人が考へ方を変へ中国になびくと、アメリカはこの地域にゐる根柢はなくなるわけですから。むしろ、「これからは中国だ。国債も買って貰つてゐるし。液晶テレビも観光客も来て貰つてゐるし」とアメリカが考へたら、この中国

の膨張に日本はどうして抵抗できますか。気がつくなら今がぎりぎりです。五年経ったらもう遅いと思ひます。

日本の防衛費はご承知の通りです。イギリスやドイツのやうな財政が悪化した国でも軍事費だけはかなりのスピードで増やしてきました。世界中の国が十年ほど前から軍拡、軍事能力の強化に乗り出してゐる。日本だけ世界の主要国でこの十年、唯一軍事費を減らし続けてゐる。何でこんなことをするのか。この十年ですから、何も民主党政権になってからではない。自民政権の時代からこんなことをやってゐる。小泉内閣などは「日米同盟バンザイ」と言つてゐたのに防衛支出は減らし続けた。要するに、自立心をなくしてゐるからです。

日本が一番世界中で競争力を持つてゐる産業といふのはハイテク兵器です。防衛産業は、日本がこれから生きていく一番有望な分野の一つです。雇用は裾野まで広げるとものすごく広がります。武器輸出の自由化といふのに霞ヶ関でも少し動き出してゐますから、少しづつでせうけれども武器も輸出できる国になってくる。物作り大国として世界のなかで、日本の産業の基盤を作るために、今後日本の防衛力を増やしていけば、防衛産業の先端の技術といふのは、経済成長の基盤を確保し、日本人の雇用も確保することができます。私は、何も雇用とか国際収支とかそんなことのみを言つてゐるのではありません。日本の独自の防衛力増強

といふこと以外に、現状の悪化した国防に少しでも対処できる方法は他にないからです。アメリカは日本のやうに急速に財政悪化が進んでゐますので、到底軍事費は増やせません。軍事費を五年間で四割減らすと言つてゐます。アメリカは「普通の国」になる。軍事大国アメリカが少しづつ並の大国になっていきつつあります。

ところで、皆さんの大学はこの秋からおそらくパニック状態になると思ひます。来年の四月になると大学がゴーストタウン化といふとちよつと大げさですが、研究室の火が消える。実験設備が動かせない。財政悪化が進んで、いはゆる大学の経常費10%削減といふ政策が採られようとしてゐます。現在、日本の国立大学での年間の論文の数は、六年前の三割減になつてゐる。日本の大学の研究活動は三割も減つてきてゐる。法人化とか色んなことが災ひしてゐるわけですが、こゝにいふことを放置しておけば、おそらくこの国はやっていけなくなると思ひます。

教育の崩壊現象も深刻です。我が子を閉ぢこめて育児放棄をして、遊び歩いてゐた母親を「未必の故意」と認定して警察は殺人容疑で送検しました。当然です。これは教育と社会の崩壊現象である、マスコミの言ふ通りでせう。何が一番足りなかつたのか。この二十年間の政治の混乱といふのが一番の問題で、民主党政権はつひに参院選挙に負けて誰も責任を取らな

い。何もかもがストップしてゐる。八月といふと予算編成の時期で政治と行政の中樞はフル回転してゐる時期ですが、今年だけは民主党代表選待ちで開店休業してゐます。新卒者の就職問題を考へる人は大学関係者以外ゐないんでせうかね。結局、政治の混乱が財政と経済、教育や国防を危うくさせ、日本の若者のポテンシャルを次々に奪つてゐるのです。

新しい日本人の登場を

以上見てきましたが、この国がどこに流れて行かうとしてゐるのか。答へは明かではないでせうか。「構造改革」をやればいいとか、「政権交代」をやればいいとか、そんなことではないと、日本人はほぼ分つてきたと思ひます。政権交代して日本はもっとダメになつた。しかし、今さら自民党に戻ることもしない。では、どうしたらいいんでせうか。

私は、今の日本は、ほとんど安政五年（一八五八）くらゐの状況ではないかと思ひます。ペリー来航以来五年経つてゐる頃ですね。「攘夷といふこの国の原則はどうなつたんだ」、孝明天皇はかうおっしゃつて幕府を叱責なさつた。関ヶ原、徳川幕府始まつて以来の大変動が起り始めた。かといつて黒船と戦争するわけにも行かない。こゝういふ状況下で井伊直弼が出て

くる。こういふ人物といふのは歴史上色々たと思ひます。さかのぼると古いところでは平清盛。平気で後白河法皇を押し込めるやうなことをする。その他にも、この国のあり方、特に天皇と臣下とのあるべき距離感を無視してどかどかと踏み込んでいった足利尊氏、義満といふやうな人物もゐました。頼朝などは、きちんと皇室を尊重しその上に立って政權を委任して貰つてゐるといふ建前はあくまで守り通さうとしてゐた。ですから源頼朝は武家政權の創始者ですが、この一点の評価では今でも価値があると言つてもいいでせう。

結局、日本といふ國をどう考へるか。ここがなくなつてゐるので、現在の混迷が起つてゐる。幕末のやうに、日本の本当のあり方を踏まへた「新しい日本人」が出てこなければいけないと思ひます。尊皇攘夷といふのは外国人を追ひ払ふ、あるいはただただ天皇陛下をいただく神国日本をけがす戎えびすを打ち払ふ、といふこれだけの論理ではない。これだけならどこの國にもある単なる排外主義です。単純なお国自慢です。幕末の「新しい日本人」を生み出す原動力になつた一つの例が、松下村塾、吉田松陰先生の切り開いた地平だつたと思ひます。

吉田松陰の教育といふのは、国体教育、すなはち日本はどんな國かといふことを、高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文などに徹底的にたたき込んでいった。しかも、これだけで終らな

った。現実の政策についても一所懸命考へてゐた。日本の大砲はこれだけの口径である。それに対してペリーが積んできた黒船の大砲はこんな大砲であることなども、松陰は、とうにオランダ語の文献で知つてゐるわけですね。この国の運命を守るには自分しかゐない、だから蝦夷地を見に行くんだ。もしロシアが入ってきたらどこに大砲を据ゑるのか。こんなことを考へながら、自分自身の全存在をかけて日本国中を松陰は歩いた。自身の生き方が国の運命と直結してゐたわけですね。まだ二十歳代前半、ほんの長州藩士の端くれにすぎない立場なのに。

私の言ふ「新しい日本人」とは、この日本を守るために今、中国海軍がどんな航空母艦を造つてゐるのかなど、政府に頼つてゐられない。自分で中国の軍備を調べに行かなければ、この国は危ない、と決意する。こういう日本人が私の言ふ「新しい日本人」なんです。あるいは、停滞しどん詰まりになり出口なしの衰亡に陥つた今の日本が立ち直る担ひ手となる、さういふ種類の人間です。このやうな日本人は、いつの時代でも繰り返し繰り返しこの大和の列島から雨後の竹の子のやうに出て来る。吉田松陰の言葉に、「尊皇なるが故に攘夷にあらず、攘夷なるが故に尊皇たらざるべからず」とあります。松陰にとつての攘夷は単に外国人を追ひ払ふといふことではありません。大事なことはやはり、産業革命以降、帝国主義各国がお

互ひに競ひ合つて自国の生存と繁栄を圖つていかうといふ大競争の時代に日本も乗り出していく。勝手に江戸湾まで入つてきてさあ条約を結べ、石炭を補給しろ水や薪をよこせ。これは侵略ですから、対抗する力をつけて侵略者を追ひ払つて独立を維持する、これが松陰の攘夷です。これは松陰だけでなく幕末尊攘志士の大戦略はそこにあつた。これを歴史学者は「開国攘夷」と言つたり、「大攘夷」と言つてゐます。日英同盟を結んでロシア人を追ひ払つた日露戦争はまさに開国攘夷の完成形態であつた。明治といふ時代は、尊攘志士がそのままストリートに日露戦争を戦つた。そして最後に結果を出した。こゝにいふことだらうと思ふんですね。

これからは、「戦略の思想」といふものがなければなりません。国粋の理念と共に戦略にも強い日本人にならなければならぬ。吉田松陰はまさに山鹿流の兵学者、つまり戦略思想家でした。山鹿素行に発する鍛へ抜かれた武士道の日本的エリートスです。それは外敵と戦ふときに求められる能力や手腕と共に、それを支へる日本精神といふものを考へ抜いたのが山鹿流兵学でした。山鹿素行といふ人は武士道の根本精神といふものを考へ抜いた人でした。強者といふのは心と手腕が両立し、それらは一であつて二でないといふこと、これが日本の戦略思想の原点だらうと思ふのです。手腕、戦略と国民精神が一つになったときにものすごい

可能性を發揮する。西郷隆盛はそのことを繰り返して言つてゐます。この点での西郷隆盛の模範はあくまで楠正成でした。

いづれにしてもこれからの「新しい日本人」に求められる資質は、まづ何よりもしっかりとした日本のアイデンティティを掴んだ若者です。政策戦略を語る人は多々ゐます。我が自衛隊にも立派な戦略家は一杯いらつしゃいます。しかしその中に「心を持った戦略家」とただの戦略家がある。二年前の田母神空幕長の事件が起つたときにはつきりと思ひ知らされました。我が自衛隊にも戦後の古い日本人とこれからの「新しい日本人」の二種類の日本人があると思ひました。

インテリジェンスの重要性

最初に申し上げたやうに、こんなに危ないところにこの国は来てゐる。目には見えないかも知れない。しかし、明日この国の財政が崩壊してもをかしくないでせう。あるいは明日、中国海軍が尖閣に上陸しても私は少しも驚かないでせう。そのとき、アメリカの機動部隊がハワイを出航したと聞いたなら寧ろ驚きますね。意地悪い見方かも知れませんが、私は尖閣など

領土問題ではアメリカに余り期待しない方がいいと思ひます。

中国人の学者が先日京都大学に来たとき、中国は第一列島線と第二列島線のその外に出ていこうとするんだらうといふ話をする、「もちろんさ」と言ふんですね。第一列島線をお前は知ってゐるかと言き返してくるから、教科書に書いてあるやうなことを言つたら、「いや違ふ」と言ふ。第一列島線といふのは対馬に始まり、九州西岸の米海軍基地がある佐世保を通つて沖縄本島、宮古、石垣など八重山諸島そして台湾を結ぶ線だと言ふ。「日本海も我々の目標に入つてゐるんだ」とたたみかけて言ひますので、それ以上は耳を塞ぎました。政府の立場を代弁するやうな学者なのに、日本の専門家にそのやうなことを平気であからさまに言ふほど、不用心、不躱といひますか、「中国の国策が變つたな」と思ひました。鄧小平以後、今までは中国脅威論を助長しないやう持つてゐる力を隠しておくびにも出さず経済発展一筋でいく政策をアピールしてゐました。

このやうに考へてくると、世界の中で、東西南北からプレッシャーをかけてくる諸外国の挟間にあつて、日本が一国でも立つていけるやうな国になるためには何が必要か。若い日本人がこの国のあり方を真剣に考へ、「日本といふ国に生れて良かった」、「この日本人の共同体を次の時代にも継続させて行かねばならない」、そのことを身にしみて理解し始めてゐる日本

人は今何をしなければならぬかを一人一人が考へるときでせう。そこで、具体的に言へば、国難を救ふ新しい日本人を考へると、行きつくのはやはり吉田松陰の哲学です。

本来の日本を取り戻すために何が必要かといふことを考へるためには、その出発点として、まづ、日本人の心、この国と自分が切り結ぶほど一体になつてゐるといふ一体感を育てなければなりません。その上で、この国が古来受け継いできたものの素晴らしさを知り、それを残したい、たとへば皇室のあり方を真剣に考へ、それを守つていかなければといふ気持ちで自覚した上で、国際政治や安全保障を考へる。こゝにいふアプローチといふものが皆さん方の世代の日本人に一番求められてゐて、その上の世代が一番欠いてゐるものです。日本には能力のある人は一杯あります。しかし、心のない日本人が多すぎる。テレビのチャンネルをひねれば竹中平蔵さんのやうにペラペラ喋れる評論家は山のやうにゐます。しかし、どの人も日本人の心をどこかに置き忘れてきたかのやうなただの評論家に過ぎなくなつてゐる。政治家も官僚もいまや同類の人種ですね。顔に書いてあります。「軍事オタク」といふ言葉がありません。軍事オタクといふのは一点抜けてゐるからでせう。それは、日本人の心、日本精神、日本の歴史文化などが欠けてゐる人です。日本文明への一体感の上に立つて、将来自分の知識をこゝにいふ風に役に立てたい、といふ全体像をもつて軍事問題を勉強する人は軍事オタクで

はありません。それを実践する人は昔の言ひ方で言へば志士です。坂本龍馬以上の志士です。金融の問題も同じです。次の時代、日本の国を攻め滅ぼすのはおそらく、北朝鮮のミサイルよりは中国の金融パワーかも知れません。この阿蘇の山林をあるいは水源地を上海マネーがあるいはロシアマネーが、影で動き回ってゐるでせう。日本の国土が金で侵略されてゐるのです。こんなことが起つていいのか。近代史になかつた事例が日本列島に押し寄せてきてゐる。あるいは日本の企業が次々に外資に買収されていく。日本の国債が中国、韓国、あるいは北朝鮮に買はれる時代が来るかも知れません。北朝鮮が世代継承して三男キムジョンウンに移ったとき、おそらく「改革開放政策」に打つて出る可能性があります。そのとき中国よりもっと速いスピードで経済発展するでせう。経済的に恐ろしいパワーを持った統一した朝鮮半島が誕生するかも知れない。ロシアだつて資源大国です。リーマンショックを乗り越えて大変な資源で金を集めてゐる。チャイナマネー、ロシアマネーによつて国が買ひ取られていく。幕末維新の日本人は、「外国に金を借りたら終りだ」と分つてゐたから、一所懸命地租改正をやり日清戦争の賠償金などあらゆるお金で旧幕府が借りた借金を返していくことに振り向けたわけです。

日本の周辺環境は本当に厳しい。よく「スウェーデンの福祉は充実してゐる」と言ひま

すが、周りにどんな国がありますか。みんな普通の国です。そんなに軍事支出もいらぬし、魂胆をもつてスウェーデンの経済を牛耳らうといふ国はない。それでもGNP比でものすごい軍事支出をしてゐますし、兵役法まである。日本は、ロシア・中国・北朝鮮に囲まれた最悪の環境にあります。この三国のことを旧日本陸軍では「露華鮮」といつて、ロシア語、中国語そして朝鮮語この三つの言語に徹底的に詳しくなれと言ひました。「三大敵性国」といふことでせう。つまり、情報活動、インテリジェンスです。こんなに危ない環境にある日本は、かうした脅威の対象に対してしつかりとした情報を集めなければならぬ。当り前のことですね。明治の初めから日本政府は、シベリアや中国の奥地に情報収集のためスパイ工作員を繰り返して送り込んでゐた。そして多くの日本人が現地で発覚し処刑されて亡くなりました。闇から闇に葬られ、名誉も何もない。日本政府のために働いたことが発覚したらいけない死に方をしてゐますから、靖国神社に祀つてさへ貰へない。こんな死に方を覚悟する、といふのは並大抵でできることはありません。しかし明治大正昭和の日本人にはゐたんです。一言で言へば国際環境の余りの厳しさのゆゑです。さうならざるを得ないやうな環境に、当時の日本はあつたのです。誰だつてそんな危ないことはしたくない。しかしそれをせざるを得ないやうな時代が、今また、再び我々の目の前まで来てゐます。

何をすべきか

結論的に申し上げると私の言ふ「新しい日本」は、何をすればいいのか。まづ第一の日本の伝統と誇りをしっかりと踏まへた心を持ち、その上で政治の現実に切り込んでいくやうな日本人がたとへ少数でも出てこなければいけない。日本には自由民主党といふ保守政党はありますが、保守と言つてゐるだけです。自由民主党はもはや耐用年数が来てゐるのかも知れません。どうして日本には自由民主党の右側に本来の保守政党がなかつたんでせうか。民主党の左側には社民党とか共産党とかみんなの党とか色々あります。日本には日本人の党が本当にあつたんでせうか。自由民主党の中には、日本の保守のあり方を踏まへたやうな政治家は確かにゐます。しかし、この人達にいつまで期待していいんでせうか。この人達は、これほどの危機の中で、何故、日本の本当の再生を願ふやうな政治運動に立上らうとしないのか。自民党は本当に保守政党なのか。若い頃からずいぶん不思議に思つてをりました。自民党は大半は「中道利権政党」です。ときどき保守的なことを言ひ票を確保する。ときどき左っぽいことも言ひ日教組とも握手する。朝日新聞が来たら喜んで載せてくれさうなインタビュー

を喋る。これは世渡り戦略です。こういう政党が生き延びてきたことが、日本をここまで追いつめた原因の一つだらうと私は思ひます。

人によってはそれは言ひ過ぎだとおっしゃるかも知れません。しかし、私は自民党の人でも心ある日本人、国のあり方を真剣に考へる人ならこの発言は許して頂けると思ひます。それほど今日日本の政界の大再編といふものが必要とされてゐる。その意味では小沢一郎氏が民主党を飛び出して大分裂を起す、自民党も当然引つ張られて、大分裂を起す。有象無象がこれからぐちゃぐちゃなことをやっていく。ここで最も強いリーダーシップを取れるのは明確に日本再生の保守の旗印をもって一步も地歩を譲らない、旗幟鮮明にした真の保守運動だらうと思ひます。それが出てこなければ、自民党も元に戻らないし活力もなくしてしまふだらうと思ひます。

自民党も民主党も、もうかうなれば、否応なく割れるでせう。来年の春頃まで色んな形で現実化してくるだらうと思ひます。若い人たちはそのやうな政局の浮沈に一喜一憂するのでなく、これからは、軍事が語れて経済や金融についても詳しい、インテリジェンスも分る、さういふ「新しい志士」としての日本人を志す。しかし、松下政経塾の教育のやうな知識や遊泳術に偏重したものであつてはならない。あくまで日本人としての根本を踏まへた「新

しい日本人」が、修羅場と化す日本の政治の中にたとへ少数でもいいから抜き身をぶら下げて乗り込んでいく。これは何も年齢の若い日本人に限らないでせう。私はまもなく高齢者の部類に入ります。しかし、このままでは死にきれない。国の盛りに人となったんですから、国衰へてただただ老いさらばへるわけにはいかんと、今本当に意を強く自分に言ひ聞かせてをります。

【質疑応答】

質 一般的に旧帝国大学の先生方は社会主義的思想といふのが主流ですが、その中であつて先生がこのやうな考へ方を形成された背景をお聞きしたい。

答 イギリス留学が大きかつたと思ひます。国際政治を勉強しようと思へば、この国では学べないキーファクターが三つある。

第一は軍事力の問題です。とりわけ核兵器が今の世の中でどんな役割を果たしてゐるかを勉強することは、日本では御法度なんです。

二番目はインテリジェンス。情報活動です。来月『情報亡国の危機 インテリジェンス・リ

『テラシーのすすめ』（東洋経済新報社）といふ本を出します。今、学問的にしっかりしたインテリジェンス研究が求められてゐると思ひます。また、軍事力や経済力だけでは国は守れませぬ。吉田松陰もその重要性を繰り返して説いてをります。孫子について、松陰は我々に徹底的に註を沢山付けた孫子論を残してくれてゐます。何故、日本の政治家が中国、韓国にこへこしなければならぬか、インテリジェンス工作でやられてゐるからです。産経を除く全てのマスコミが文化大革命の時にほとんど中国に取り込まれてゐますから。これらのマスコミ工作を阻止しなければ、日本のマスコミはどうにもならないですね。

第三は国際金融に詳しくならなければならぬ。これは奥深い世界です。日露戦争に日本は何故勝てたか。高橋是清といふ当時の日銀副総裁がロンドンやニューヨークのお金を引っ張ってくる事ができた。日露戦争の勝利は金融とインテリジェンスの勝利です。明石元二郎が帝政ロシアを揺るがしロシア革命の端緒を作り出した。明石元二郎の対ロシア工作がなければ日露戦争には勝ててゐない。国際連合など上辺のきれいな事ではなく、本当に国際政治を動かしてゐるのはこの三つだらうと痛感してゐました。

質 日本国民の中から魂を抜いてしまったのは、実態を語ることなしに日米同盟が大事です

よと、同盟とは名ばかりの保護関係を唱へてきた保守系人士やマスコミであつて、反省すべきではないか。日米同盟が実態としては完全に保護非保護の関係にあつたそのことについてストレートに言つてこなかつたことが、現在の悲惨な状況をもたらしてゐるのではないか。

答 占領以来アメリカが日本を管理するシステムは、目に見えないあらゆる所に根を張つてゐる。さういふ工作網がある。左の方のコミンテルンやKGB、中共マフィアなどモスクワ、北京のラインだけではない。ここのジレンマが一番私にとつては大きかつた。

アメリカと付き合ふとき一番難しいのは、この国はまだたしかに日本を守つてくれてゐることです。小泉首相がイラクに自衛隊を出したとき、日本の安全は自分の国の安全と同じことだと考へてくれる国はアメリカだけだからアメリカのために出すと言つた。それは、眞実だらうと思ひます。憲法九条がそのまま残つてゐる日本でアメリカ軍に守つて貰はなくでどうやつて守るんですか。一瞬にして日本は丸裸になり、一日で国を取られる。誰しもアメリカの言ひなりになるのは我慢なりません、このギリギリの感覚といふものが、日本を動かしてゐる人はよく分つてゐると思ひます。ある有力政治家と内輪で話したことがあるが、その人は「アメリカのくびきから日本は自立すべきだと思つてゐる」といつたのでビックリした。「では、それを公に言はれたらどうですか」と言つたら「明日から永田町では生きていけ

ない」と言ひました。このクラスになると日米関係の厳しさがよく分つてゐる。アメリカが日本人を「見張つて」ゐることの本當の怖さが分つてゐる。これを知ると日本人としてこれ以上ないくらゐのジレンマです。

私が湾岸戦争のとき「アメリカの言ひなりで自衛隊を出すな」と言つたら学会からも外されました。主要な出版界や新聞社も注文してこなくなりました。学者の言論の筋はこれで決まつてくる。みな食べることに、有名になるために「日米利権」にへつらふのです。言論利権です。小沢氏が今すぐ、憲法九条の改正を唱へたら私は氏を支持する。憲法九条はわれわれの全てを縛つてゐる。中国の軍拡、北朝鮮の核武装を見て、「今すぐアメリカから自立せよ」といふ意見は国のことを考へてゐる人の言葉としては私の理解を絶してゐますね。明日からこの国をどうやって守るんですか。まづ憲法九条を改正しないと自前では守れませんよ。あくまで、それまでの繋ぎのシナリオとして日米同盟は必要です。そこで、本モノかニセモノかがわかる、と私は思つてゐます。軍事的に我が国が自立できるやうになれば、当然アメリカの言ふことを聞く必要はないでせう。それが独立国です。さうはさせじ、とアメリカはがんじがらめに日本を監視し、しばつてゐる。それほど日米関係は大変な関係なんです。結局、保守の問題は、対米独立の戦略をどう考へるか、の違ひなのです。さういふ日米関係をどう

乗り越えていくかといふことを是非若い世代は考へて貰ひたい。そのために金融やインテリジェンスのことを詳しく知っておかなくてはならないのです。

質 松下村塾では国体教育と現状の把握とがなされてゐたといふことですが、今日の大学では国体教育を語ってくれる先生が少ない。むしろ国家を否定するやうな教育が多い。そのやうな雰囲気になつてゐる原因はどこにあるのか。

答 松下村塾でも日米通商条約はどうしたらいいかといふ政策論を徹底的にやった。しかしその前に国体教育もやつてゐた。精神と戦略といふのは行動の二本柱です。この二本が欠けて一方の精神論だけで松陰を語ることが多くなつた。大学の教室でさういふ国体論の講義をしてゐるといふことが同僚や学生に知れ渡るといろいろ不利益がある。日本の学会では国体論のやうな話をするに「右寄り」と見なされて役職を外されてしまふ。マスコミの編集者とのつきあひも難しくなり、大事な企画が流れてしまふなど、個人的損失は非常に大きいと思ふ。大学教授などはとくに大きい。それを理屈、カラーで塗り固めてゐる。自分をごまかすやうな理屈を創るのは専門だから特に若い大学教員にはさうやって利益確保をする人が多い。学者や専門家が矛盾することを言つてゐる場合はかうした個人的理由からと思つていい。外

国の工作にあってゐて外国の利益をそのままべらべら喋る学者も多い。

質 円高が問題になってゐるから紙幣を増刷するべきである、と言はれたが、もしさうしたらプラザ合意以降、日銀の金利を引き下げることによつて結局はバブル経済とその後の不況をもたらしたが、その二の舞ひになるのではないか。

答 現在は、プラザ合意の時とは全く違ふ世界です。あの時はお札を刷つたからバブルになった訳ではありません。金利を下げたんですね。今の状況では日銀がお札を刷るか、国債を買ふしか方法がない。今の日本ではバブルになることは全くあり得ない。それよりもデフレが深刻化すると、生産力、技術、学問研究など全部なくなつてしまふ。この恐れのほうが大きい。たとへバブルになつたとしても、崩壊して苦難の道をたどつた九〇年代の方がこれからおこることよりもずっといいと思ふ。それほど恐ろしいのが今の不況です。おまけに、世界は通貨切り下げに向つてゐる。

質 中国が国債を買つてゐる。全体のどれくらゐ買つてゐるのか。これからどのやうに深刻になつていくのか。国を思つてゐる政治家は民主党にも他党にもゐるので、党利党略を越え

て保守陣が団結をして政党を作つて頑張つて欲しいが、なぜできないのか。

答 先日発表された財務省の統計では、二〇一〇年の一月から六月まで、一昨年の二倍強中国系の銀行やファンドが日本国債を買つたといふことが明らかになつた。しかしこれは変な統計ではある。どれが中国系か仕分けが大変。一般の新聞でも一・五倍とか二倍とか書いてゐる。多いのか少ないのかと言へば少ない。この数倍から十倍はあるはずです。しかしこの傾向は中国の対日戦略といふ文脈を考へていけば水面下にどんな策略があるのではないかといふ調査をしてみないと具体的には分らない。中国はアメリカの国債も政治目的で買ひ込んでゐる。しかしアメリカは対抗する防備能力をいっばいもつてゐるが、日本はここでも自分の身を自分で守れない。インテリジェンスや金融支配能力がゼロつまり裸だからです。

なぜ戦後の日本に本格保守が生れなかつたのか。日本の政界にナシヨナリズムに基づく「危険な」保守政党が生まれる前につみ取つておけ、ということを対日戦略にしてゐる国が二つある。一つはアメリカ。一つは中国。最近、『中国の日本乗っ取り工作の実態』（福田博幸著、日新報道）といふ本が出た。その中に「自民党はバラバラにせよ。しかし真正の保守政党ができるのは危険だから絶対阻止せよ」といふ指令が中国共産党の対日工作部門に出されたことが書いてある。外国勢力が働いてゐるので日本だけの力では難しい。戦前から愛国者団体の

分断工作は対日工作の十八番。これまでも、くり返し「この国を何とかしたい」といふ人たちが立ち上がった。さういふ勢ひのいい保守団体が訳の分らない内部分裂を起したり、不祥事が奇妙に大きく報道されたりする。これは不自然な力が働いてゐる。「右傾化」阻止のためにたくさんのスパイをさうした団体に送り込む。そしてマイナスのことを仕掛ける。現在も、保守が立ち上がってくる時期なので、さういふ危険としてあるのだといふことを頭の片隅において置いて欲しい。

講義

柿本人麻呂

昭和音楽大学名誉教授

國武忠彦



はじめに

聖徳太子の悲願

近江の荒れたる都を過ぐる時

情もしのに古思ほゆ

阿騎の野に宿りましし時

かへり見すれば月傾きぬ

ふりかへると過去がある

はじめに

四日前の読売新聞（平成二十二年八月十七日付）に「国の成り立ちを考える機会に 平城遷都1300年」といふ社説が載ってみました。奈良市の平城宮跡に大極殿が復元されたといふことに関する社説でした。そこには、ここに立つと、「日本の礎を築いていった当時の人々の心意気が伝わってくるようだ。古代国家の成り立ちや、当時の緊張した国際関係などを改めて考えてみるよい機会でもあろう」と記されてみました。

確かに藤原京から平城京に都が遷ったのは和銅三年（七一〇）ですが、真に「国の成り立ちを考える」には、もう一つ前の七世紀飛鳥時代に遡らねばなりません。むしろ、日本の国の骨格を築いたのは飛鳥時代であるといへます。聖徳太子から、天智天皇、天武天皇、持統天皇、文武天皇へと続く国家形成への苦悩の歴史を忘れてはなりません。

柿本人麻呂は、ちやうどさういふ時代に現れた歌人です。何時、どこで生れ、どのやうな人だったのか。どこで死んだのかもはっきりしません。ただ、『万葉集』に載ってゐる長歌十八首、短歌六十六首、「人麻呂歌集」三百七十首の歌から想像するしかない。天智天皇から

文武天皇のころの人で、官吏としては身分は低く六位以下。持統天皇のころに、宮廷に仕へた舎人、宮廷歌人ではなかったかと思はれるのです。舎人とは、天皇または皇子に近侍して、雑事万般に奉仕しました。文武天皇の舎人に、稗田阿礼ひえだのあれがゐます。彼は、『古事記』撰録の際、「帝紀」「旧辞」を誦習しゅうじゅうしましたが、人麻呂とはほぼ同時期であり、交流があつたとしても不自然ではありません。

柿本氏は、和邇わに氏の支流で、第五代孝昭天皇の子孫です。和邇氏は、五、六世紀の十五代応神天皇や二十一代雄略天皇の時代に、多くの后妃を皇室に入れた有力な豪族で、十二代景行天皇の皇后針間之伊那毘はりまのいなびのおほいらつめ大郎女がさうですが、あの名高い倭建命やまとたけるのみことを生んでゐます。

このやうに『古事記』には、和邇氏に関する物語や歌謡が多い。例へば、応神天皇が矢河枝比売ひめを召されたときの、「この蟹かにや 何処いづくの蟹」の言葉ではじまる歌謡がさうですが、まさにこの歌など後の長歌の原形とみてよい。

人麻呂は、幼少のころから一族に伝はるこれらの物語や古歌謡を聞きながら、自然に作歌の教養を身につけたと思はれます。天皇の統率の下に、国土統一に随身して、武勲を立てた祖先を誇りに思ひ、恋のロマンに憧れ胸をときめかせて育つたと思ひます。人麻呂にとって、神話は祖霊の話であり、祖先の生きた歴史であつたでせう。それらは祖先が、実際に行動し



た事実であり、体験した歴史であった。神話のなかの神々は、実在したものであり、交り対話する存在であったと思はれます。

人麻呂の歌は、古来日本人にどう評価されてきたのでせうか。平安初期の歌人紀貫之は、「古今集」(序)で人麻呂を「歌のひじり」とたたへ、鎌倉初期の歌人藤原定家も、「心は深く姿詞ことばに丈ありて素直みだひやかに優雅なる」歌人とし、「歌聖」と呼んでゐます。

元禄時代の国学者賀茂真淵は、「勢ひはみ空ゆく龍の如く、詞は海潮の湧くが如く、調は葛城かつらぎの襲津彦そつひこ真弓を引きたらむが如し」と称しました。襲津彦とは、神功皇后のとき新羅を討った將軍です。武勇をもって知られ、その引く弓のやうに太くて強くて重い。圧倒するひたぶるな調べであると人麻呂を称賛しました。さらに人麻呂は、江戸時代になると大明

神となり「歌神」となります。

正岡子規の詠んだ歌に、「人麿ののちの歌よみは誰かあらむ征夷大將軍みなもとの実朝」といふのがあります。このやうに、和歌史上最もすぐれた歌人としての名声を得た柿本人麻呂ですが、現在の高校の「国語」の授業では、わづか三首ほどしか読まれてゐないさうです。少し淋しくなりますし問題だと思ひますが、日本の歴史を通して、かくも日本人に愛された柿本人麻呂。その魅力はどこにあるのでせうか。

聖徳太子の悲願

国の骨格が築かれたのは飛鳥時代です。聖徳太子は、豪族の私有地私有民を撤廃し、門閥打破・人材登用を行ひ、天皇を中心にした官僚制的な中央集権国家を築くのが悲願でした。

この悲願を受け継いだのが、中大兄皇子です。六四五年、中臣鎌足と謀って蘇我氏をほろぼすと改革にのり出します。いはゆる乙巳いしの変（大化の改新）です。私有地私有民をすべて全廃し、公地公民にする土地改革です。豪族たちの不満反撥は大きく、六六三年には百濟救援に兵を送りますが、その途上母斉明天皇を九州で亡くされ、白村江の戦ひでは唐・新羅の軍

にやぶれました。未曾有の国難です。傷つき敗れた兵士が帰国する。敵は勝ちに乗じて、いつ打ち寄せてくるかも知れません。中大兄皇子の苦しみはいかばかりだったでせう。北九州に水城を築き防備をかため、内政の整備につとめ、万が一に備へてのこととせうか、都を飛鳥から近江の大津へ遷しました。翌年に即位して、三十九代天智天皇となりました。四十二歳でした。

天皇は、わが国最初の法律である近江令を制定したといはれ、六七〇年には全国にわたる最初の戸籍である庚午年籍をつくり、中央集権国家の成立をめざし、その内政の改革のために苦闘されました。弟君の大海人皇子（おあまの）は、兄君の手足となって改新政治の推進に力を傾けましたが、六七二年天智天皇が世を去ると、天皇の御子大友皇子を擁する勢力と対立して吉野で兵をあげ、近江の朝廷を倒すこととなります。壬申の乱です。この乱で、五年間都であった大津宮は廢墟となります。つぎの人麻呂の長歌と反歌ですが、詞書きにある「近江の荒れたる都を過ぐる時」とは、廢墟となってから十八年ほど経過した時のことです。

近江の荒れたる都を過ぐる時

近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麿の作る歌

玉櫛たまぐし 畝火うねびの山の 檀原かしはらの 日知ひじりの御代みよゆ 生れましし 神のことごと 樛つがの木の いや
つぎつぎに 天あめの下した 知らしめししを 天そらにみつ 大和やまとを置きて あをによし 奈良山ささなみを
越え いかさまに 思ほしめせか 天離あまざかる 夷ひなにはあれど 石走いはほしる 淡海あふみの國の 樂浪ささなみの
大津おほつの宮のに 天あめの下した 知らしめしけむ 天皇すめろぎの 神かみの尊ことの 大宮おほみやは 此處こゝと聞きけども
大殿おほとのは 此處こゝと言ことへども 春草はるぐさの 繁しげく生なひたる 霞きりぎりす立ち 春日はるのの霧きれる ももしきの
大宮處おほみやしろ 見れば悲しも

反歌

ささなみの志賀かたさきの辛崎からさき幸ゆきくあれど大宮人おほみやびとの船待ふねまちちかねつ
ささなみの志賀の大わだ淀よどむとも昔の人むかしの人にまたも逢あはめやも

この長歌は、六九〇年持統天皇四年ごろの作といはれてゐます。人麻呂は三十歳代後半だ

つたでせうか。荒廢した大津宮跡を、旅の途中に通過した時の歌です。少し注釈してみます。

玉櫛たまみ 畝火うねびの山の 玉櫛たまみは、畝火うねびの枕詞。櫛は「うね」「うなじ」首にかけるので、同じ音の類似から畝火山にかかる枕詞とされてゐる。畝火山は、今の畝傍山のこと。大和三山の一つで、この山の麓は橿原かしはらといひ、苦難のすゑに国土を平定した初代の神武天皇の都がある。美しい文様のたすきを掛けた女官たちの姿も目に浮びます。橿原かしはらの 日知ひしりの御代みよゆ 橿原かしはらの宮で即位された神武天皇からずっと。日知は、「日の如くして天下を知らしめす」と本居宣長は言ふ。日の如く、あまねく安らかに、天の下を治らしめす天皇の意味である。生れましし 神のことごと お生れになつた天皇のすべてが。櫛つがの木の いやつぎつぎに 櫛つがの木このやうに、いつそう次々と。「つが」が「つき」(継ぎ)の語幹に発音が似てゐるところから、この枕詞が使はれたのではないかと言はれてゐる。この「櫛つがの木」の枕詞は、人麻呂が創作したものとの説がある。櫛つが(榎)の木は、松科の常緑高木で成長すると三十メートルにもなる。人麻呂は、皇室の繁榮と皇位の永遠「日継ひつぎ」を歌はうとしたのでせうか。天あめの下 知らしめししを 天下をお治めになつた。天あめにみつ 大和やまとを置きて 「天あめにみつ」、大和にかかると枕詞。古くからの使用は、「そらみつ」、「空見つ」で意味も不明であつたが、人麻呂は「天にみつ」と改作し、「天に満ちる山」の意味を与へた。空に満ちた都である大和の国を後にして。

あをによし 奈良山を越え 「あをによし」は、奈良にかかる枕詞。「あをによし」の意味は不明ですが、なんと響きのよい言葉でせう。「あを」は青、「に」は丹(朱色)なので、青色は格子窓の色、丹色は朱塗りの柱のことか。奈良の都のうつくしい景観を髣髴とさせる枕詞。いかさまに 思ほしめせか どんなふうにお思ひになつたからか。中大兄皇子が、なぜ近江へ都を移されたのがわからないことをさす。天離る 夷にはあれど 「天離る」は、「夷」にかかる枕詞。空遠く離れた田舎ではあるが。石走る 淡海の國の 「石走る」は、「淡海」にかかる枕詞。岩の上をあふれて走る清らかな水。「淡海」は、琵琶湖のある近江のこと。樂浪の 大津の宮に 「樂浪」は、琵琶湖西南部の土地の古名で、さざ波を思はせる。「大津の宮」は、今日の滋賀県大津市にあった宮殿。天の下 知らしめしけむ 天下をお治めになつた。天皇の 神の尊の 「天皇」は、統ら君の意味でせうか。「すめら」は、「澄む」の形容詞といふ説もある。「神の尊」は、天皇を神として尊敬して、神のやうに尊い方。天智天皇のこと。原文(万葉仮名)には、「尊」は「御言」と書かれてゐるので、天皇は神のお言葉をお聞きになり、神の命令によって治められる方である。大宮は 此處と聞けども 「大宮」は、皇居。「此處と聞けども」は、ここだと聞くのだが、そこにはなにもない。大殿は 此處と言へども 「大殿」は、立派な建物。官庁や大内裏のことか。ここにあるはずだが、なにもな

い。あるのは、春草の 繁しげく生ひたる 元氣のいい春草が、うつさうと生ひ繁り。 霞立ち春日の霧はるびれる のどかに霞が立って、暖かい春の日に光が霞んでほんやりとしてゐる。もしきの 大宮處おほみやどころ 見れば悲しも 「もしきの」は、大宮の枕詞。たくさんの石を敷いた、立派な皇居。礎石は、天智天皇の靈がこもつてゐるものだが、今は廢墟となつて何もないのが 悲しい。

「見れば悲しも」は、見ようとするが見えない。悲しいといふのです。これが、結語であり、人麻呂の主情です。「見れば」、見やうとする、強く見たいと意識する。しかし、昔栄えた面影は見えないといふ悲しさ。眼には見えないが、心象にはしっかりと存在する。それだけに悲しみは深い。過去は現在の内にしっかりと生きてゐるのだが、それが見えないといふ悲しさです。

(大意) 美しい襷たすきをかけた畝傍うねびの山の、橿原かしはらの宮で即位された神武天皇の御世からずっと、お生まれになられた天皇様のすべてが、樛つがの木のやうにつきつぎと、大和で天下をお治めなされたのに、天に満ちる大和を後にして、青丹あおによし奈良山を越えて、どのやうにお思ひになつたからか、遠く離れた田舎ではあるが、石いしばしる近江の国の、楽浪ささなみの地の大津の宮に、天下をお治めになつた、天智天皇の大宮はここだと聞くが、大殿おほどのはここだと人は

言ふけれども、春草がうつさうと生ひ繁り、霞たなびく春の日がかすみ、おほくの石を築いた皇居の跡を見れば、悲しい。

この歌は、おごそかな重みのある調べによって、歌ひだされてゐます。人麻呂は、なぜかいつも『古事記』や『日本書紀』の神話から歌ひ始める。皇室の系譜を読み込むやうに、皇室が無限であり広大であることを堂々と表現する。人麻呂には、つねに神話が生きてゐる。自然に生きてゐる。この長歌も、神武天皇の御世から、ずっと天下を治められた天皇のごとくを、つが 樛の木のやうに、常に巨木の繁榮と皇統の継承が無限であることから歌ひ始めてゐます。

さらに、天皇を神として歌つてゐます。「大君は神にし座せば」、この精神は人麻呂のものでした。人麻呂は、天皇が神であることを実感して宮廷に仕へてゐた。神靈がそこに存在する。神が実際にそこに君臨するのを見てゐるのです。このことは、ただ人麻呂だけのことではない。「大君は神にし座せば」といふ歌が、他にも『万葉集』には載せられてゐます。なんら臆することなく、天皇は神であると歌ふ鑽仰せんやうの精神が、当時の宮廷にみなぎつてゐたことに注目したいと思ひます。

それにしても、なんと枕詞の多いことでせう。私たちは、「枕詞には意味がない、修辭の一つであつて歌の調べを整へるもので、無視して訳さなくてもよい」と教つてきましたが、人麻呂が聞いたらどう思ふでせうか。たしかに、枕詞は、古くから伝承されたもので、意味のわからなくなつたものが多い。しかし、折口信夫は、枕詞は咒詞じまじから発生したと言つてゐます。神が発する命令的な詞ことばで、言霊といふ威力ある靈魂が入つてゐる。「神靈の宿るところであり、歌における生命の指標であり、神授の言葉の精粹である」と。

人麻呂は、古代信仰のこもつた枕詞に畏怖の念を抱き、使用されなくなつていく枕詞に愛着を抱き、むしろ積極的に死靈のこもつた言葉として用ひたのではないかと思ひます。人麻呂の使用した枕詞は、百二十から百四十にも及ぶ。創作もあれば、改作もある。人麻呂がこれほど多数の枕詞を使用したのは、修飾のためばかりではない。対象を生かす、蘇生する、過去を現在に生き返らせるための欠かせない言霊でもあつたのです。

情こころもしのいにしへに古思ほゆ

反歌の第一首に移りませう。

ささなみの 「ささなみ」は、琵琶湖西南部の土地の古名。湖畔に打ち寄せるさざ波の音が聴こえてくる。志賀の辛崎からさき 琵琶湖の西岸の岬みさき。幸さいくあれど 昔のままに変わらず平穩であるが。大宮人のおほみやひと かつて大津の宮の宮廷にお仕へしてゐた人たちの。優美であてやかな服装の女官たち、管弦の音も聴こえてくるが。船待ふねちかねつ 大君も乗つてゐるであらう船を、いくら待つてゐても来ることはないのだ。

(大意) ささなみの志賀の辛崎は、昔のまま変わらずあるが、昔ここで宮廷に仕へ遊んでゐた人たちの、舟をいくら待つても再び見ることは出来ない。

第二首目の反歌に移ります。

ささなみの志賀の大わだ 「大わだ」は、大きく湾曲した入江。淀よどむとも 穏やかな湖水を一杯に湛へて舟を待つてゐるが。昔の人にまたも逢はめやも 昔ここで、舟を浮かべて遊んだあの当時の宮廷人たちに、再び逢ふことが出来やうか。いや出来ないのだ。悲嘆の大きさに圧倒されてしまふ歌です。

(大意) ささなみの志賀の大きな入江は淀んでゐるが、昔の人に再び逢ふことはない。

さて、この旅の帰りでのものでせうが、次の歌があります。

もののふの八十や氏河ぢがはの網代木あじろぎにいさよふ波の行く方へ知らずも

もののふの 物の部（文武百官）には多くの氏がゐたので「八十」にかかる枕詞。八十や氏河ぢがは多くの氏人。網代木あじろぎ 魚をとる網木に並べて打った杭に。いさよふ 漂たたよひ、とどまる。波の行く方へ知らずも 行く水の波のやうにどこへ流れて行くのか、行く先はわからない。

（大意） 宇治川の網木にさえぎられて漂ふ波のやうに、大津の宮に仕へてゐた人々は、いったいどこへ行つたのだらうか。

次の歌も、やはり同じ旅の帰りに詠んだ歌でせうか。

淡海あふみの海夕うみ波千鳥な汝が鳴けば情こころもしのに古思いにしへほゆ

淡海あふみの海うみ 琵琶湖のこと。夕波千鳥 夕波に飛んでゐる千鳥のこと、人麻呂の創作と言

はれてゐる。鳥は死者の魂であるから、千鳥が鳴けば、天智天皇の霊の聲が泣いてゐるやうに聞えるのであらうか。情こころもしのに「しのに」は、しなへて、しほれて。心が草のなびくやうに、うちしほれたやうに、ぐったりとして。古思いにしへほゆ 「古」は過去のことではあるが、昔の人々のことが思ひ出される。今は廢墟だが、昔ここで生きてゐた人たちのことが、懐かしくひしひしと思ひ出されてくる。

(大意) 近江の海の夕波に飛ぶ千鳥よ、おまへが鳴くと心もしなへて、しみじみと昔のことが思はれる。

それにしても、哀切きはまりのない悲しい心を歌ひ上げてゐます。積極的に過去を見ようとする。意欲的に過去の存在を確かめようとする。見ようとする、確かめようとするが、目には見えない、存在しないのです。私の心のなかには、天智天皇の華やかな過去が存在する。語らひあふ人々の姿が見える。その歴史は、消し去らうとしても消し去ることは出来ない。私の心は、昔のままに榮えてゐるのに、昔の人に逢つてゐるのに、どんなに待つても舟はけつて来ることはない。昔の人にまた逢ふことは出来ない。再び逢へないといふ悲しみで、人麻呂の心には過去が生きてゐる。過去が現在のうちに生きてゐる。見えないのが悲しいとい

ふのです。

阿騎の野に宿りましし時

輕皇子の安騎の野に宿りましし時、柿本朝臣人麿の作る歌

やすみしし わご大王 高照らす 日の皇子 神ながら 神さびせすと 太敷かす 京を
置きて 隱口の 泊瀬の山は 眞木立つ 荒山道を 石が根 禁樹おしなべ 坂鳥の 朝
越えまして 玉かざる 夕さりくれば み雪降る 阿騎の大野に 旗薄 小竹をおしなべ
草枕 旅宿りせず 古思ひて

短歌

阿騎の野に宿る旅人打ち靡き眠も寝らめやも古思ふに
ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とそ來し
東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ
日並皇子の命の馬並めて御獵立たしし時は來向ふ

この長歌は、六九二年持統天皇六年ごろの作と思はれます。人麻呂の四十歳のころでせうか。天武天皇崩御の後、即位すべき人は草壁皇子でしたが、三年間の喪も終へ、さあ即位式といふ時に、その直前に皇子は亡くなりました。二十八歳でした。幼い軽皇子が残されましたが、祖母に当る持統天皇は、この軽皇子が成人するまでの中継ぎとして、やむをえず即位されました。この長歌が歌はれたのは、草壁皇子が亡くなられて三年後、軽皇子十歳の時です。

やすみしし わご大王 「やすみしし」は、「わご大王」にかかる枕詞。安らかに世を

お治めになるわが大君で、軽皇子をさす。高照らす 「高照らす」は、「日」の枕詞。高く照

る太陽のやうな。日の皇子 天つ日嗣の皇子、このとき十歳の軽皇子をさす。神ながら 神

さびせすと 神のまままで神としてふさはしく。太敷かす 京を置きて 宮殿の柱を太くしつ

かりと建てた都をあとにして。隠口の 泊瀬の山は 「隠口」は、「泊瀬」にかかる枕詞。

おごそかで、死者の靈気の漂ひ隠った泊瀬の山は。眞木立つ 荒山道を 榎や杉や檜が、鬱

蒼と茂つてゐる、靈気に満ちた荒々しい山道を。石が根 土のなかに根を張ったやうな石。

禁樹おしなべ 「禁樹」は、行く手をふさぐ樹。これから先に行つてはいけない、死者の靈

が住む世界か。その繁った木を押しわけて。坂鳥の 朝越えまして 「坂鳥の」は、「朝越

え」にかかる枕詞。朝早く山を越えていく鳥。鳥は、古代においては、死者の靈魂を意味したものであり、その魂に導かれて行くやうに。玉かざる 夕さりくれば 「玉かざる」は、「夕べ」にかかる枕詞。「かざる」は、輝く。ほのかな玉の光のやうな輝きをみせる夕方になると。み雪降る 阿騎の大野に 雪のふる阿騎（大和国宇陀阿騎野）の広い野に。旗薄 小竹をおしなべ 旗のやうになびいてゐるススキや小竹を踏み伏せて。草枕 旅宿りせず 草を枕に旅宿りをなさる。古思ひて ここで日並皇子（草壁皇子）皇太子が狩をされた日のことを思ひ偲んで。

（大意） 安らかに世をお治めになる大君、高く照らす太陽のやうな日の皇子、軽皇子さまは、神のままに神としてふさはしく、立派な飛鳥の都をあとにして、山にかこまれこもった泊瀬の山は、榎や杉の繁った荒い山道だが、岩や小枝を押し倒して、朝鳥のやうに朝早く山を越え、夕方になると、雪の降る阿騎の広い野に、ススキや小竹を踏み伏せて、草を枕に旅宿りなさる。亡き父君草壁皇子のことを偲んで。

莊重な歌ひ出しです。その調べの高いこと深いこと、実に見事だと思ひます。人麻呂は、皇子を大君として賛美し、また神として歌つてゐます。天皇に「神ながら」といふ言葉を用ひ

たのは、人麻呂が最初で、七つの例があるといひます。宮廷でお仕へしながら、常に神のそばにゐる実感を表現してゐるのだと思ひます。神の威霊を感じ、強い畏怖の念を抱く。神がそこに存在する、臨在することを、天皇の中に感じてゐるのです。

泊瀬（初瀬）の山は、死者の霊がこもった山です。朝早く坂を越えていく鳥を追つていくやうに、この岩山を越えていく。死者の霊魂は鳥になつて飛び去るといふが、その鳥に導かれ、逢ひに行くやうに阿騎の大野へと向ふ。この旅の目的は、最後になつてわかるのですが、それは「古思ひて」なのです。本来の目的は狩なのでせうが、軽皇子にお供する人麻呂及び旅人たちには、どうしても嘗てここで狩した父君の草壁皇子のことが思ひ出されてしまふのです。

かへり見すれば月傾きぬ

短歌の第一首に移りませう。

宿る旅人 人麻呂も含めた旅のお供の人たち。打ち靡き 手足を伸ばしてのびのびと。眠も寝らめやも 安らかに眠ることができようか、とても眠れない。古思ふに ありし日の草

壁皇子のことが想ひ出されて。

(大意) 阿騎の野に旅寝する人々は、安らかにのびのびと眠ってゐるであらうか、いやとても眠れないのだ。ありし日の草壁皇子のことが想ひ出されて。

草壁皇子は、天武・持統兩帝の間に生れ、壬申の乱に従軍し、父天武天皇に従つてこの地にやってきた時は、十一歳でした。二十歳のときにも、冬獵に来てゐる。供奉したものは、その日のことが次々と想ひだされて眠れないといふのです。

第二首を読みませう。

ま草刈る荒野にはあれど 「ま(真)」は、接頭語。ただ草を刈つただけの荒野にすぎないが。黄葉の過ぎにし君が 「黄葉の」は、「過ぐ」にかかる枕詞。紅葉した木が散り去るやうに。過ぎにし君 おかくれになつた草壁皇子のこと。形見とそ來し 過去のことを想ひだすもの、ここでは場所。

(大意) ただ草を刈つた荒野ではあるが、赤く照らされ、おかくれになつた草壁皇子の、想ひ出の土地だからやって來たのである。

雪のふる、寒く荒涼とした広大な荒野ではあるが、「過ぎにし君」を偲ぶため、逢ひたいから、見たいから、やって来たのだ。「ま草刈る荒野」が形見なのです。広く枯れ草の広がる荒野。草を刈るだけの荒野ではあるが、見入っていると飽かぬ想ひにかきたてられてくる。胸が熱くなるといふのです。

第三首に移ります。

野かげろひに炎かげろひの立つ見えて 「炎」とは、夜の明けるころ立ちのぼる光。「炎」は「炎」と訓まれ

てゐたのを賀茂真淵は「炎」と訓んだ。原文は「東 野炎 立所見而」。『万葉集』の表記は所謂万葉仮名（漢字）ばかりです。この無訓の歌をどう訓むのか。契沖は「あづまののけぶりの立てる所見て」と訓み、真淵は「ひむがしの野にかげろひの立つ見えて」と訓んだ。「けぶり」は、煙です。訓によって、解釈は違ってきます。真淵は、調べのゆたかさを重んじたが、契沖の訓の基礎を受け継ぎながら、新たな訓を発見したのである。真淵の訓が、今は通説となつてゐますが、古語の訓にいかにも先人たちが苦闘されてきたかがわかります。

（大意） 東の野に夜明けの光が立ちのぼるのが見えて、振り返って西の空を見ると、月がかたむいて淡ひ光を湛へてゐる。

立ちのほる「ほのお」と淡ひ光を湛へる「月」。東に立ちのほる「炎」と西にかたむく「月」。前に「炎」、後ろに「月」と対照的に置いた。それはそれでいいのですが、私の情意的な解釈は、どうしても後半の「月」に重点が移ってしまふ。寒気の夜明け前に、東の空に赤く「ほのお」のやうな炎が立ち登ってくる。ふと、振り返ると西の空に月がかたむいてゐる。さうではなくて、人麻呂は西の空の月にはじめから惹かれてゐたのではないか。淡い光を湛へてゐる月に飽かぬ想ひを抱いて見てゐた。月を見ながら、人を偲び、歴史に尽きせぬ想ひを見てゐたのではないでせうか。「かへり見すれば」とは、ふと、自然に振り返つたのではない。意識的に振り返つて、西の月の方を見てゐたのではないか、と思ふのです。

「古思ふに」「過ぎにし君」「かへり見すれば」と読んでくると、人麻呂の心は、やはり過去の「過ぎにし君」、草壁皇子に捕らはれてゐるのです。

第四首の短歌に入ります。

日並皇子

日(天皇)と並んで天下に立ち給ふ、天皇に代り政治を執られ給ふ皇太子。草壁

皇子のこと。

命

神や人を敬つていふ語。馬並めて 馬を横に並べて。御獵立たしし 草壁

皇子が御狩にお出かけになられた。來向ふ まさにその時がやって来た。

(大意) 亡くなられた草壁皇太子が、馬を並べて御狩に出かけられた時が今やってきた。

草壁皇子を偲ぶ哀感の情から、一転して緊張した現実の相へと引き戻される。懐古にひたる中であつた草壁皇子が、今、ここに馬上にまたがつてゐる。草壁皇子が、馬上の軽皇子と重なりあつて見える。さあ、これから狩は行はれる。軽皇子の姿は、早朝の曙光に照らされてゐるのです。

長歌は、出だしから荘重で、神域を旅する雰囲気が漂つてゐます。軽皇子とお供の者は、立派な都をあとにして、どこへ行かうとするのか。隠口こもりくの泊瀬はつせの荒山道を越えて、安騎の野へとやって来た。霊がこもつたやうな岩、遮る樹を押し倒しながら、朝から夕方まで、雪の降るなかを歩いてきた。しかし、この旅の目的は何なのか。最後の「古思いにしへひて」によつて、古を思ふためにやって来たことはわかりました。だが、古の何を思ふのか。安騎の大野で古を思ふのであるから、かつてここで狩獵をされた父君草壁皇子のことを思ふのか。といふことはいくらか推測できるのですが、この四首目の短歌を読むことによつて、その主題がはっきりと披瀝された。日並皇子(草壁皇子)を偲ぶことが明示されたのです。

それにしても、大和言葉の美しく、優しく、ゆたかなこと。『万葉集』を読むとしみじみと感じます。一体、誰が、このやうなすばらしい言葉を発明したのでせうか。日本民族が、それこそ遠い遠い、はるか昔から、だれ彼となく自然に、内から湧き出るままに、口伝へに使ってきた言葉なのでせうが、日本人のやさしい気持ちに、ぴったりとつり合つてゐます。

五世紀ごろに、日本人は漢字に出会つて、大和言葉を漢字で記録するやうになるのですが、七世紀の人麻呂は、日本の歌をどう漢字で記すのかに苦心した最初の人であつたやうに思ひます。歌を漢文のやうに表すだけでなく、助詞や助動詞を使って、私たちが日常話すやうに表記するのに苦心してゐるのです。

ふりかへると過去がある

人麻呂の主な歌を読んでいくと、不思議なことに気づきます。過去ばかりを詠んでゐることです。過ぎ去つた、いにしへを思ひ偲んでゐるのです。愛する妻やかかけへの無いものを喪つた悲しみ、取り返しのつかない悲しみに浸つてゐるのです。時間は残酷です。刻々に過ぎ去つては、過去になつてしまふ。

しかし、その過去に人麻呂はなぜ愛着し過去を愛惜するのでせうか。それは言ふまでもなく、過去は、はつきりとした像を結んでゐるからです。過去は、思ひ出のなかに核として存在し、すぐさま回想され再生されるものなのです。

過去は、現在から切り離されたものではありません。つねにすべてが、蓄積され、現在そのものなのです。過ぎ去らうとする過去を意識さへすれば、過去は積み重なって、私を形成してゐます。「過去は現在に生きてゐる」とは、小林秀雄の言葉ですが、私が体験し意識的に生きてきたことは、すべて思ひ出といふ記憶の時間のなかに生きてゐます。ですから、過去の人間を甦よみがへらすことができるのです。

過去は、そのまま今の私です。しかし、敗戦後私たちは、戦前を批判し、否定しました。戦前の自分は、間違つてゐた自分であるとして、戦後の多くの知識人はあたかも自分の命を断ち切るやうに戦前の自分と戦後の自分を区別したのです。振り返ることをやめようとしたのです。私たちが育つた時代とは、かうした風潮に政治も教育も影響されてゐる時代だったのです。

人麻呂の過去への憧れ。死者を哀惜することの激しさ。過去は永遠であつてほしいといふ願ひ。「昔の人に逢はむ」、逢へるはずだ、必死になつて招き寄せようとする。過ぎ去らうと

する過去を必死に引きとどめようとする。遠ざかる過去、引き戻さうとする私。この葛藤と悲しみのなかに人麻呂はゐるのです。

講義

歴史の玉の緒

独立行政法人国立病院機構都城病院長

小柳左門



- 一、岡潔先生の言葉
- 二、玉虫厨子の「捨身飼虎図」にこめられた願ひ
- 三、聖徳太子の生涯と言葉
- 四、山背大兄王の御最期
- 五、昭和天皇の戦後御巡幸の御製
- 六、今上天皇の御製と皇后さまの御歌

一、岡潔先生の言葉

私が大学に入学して三年間ほどは、学園紛争の嵐の中で殺伐とした日々を送つてをりました。私自身も、自分がこれからどのやうに生きていけばいいのか、この世で何が正しい事なのだらうかと暗中模索を続けてみました。そのやうな時に私は、数学者で著名な岡潔先生の講演を聞き、また直接にお会いしてお話を頂く機会を得ましたが、我が国の歴史や人々の言葉を通して日本人としての心のありかたを語られる先生のお話やお姿に深い感動を覚えめました。先生のご著作の中でも代表的な「日本の情緒」から一文を紹介致します。

「この国で善行といえは少しも打算を伴わない行為のことである。たとえは橘媛命が、ちゆうちよなく荒海に飛びこまれたことや、菟道稚郎子命がさつさと自殺してしまわれたのや楠正行たちが四条畷の花と散り去つたのがそれであつて、私たちはこういつた先人たちの行為をこのうえなく美しいとみているのである。

『白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りぬる』という歌があるが、国の歴史の緒が切れると、それにつらぬかれて輝いていたこういつた宝玉がばらばらに散りうせ

てしまふだろう。それが何としても惜しい。他の何物にかえても切らせてはならないのである。そこの人々が、ともになつかしむことのできる共通のいにしえを持つという強いつながりによって、たがいに結ばれているくには、しあわせだと思いませんか。ましてかような美しい歴史を持つ国に生まれたことを、うれしいとは思いませんか。歴史が美しいとはこういう意味なのである。」

日本といふ国には、世のため、人のために私心を去って肅々と身を捧げた人々がたくさんをられた。その方々のことについて学ぶ喜び、その方々につながつて生きることの有難さを教へて頂いたのです。日本の歴史に散りばめられたかうした玉を繋いでゆく緒、それは岡先生がよく言はれた「なつかしさ」の情緒でありませうし、またその美しくも悲しい行為をつたへようとした先人の心と言葉でありませう。「玉の緒」は命そのものを表す言葉でもあります。日本の歴史を貫く命といふものに少しでもせまっていきたい。それが本日の私の話の主題です。

二、玉虫厨子の「捨身飼虎図」にこめられた願ひ



まづ紹介したいのは、聖徳太子とその御子の山背大兄王おんえのおうの生涯です。聖徳太子が仏教を深く学ばれたことは皆様もご存知でせうが、そのみ教へを一筋に守り、国のために命を捧げられたのがお子様の山背大兄王でした。聖徳太子は二十歳にして推古天皇の摂政として国政に身を捧げられました。推古天皇は太子に導れて仏教を信仰されました。その推古天皇の厨子たましのすし（仏像を安置する仏具）と伝へられるのが、今も法隆寺に安置されてゐる国宝、玉虫厨子です。玉虫厨子は、その名の通りかつては玉虫の輝く羽で飾られた美しい造形で有名ですが、台座の側面に「捨身飼虎図」の彩色漆画が施されてゐます。

この図は釈迦誕生より前の印度の仏教説話をもとにしたものです。薩捶王子さくたがある時兄弟とともに竹林の中を歩いてみると、食べ物に飢えて瘦せた母虎

と七匹の子虎がをり、母虎は寄り添ってゐる自分の子どもの虎を食べようとしてゐた。飢死寸前の虎の親子を哀れに思った王子は、これを救はむと崖の上から自ら身を投げて虎の餌食となつてしまはれたのです。その薩捶王子さつたが生まれ變つて釈迦になられたと説話は伝へてゐます。玉虫厨子の図では、衣を脱いで枝に掛け、崖から身を躍らし、ついに横たはつて虎に食はれる様が一枚の絵の中に描かれてゐます。身を捨てて虎の命を救はれたので、「捨身飼虎の図」と呼ばれてゐます。

ここに描かれてゐるものは、煩惱にさいなまれて苦しみ生きてゐる我々自身と、それを哀れみ救つて下さる御仏の姿であります。仏様は自分の身を捨てても民のためにこれを救はうとなされる。苦しむ民を大きな悲しみと慈しみによって包み、いかなる人をも菩提に導かれる御仏の願ひ。その御仏の教へを学び、国の内に広めやうと努められ、さらに自ら捨身の大業につかれたのが聖徳太子とその御子山背大兄王でした。

三、聖徳太子の生涯と言葉

聖徳太子は広く海外の文物を学ばれましたが、中でも仏教のみ教へを大切にされました。当

時の日本は、内外ともに苦難の道をたどつてゐた時代でしたが、とくに政治の中枢にあつた蘇我氏そがと物部氏ものべの争ひは激しく、仏教を受け入れるか否かをめぐつて大きな論争を続けてゐました。太子の父君であつた用明天皇が崩御されると(西暦五八七年)、その皇位継承をめぐつて、のちの崇峻天皇すしおんを推す蘇我馬子と穴穂部皇子あなほを推す物部守屋もりやとの間に戦が始まりましたが、皇子と守屋は戦死。このとき十五歳であつた太子(厩戸皇子うまやと)は蘇我氏とともに物部追討の軍に従ひ大きな功績を挙げられましたが、じつは太子の母君は、穴穂部皇子や崇峻天皇の姉であり、かつ蘇我氏の一族でもあつたのです。

ところが崇峻天皇が即位されると蘇我馬子は皇位を廃さうと謀りはか、帰化人であつた東漢直駒あたしこまに命じて天皇を弑せしめるといふ、あるべからざる暴挙を犯したのでした。しかも天皇を弑逆しぎやくしまつた駒はのちに馬子によつて殺されました。その混乱の後に、用明天皇の妹君であつた推古天皇が即位(五九二年)され、聖徳太子はその摂政となられたのでした。この一連の歴史は、日本書紀に詳しく記されてゐます。

さて聖徳太子はその一身に国政を担はれますが、この乱れ切つた国をどのやうにまとめていけばいいのか、ご自身の親族同士の争ひもあつて大変なご苦心とお悩みがあつた事と思はれます。太子はそれでも内治外交に次々と手を打つていかれました。推古天皇十一年(六〇三

年)には冠位十二階の制定によって氏族にとらはれない登用の道を定め、十二年にはわが国で初めての憲法十七条を自ら定められました。憲法はおもに政を司る人々(まつりごとつかさど)に対して心すべきことを記されたものですが、その条文のひとつひとは太子(ご)自身の苦悩の経験を踏まへ、人間の様々な心を見つめたところから生まれた珠玉のやうな言葉にあふれてゐます。

その第一条は皆が知つてゐる「和を以て貴し(たか)しと為し(な)、忤(むか)ふことなきを宗(むね)と為せ」から始まりますが、乱れてゐるこの国を一つにまとめ行くためには、何を措(し)いても先づは人の「和」こそが貴いことを宣(の)べられ、人と逆(さか)ふことをしないことを宗(むね)とすべきとされました。第十条では、心の中や顔に表れる怒りを絶(た)てと教(し)へられます。人は皆心(こころ)があり、執着(しやくちやく)がある。どうしても自分が正しいととらはれるものであるが、自分は聖人(せいじん)ではないし他の人が愚(おろ)かなわけでもない。「共に是(こ)れ凡(ぼん)夫(ぶ)のみ」、ともにただの人間(にんげん)同士(どうし)ではないか、とされてむしろ自分の間違(まちが)ひを怖(おそ)れなさいとさとし、最後に「我(われ)独(ひとり)り得(え)たりと雖(いへど)、衆(しゆ)に従(したが)ひて同(おな)じく挙(あ)げ」、自分こそはこれが正しいと思つても衆(しゆ)に従(したが)つて同じやうに行動(こうどう)しなさい、と記(し)されました。さらに第十五条では、「私(わたくし)に背(そむ)きて公(おほ)やけに向(むか)ふは、是(こゝろ)れ臣(おみ)の道(みち)なり」と、私の心にとらはれず、むしろこれに背(そむ)いて、世(よ)の人々(ひと)のために心(こころ)を向(む)けていくことこそ、臣(おみ)たるものの道(みち)である、と論(ろん)されたのでした。

かうして太子は乱れていくこの国をまとめることに精魂を尽されました。しかし太子の心はいつも晴れることはなかったのではないか。だからこそ仏教に救ひを求められ、そのみ教へに深く傾倒され、そのご研究のあとが「三経義疏」となって今に伝へられてゐます。例へば維摩経義疏のなかには、「国家の事業を煩はしとなす。ただ大悲やむことなく、志益物に存す」といふ太子の言葉があります。これは維摩居士の言葉に対する注釈ではありますが、国家の事業はいつも大変で煩はしくさへ感じられてゐたといふ、太子ご自身の痛感の発露でもあるでせう。しかしそれでもなほ、人々の苦しみ悲しみを思ふみ仏の大悲は止むことがなく、その心に期されたものは民の苦しみを抜くことであつたのだと、維摩の教へを太子自身の決意として深く心に刻まれたことと思ふのです。太子は憲法に記した条文のままに、国家の大業のために身を捨てて尽されたのでした。

太子は外交に於いても新羅への征討軍を派遣され、小野妹子を始めとした遣隋使を派遣して隋の文化を積極的に取り入れやうとなさいました。この時に隋の煬帝に贈つた国書に記された「日出る処の天子、日没する処の天子に書を致す」の一文は、日本が独立した国家であることを内外に示したものでした。

推古天皇の御代では蘇我馬子は大臣でしたが、太子が御在世の間は比較的静かにしてゐた

と思はれます。しかし太子が薨去されてからは、再びその權威を振ひ始めたのです。

四、山背大兄王の御最期

蘇我馬子が死去したあとの大臣は、その子である蝦夷えみしが引き継ぎました。その後、推古天皇が崩御されると皇位を誰が継承するのかが大きな問題となりました。太子の御子山背大兄王やましろうのおほえのおうは、推古天皇のご遺言を受けて皇位を受継ぐ心構へをしてみましたが、蝦夷らは田村皇子を立てて皇位を継がせやうと密かに画策してをり、臣らの意見によつて山背王は皇位を断念せざるをえなくなりました。山背王を推挙した境部摩理勢さかいべのまりせは蝦夷に戦ひを挑まうとしましたが、これを留めた山背王の説得に断念。日本書紀に詳記されてゐますが、そこには父聖徳太子の遺された言葉を忠実に守らうとした山背王の決意がありました。それなのに境部摩理勢さかいべのまりせは逆に蝦夷に襲はれて殺されてしまったのです。かうして田村皇子が皇位を継ぎ、舒明天皇じよめいとして即位（六二九年）されましたが、蝦夷は大臣の位にありながら徐々にその権力を我がものにししました。

舒明天皇が崩御されると、皇后であつた皇極天皇こうごくてんが即位（六四二年）されました。すると蝦

夷は勝手に息子である入鹿いんかに大臣の位を継がせましたが、蝦夷と入鹿の親子は権力をほしいままにし、あらゆることか入鹿は皇位を古人大兄に譲らせやうとさへ謀りました。そして突然、入鹿は何の前触れもなく斑鳩いかるがの宮（現在の法隆寺東院）にをられた山背大兄王を襲ったのです。民衆の心がいつしか山背大兄王にあったことへの危機感がさうさせたのかもしれないが、王は推古天皇崩御後十五年もの長い間慎んでをられ、皇位への執着はすでになかった。山背大兄王とその一族はやむなく生駒山の山中へ隠れましたが、ここで忠臣である三輪みわの文屋君は王に対してかう申し上げました。これから東の国に向って味方呼び、再び軍を起して戦へば必ず勝ちますと。それに対して王はかう答へます。それはお前の云ふとほりで、勝つのは間違ひはないであらう。しかし自分は願つてゐるのだ、暮らしにあへいでゐる民を使つてはいけない。どうして自分の一身のために万民を煩はすことができるか。そして言ひます。「豈あにそれ戦ひ勝ちて後のちに、まさに丈夫ますらをと言はむや。夫れ身みを捨てて国を固めば、また丈夫にあらずや」、どうして戦ひ勝ったあとにこれぞ立派な人と言はうか。身を捨てて国を固めることができるきたなら、それもまた立派な人ではないか、と。

山背大兄王とその一族の人々はやがてもとの斑鳩の宮に戻ります。これを入鹿の軍勢が困んだ時、王は軍将らにかう伝へました。我らが軍を起こせば必ず勝つであらう。しかし一身

のために人々を損ふことを自分は欲しない。「ここを以て、吾が一身をば入鹿に賜ふ」、あの傲慢なる入鹿に自分の身を与へると言はれたのです。かくて山背大兄王とその子供、妃たち皆ともに自決なさつたのでした。ここに聖徳太子のご一族はすべて絶え、上宮王家は滅亡しました。しかしそれから二年後に蝦夷入鹿の親子は責め誅せられて、大化の改新が成つたのでした。

東京大学教授であつた国史の大家坂本太郎氏は、その著書の中でかう記してゐます。「太子及び上宮王家は、彗星の如く現れて、世にも美しい光芒を放ち、忽然として消え去つたのである。およそ、これほどいさぎよい一族の興亡が、ほかにあつたであらうか」と。聖徳太子の願はれた「和」のころ、「背私向公」の精神を、死を以てこの現し世に示されたのが山背大兄王とその一族でした。和とはただ言葉によるのみでは成就しない。まさに一身を投げ打つ「捨身の心」によって成就されたのでした。かくて玉虫厨子にこめられた捨身の願ひは、実に我が国の歴史の内に光を放ち、皇室の伝統として息づいていくのです。

日本の国を「大和」と呼びますが、いつからそのやうに呼ばれたかは定かではありません。しかし聖徳太子が和を最も貴ばれて国の礎とされ、山背大兄王が死を賭して和の精神を顕現されたその願ひが、大きな和をもって日本とする言葉となつたのでせう（亡くなられた夜久

先生のご示唆によります。山背大兄王を思ふとき、私はゴルゴダの丘で十字架上に死んでいったキリストが、一身に人々の罪を背負って「愛」を説いた姿と重なるのを覚えます。

五、昭和天皇の戦後御巡幸の御製

今年には終戦後六十五年を迎えました。長い月日は経ちましたが、戦争の思ひ出は国民の心に深い影を落としながら永久に去ることはありません。敗戦を境に日本は大きく変りました。しかし戦前から戦後を通じて、一貫して変わらないものがありました。それはどんなことがあろうとも国民の上を常に思はれる昭和天皇の御心でした。

戦争終結か否かを決定するその御前会議において、最後についてポツダム宣言受諾の聖断を下されましたが、その記録を読むとき誰しも万感の涙を禁じることができません。「自分の身はどうなってもかまはない。ただこれ以上国民を苦しめることはできない」と涙をのんで語られたお言葉。後に木下道雄侍従次長がお叱りを覚悟に、敢へて公開された終戦時の御製があります。

爆撃に倒れゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかにもいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

一首目の字余りにこめられたみ思ひの深さ。「身はいかならむとも」「身はいかにも」と二度も繰り返して詠まれ、ただひたすらに倒れていく国民の上を思つて戦を止められたその悲痛で広大なみ心を拝するのです。聖徳太子のお言葉、「ただ大悲やむことなく志益物に存す」を彷彿とさせる大御歌です。

昭和天皇がその後占領軍司令官のマッカーサーに会見なされた折にも、一身を顧みず、全ての責任は自分にある旨を語られたことが明らかにされました。そのことがどれほどマッカーサーを感動させ、日本国民を救ったことか。まさに捨身のご行為によつて国民は生き返つたのでした。

しかも昭和天皇は、敗戦で打ちひしがれその日の暮らしにも苦勞してゐる国民のことを思はれ、国民を励ますために自ら全国を巡ることを仰せになったのでした。それは無論、我が国の歴史上始めてのことでしたし、周囲の人々にとっては大きな不安でありましたが、昭和

天皇は意に介されず、直接国民の間にお立ちになったのでした。ご巡幸は昭和二十一年二月から始められ、一時中断はあったものの昭和二十九年の北海道まで続けられ、全コースは三万三千キロに及んだとのこと。ただ、後に復帰した沖縄にだけは御巡幸がかなはず、お亡くなりになるまでそのことを心にかけてをられました。

御巡幸の最初の御歌は、愛知県を訪問されたあとに発表されました。

災害地を視察したる折に

(昭和二十一年)

戦のわざはひうけし国民くになみをおもふ心にいでたちて来ぬ

わざわひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
国をおこすもとゝみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

昭和天皇が行幸される所、人々は喜びに包まれました。大勢の人に囲まれながらも陛下はご自身のことはさておかれて、帽子を振って歩かれました。陛下の激励に、国民は応へました。その民のすがたに、「うれしとぞ思ふ」、「姿たのもし」と詠まれ、常に国民とともに生きられるお姿を拝するのです。なほ三首目の「もとゝみ」は基礎、「なりはひ」は生業の意味です。

これらの御歌に拝するやうに、昭和天皇の御歌はどれも平易な言葉を使って詠まれてゐますので、感動がそのまま私どもの胸に伝はってきます。

昭和二十二年、「あけほの」のお題で戦後ふたたび始められた歌会始の御歌、

たのもしくよはあけそめぬ水戸の町うつつちのおともたかくきこえて

「たのもしく」夜が明けてゆく、といふその明るいお言葉。そこには戦後の廃墟の中から立ち上がり、朝早いうちから仕事に打ち込む人々に注がれる暖かい御まなざしがあります。打つ槌の音も「たかく」聞える、その力強く高い響きに昭和天皇の喜びが伝はってきます。水戸の町の夜明け、それは昭和天皇の御心の夜明けでもあり、また日本再生の夜明けでもありませう。

広島

(昭和二十二年)

ああ広島平和の鐘も鳴りはじめたちなほる見えてうれしかりけり

「ああ」と詠み出された御歌よ。かつてこんな御歌が歴史上あったでせうか。原爆によって壊滅した広島に平和を祈る鐘がなっている。そして人々は苦難の中からまた立ち直っているではないか。「うれしかりけり」と御心のままを率直に詠まれていますが、「けり」といふ詠嘆の結句にしみじみとした感慨がこめられてゐます。

御巡幸の折の御製のなかで特に胸をうつのは、恵まれない人々、苦しんでゐる人々を思つて詠まれた数多くの御歌です。

東北地方視察

(昭和二十二年)

水のまがにくるしみぬきしみちのくの山田もる人をあはれと思ふ

「まが」は禍のこと、「もる」は守る。「くるしみぬきし」の悲痛なお言葉に注目して下さい。水害によつて田畑を、また家を失つた人々に寄せられる限りない哀切の御歌です。

折にふれて

(昭和二十三年)

霜ふりて月の光も寒き夜はいぶせき家にすむ人をおもふ

風さむき霜夜の月をみてぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと

一首目、「いぶせき家」とは粗末な家ですが、月の光ももれてくるやうなあばら屋でせう。霜が降り寒さの身にしみる夜、そこに住む人たちがどんな思ひをしてゐるのであらう、と御心を悩ませてをられるのです。さらに悲痛なのは、戦に敗れて祖国に帰ることのできない人々のことです。とくにこんな寒い夜には、その人々はどうしてゐるのか、どれほど苦しんでゐることかと、月をみながらじつと偲んでをられるのです。

当時は戦災によつて親を失ひ、頼る人もない戦災孤児の子どもたちがたくさんをりました。その子供たちを慰めるために、昭和天皇は施設をご訪問になりました。

青松園にて

(昭和二十四年)

よるべなき幼子どももうれしげに遊ぶ声きこゆ松の木の間に

因通寺

みほとけの教へ守りてすくすくと生ひ育つべき子らにさちあれ

九州でのご巡幸でお詠みになった御製です。「よるべなき」とは身を寄せる人もゐない子供たちです。親はゐなくともうれしさうに遊んでゐる孤児たちの声が聞こえる。淡々としたお言葉のなかに深い慈しみの御心が伝はってきます。次は佐賀県基山の因通寺をご訪問になった折の御製です。ここの前住職は失明しながらも、孤児のために洗心寮といふ施設を作つて養つてをられました。その寮で陛下と子供たちとの感動的な出会ひがありました。一人の女の子が両親の位牌を胸に坐つてゐるのをお気づきになった陛下は、その子の話をお聞きになるうちに深くうなづかれ、その子のそばによつて頭をなでられたのでした。この時に、陛下の眼鏡を通して涙が畳に落ちていった、といふのです。詳しくは当時の住職であつた調寛しやうかん雅氏ががお書きになった「天皇さまが泣いてござつた」といふ書物に詳しく収められてゐますので、是非お読みください。天皇さまは、一人で生きていかななくてはならない子どもが、み仏の教へに守られてすくすくと育つてゐるのをご覧になり、この子らの幸を祈られるのでした。

六、今上天皇の御製と皇后さまの御歌

昭和天皇が崩御されて平成の御代となり、今上天皇が即位なさってから昨年は二十周年を迎えました。平成になってからもまた激動の時代の波がありました。ベルリンの壁の崩壊につづくソ連の崩壊は世界に衝撃を与へ、我が国では未曾有の好景気からバブルが崩壊し、阪神・淡路大震災などもあって国力の低下は今なほ続いてをります。しかし今上天皇はこの間も、常に国民の上に思ひをさせ、国内の全ての都道府県をご訪問なさって国民を励ましてこられました。昨年は御即位二十年をお迎へにられました。

かつて昭和五十年には、皇太子殿下とともに海洋博覧会のために沖縄をご訪問になりました。当時はまだ左翼系の学生運動が激しい時期でしたが、両殿下の沖縄ご訪問に合はせて大きな闘争を計画してをりました。当然十分な警備がなされてゐたはずでしたが、不祥事がおこったのは両殿下が「ひめゆりの塔」を参拝されたときでした。参拝をされてゐる両殿下の前の茂みの中に、ヘルメットを被った学生が隠れてをり突然火炎瓶を投げたのです。炎は殿下の足もとのすぐ近くで燃え上がり、学生たちは直ちに取り押さへられましたが、警備の人達が両殿下をすぐに後方へお連れしようとした時、皇太子殿下はそこを離れようと

されず、前を向かれたままで、ひめゆり学徒隊の生存者でその日説明をされてゐた方の安否を大声で尋ねられたのでした。その毅然とした皇太子殿下のご態度は、人々の心を激しく打ちました。それまでは皇太子殿下のご訪問にわだかまりがあった県民の心もすっきりと晴れ、その後は歓迎一色になったとのことです。ここにおいても、皇太子として、国民のためには自分を顧みないといふ御決意がおのづから示されたのでした。

この沖縄ご訪問の折に、皇太子殿下としてお詠みになった歌があります。

摩文仁が岡

(昭和五十年)

戦ひに幾多の命を奪ひたる井戸への道に木々生ひ茂る

戦ひの終りてここに三十年くりかへし思はむこの岡のこと

先の大戦で沖縄の南部にまで追ひ込まれた我が軍は、昭和二〇年六月二十三日司令官以下自決。ついに沖縄戦は終結しました。海を見下ろすその摩文仁が岡には、戦争で亡くなった軍人、民間人、味方も敵も合はせて二十四万人ほどの名前を刻んだ碑が、現在建つてゐます。その近くには、かつて沖縄師範学校の生徒たちが戦争に協力して掘った塹壕がありました。

から百メートルほど離れたところに井戸がありました。そこに水を汲みに行かうとすると、アメリカ兵から狙ひ撃ちをされ、学徒は次々と死んでいきました。殿下はその場所に行かれ、井戸への道に木々が茂つてゐるのをご覧になつてこの御歌を詠まれたのです。三十年といふ時が過ぎ、茂つた木々。それはまた戦争の記憶を塞いでしまふやうな、人心に茂る木々とお思ひはなかつたか。殿下は、「くりかへし思はむ」と詠まれましたが、皆がだんだんとその記憶を薄らぐなかにあり、くりかへして沖繩戦で亡くなつた方たちを偲ばれてゐるのです。さらに今上陛下は皇太子時代から、沖繩の人たちの心をその言葉によつて知らうと努められ、沖繩に伝はる琉歌をお詠みになつてこられました。現在琉歌を詠める人は沖繩でもほとんどをられないとのことです。

琉歌

ふさかいゆる木草めぐる戦跡　くり返し返し思ひかけて

(フサチユルキクサミグルイクサアトウ　クリカイシガイシウムイカキテイ)

「ふさかいゆる」とは、生ひ茂つてゐるといふ意味。ここにも「くり返し返し」といつまで

も忘れ得ぬ沖繩の戦を振りかへつてをられるのです。

沖繩平和祈念堂前

(平成五年)

激しかりし戦場の跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

おなじく南部戦跡での御歌ですが、丘に立って戦場をご覧になるその果てに、波も平らな太平洋が見えるのです。今は平和をとりもどしたものの、かつては戦鬪で多くの命が失なはれました。沖繩戦では陸だけでなく海での激しい戦ひもありました。特攻隊で敵艦を目指したまま海の藻屑と消えた方も幾百とをられました。平易なお言葉で詠まれその後半は静かな調べをたたへた御歌ですが、そのみ思ひは深く、心を打たれます。

今上陛下はまた、災害の被災地の方々に対して多くの御製を詠まれました。

阪神・淡路大震災

(平成七年)

なるをのがれ戸外に過す人々に雨降るさまを見るは悲しき

阪神淡路大震災被災地訪問

(平成十三年)

六年の難むづかきに耐へて人々の築きたる街みどり豊けし

春

(平成十四年歌会始)

園児らとたいさんほくを植ゑにけり地震なみゆりし島の春深ふかみつつ

いづれも阪神淡路大震災をお詠みになったものですが、幾度も繰り返して詠まれてゐます。平成七年一月十七日に起こった震災では六千余の方が命を失ひました。天皇皇后両陛下は、直ちに被災者をお見舞ひに行かれることを思ひ立たれました。ヘリコプターで現地に入られた両陛下は、冷たい雨の降る中を被災した人々に声をかけていかれました。皇后さまはその朝、皇居で自らお摘みになった水仙の花をもって、亡くなった方々を慰霊されました。悲しみに打ちひしがれながらも、両陛下の励ましにどれほど人々は勇気づけられたことでせう。御製一首目、「なみ」とは地震、家も失った人々が戸外で過してゐることを「悲しき」とまっすぐにお詠みなつてゐます。

しかしその六年後ふたび現地を訪れた陛下は、困難に耐へて復興し、豊かな緑をとりもどした街に深い感慨と喜びを覚えられたのです。さらに淡路島では、園児の子たちと「たい

さんぼく」をお植ゑになられました、この子たちは震災のころに生まれたのでせう。美しい花を咲かせ高く伸びてゆく「たいさんぼく」、子供達もそのやうにあつて欲しいとの願ひをこめて木をお植ゑになつたと思はれます。お植ゑになられたその島は、いま春を迎へてゐます。「春深みつつ」とのお言葉の莊重さ、調べの美しさに胸を打たれます。

最後に皇后さまの御歌を読んでまゐりませう。皇后さまはいついかなる時も天皇さまとともに歩んでこられました。慈しみをたたへ、優しいまなざしを常に国民にお向けになるそのお姿には、心打たれます。ここに揚げた二首のお歌はハンセン病（かつてライ病と呼ばれました）の施設を訪問された時のお歌です。

坂

（昭和五十年）

いたみつつなほ優しくも人ら住むゆうな咲く島の坂のほりゆく

多磨全生園を訪ふ

（平成三年）

めしひつつ住む人多きこの園に風運びこよ木の香花の香か

ハンセン病の患者さん達の多くは家族からも友人からも見放され、人里離れた施設でその

一生を過してゐます。体も痛んでゐますが、それ以上に心が痛んでゐる。そんな人たちですが、優しい心をもって住んでをられる沖繩の島、そこには赤いゆうなの花が咲いてゐて、その坂を兩陛下は上つていかれました。皇后さまはその患者たちと話され、手袋を脱いで患者の手をとられたとのこと。病のために指の形もなくなることはありませんが、それを厭ひもせずに皇后さまはお触れになつたのです。家人が見舞ひに訪れることさへほとんどない人たちにとって、兩陛下がお見舞ひなさるだけでも大変な喜びでした。まして皇后さまに手を取られた方の感動はいかばかりであつたこととせう。人の苦しみをご自分の苦しみとしてお感じになるのです。

二首目は多摩にある施設でのお歌。ハンセン病ではときに失明しますが、そのやうな人々に思ひをさせて詠まれました。「めしひ」とは失明してゐること。この御歌の素晴らしさは、ことに最後の「木の香花の香」にあると思ひます。目は見えなくとも、香りは感じられます。風よ、木の香り、花の香りを運んで下さい、と詠まれるそのお心のやさしさ、細やかさ。後の五七七に「カ」行の連なる歌の響きの美しさとともに、忘れ得ぬ御歌です。

生

(平成二十一年歌会始)

生命いのちあるもののかなしさ早春の光のなかに揺り蚊ゆすの舞かふ

この御歌は「生」のお題で詠まれた歌会始のお歌です。ゆすり蚊といふ小さなはかない命の蚊の群れが、早春の光の中で舞つてゐる。どんな小さな生き物でも、精一杯に生きてゐます。私たちもまた同じ命をいただいて、生きてゐます。美しくも滅びゆくものへの限りない慈しみがあふれてゐます。「かなしさ」とは悲しさであり、愛かなしさ、また哀かなしさでもありません。

うららか

(平成十年)

ことなべて御身おんみひとつに負おひ給ひうらら陽ひのなか何思おぼすらむ

これは天皇さまのことをお詠みになったお歌です。「ことなべて」とは、「全てのことを」の意味ですが、天皇さまは国民のことを常に思ひその幸せを願つてをられる。長い皇室の伝統を受け継いで常に祈りを捧げてこられました。すべてを黙って背に負つてゐらっしゃるの

です。うらら日のなかでじっとしてみらっしゃる天皇さま。座ってをられるのでせうか、皇后さまはその御姿を仰ぎ、何を御思ひになつてをられるのであらうと、嚴肅なお心でこの御歌をお詠みになつたことと拝察するのです。

天皇さまが国民のためにひたすらに祈つてをられる、そのお姿を仰ぎながら皇后さまはまた天皇さまのために一身を捧げてをられるやうに感じます。まるで古事記のあの弟橘媛命おむすねのひめのみことが倭建命を慕ひ、荒れる海に身を投げられたやうに。

歴史をひとすぢに貫く玉の緒、歴史の命について考へてまいりましたが、そこには連綿と続く皇室の御心があり、これを慕つてきた国民の心がありました。玉のやうに美しい日本の歴史を懐かしみ、慕ふ心こそは時代をつないでゆくものです。私たちはまたその素晴らしい心を次の代に伝へる役目があります。みんなで心一つにして共に学び、助け合つて参りませう。最後に、講堂の前に墨書されてゐる明治天皇の御製を、皆さんとともに拝誦して私の話を終ります。

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世に立つ力なるべき

講義

持続する志

—橋本左内「啓発録」に学ぶ—

(株) 寺子屋モデル代表世話役

山口 秀 範



はじめに

- 一、橋本左内の見識
- 二、「啓発録」の「序文」と「あとがき」
- 三、「啓発録」を読む
- 四、橋本左内と吉田松陰
- 五、「士規七則」の三端
- 六、先人に繋がる志

はじめに

昭和三十一年の八月に開催された「第一回合宿教室」の最終日、終了間際の講義で国民文化研究会の初代理事長・小田村寅二郎先生はかう語ってをられます。

先ず皆さんにスピリット (Spirit) を持て、と申し上げたい。スピリットとは意思でもあり、精神でもあり、また魂と申してもよいであろうか。：スピリットは人間の部分を統一するものである。知識も情意も、更に肉体もふくめて、それを統一あるものにととのえる。：皆さんがスピリットを持ってこの合宿に参加しておられたならば、あらゆる合宿の体験は単なる理論の累積にとどまらずに：必ずや生命的な燃焼が体験された筈である。

特に初参加の方はこの合宿中に感じたものを何と表現したら良いかと自問してゐるかも知れません。四十年前に初めて合宿を経験した私も、それまで味はったことのない感慨——自

分の心の中で燃え立ち、沸々と湧き上がるもの——を覚えましたが、それを何と呼んだらいいか判らぬままでした。今にして思へばそれが「スピリット」だったのでせう。皆さん方が今抱いてゐる思ひもまた同様かもしれませぬ。そしてこのスピリットを日本語に言ひ換へたら「志」に当たると考へます。

今からお話する幕末の志士・橋本左内は、越前福井県の出身で数へ年十五歳（今なら中学二年生）の時に「啓発録」といふ文章を書いてゐます。実は福井市の郷土歴史博物館が「やさしい啓発録」といふ小冊子を作つて市内の全中学生に配布し、百五十年前の郷土の先輩に学ばうといふ教育活動を行つてゐるさうです。先日発表された全国学力テストの県別成績で、福井県は秋田県と並んでトップを争ふといふ成果を上げてゐますが、「啓発録」を通じて「志」を養ふ取り組みも、この結果に影響したのではないかと注目されてゐます。

本合宿で初日から繰り返して語られたのも、この「志」についてはなかつたでせうか。藤新成信先生は導入講義で「皆さん方は何のために学ぶのか」と問ひかけられました。そして聖徳太子のお言葉を引きながら「他とつながりつつ生きてゐる自分に気付くこと」或は「自己への捉はれから離れよう離れようと努力する姿勢」とヒントを示して下さいました。どう生きたいかといふ自己の課題が、他者或は世の中を考へることとどう繋がるのか、そこに



「志」を立てる大切な手掛かりがある。そんなことに初日から気付く機会を頂いたやうに思ひます。

一、橋本左内の見識

橋本左内は一八三四年に、越前藩の医師の家に生まれます。例へば吉田松陰よりも四歳、西郷隆盛よりも七歳若いのです。十六歳で大阪に出て蘭学で名高い適塾に入門、猛勉強で頭角を現します。二十歳を過ぎた頃は、英明なる藩主松平慶永（春嶽）の相談相手を務め、懐刀と呼ばれるまでになります。安政四年十一月、橋本左内二十四歳の時に、友人の村田氏壽（うらじひき）へ宛てた手紙からは、左内が当時の国際情勢をどう理解してゐたかを窺ふことが出来ます。

海外の事情第一に御推察之有り度候。方今の勢は、行々も五大洲一図に同盟国に相成り盟主相立て候て四方の干戈相休み申す可く相運び候半ばと存じ奉り候。右盟主は先ず英・魯の内に之有る可く候。畢竟日本国中を一家と見候上は、小嫌疑には拘る可からざるは勿論に御座候。何分日本に於て、遠大の処置之無くしては相済まず。：

世界の情勢は混沌としてをり、特に東洋は西洋列強によつて次々と植民地化されてゐるが、さういふ弱肉強食の国際政治は云はばまだ途上で、ゆくゆくは五大洲の国々が同盟を結び、それぞれ同盟のリーダーを選んで拮抗するやうになるだらう。そこでは戦争や紛争は一時的に収まり、世界は協調へと向つていく。その際にどの盟主と組むかが大変重要になる（左内はイギリスよりもロシアと同盟すべきだと述べてゐます）。鎖国中の日本で二十四歳の青年がここまでの視野・見識を持つてゐたとは驚きです。

一方日本国内は、その激動する国際情勢の中で目先のことにのみ捉れ、あいつは気に入らないとか信用できないといふ次元で対処してゐるが、それではとてもこの世界の潮流について行けないと危機感を募らせます。

一昨日中西輝政先生のおっしゃった「新しい日本人」の典型を、橋本左内に見ることがで

きるのです。「尊王攘夷」に関して中西先生は、「開国攘夷：国を開きながら結果として攘夷を実行する、そんな考へ方も当時あったのだらう」と示唆されましたが、正に橋本左内は、国を開き西洋に学びつつ、しかし西洋に一步も引かないだけの力を日本の中で今から蓄へていかうとする志を披歴してゐます。

二、「啓発録」の「序文」と「あとがき」

さて、「啓発録」は左内が数へ年十五歳の作ですが、十年近く経過したこの頃に、親友の矢嶋暉あきつに「序文」を依頼し、自らも「あとがき」を加えました。執筆以来誰にも見せずに文箱へ入れておいたものを、この時になって弟の橋本綱常や弟子の溝口辰五郎に見せようと思ひ立ち取り出してきた。矢嶋暉は左内より三つ位年上ですから、この「叙」を書いた時には二十七、八歳です。

啓発録叙

十許年前、余、橋伯綱と東篁田翁とうこうでんおうに従ひて遊ぶ。翁の門下、雄弁倜儻ていきこうの士多く相聚あつまり、

掌を抵ちて與に当世の事を譚ず：伯綱時に年才かに十五六：首を俯し膝を斂め、含蓄し
て敢て一言をも発せず。余、窃かに之を怪しむ。(中略)夫れ伯綱は見る毎に屢々變じ、變
ずる毎に愈々その有用の学に涉るを見る。然りと雖ども、余その何を以て然るかを知る
能はざりき：属者伯綱その少時著す所の啓発録を出して、叙引を徵せらる：夫れ学問の
本は忠孝に在り、伯綱既にその本あり、宜なるかな、その学の進むや徒然ならざりしこ
と。是に于て余の疑怪始めて积けたり：矢嶋暉撰す

十代前半の頃に、越前藩の少年たちは吉田東篁といふ儒学家に学び、天下国家を論じ合つてゐたのでせう。皆が口角泡を飛ばす中であつて、十四歳の左内少年はじつと下を向いて膝を曲げ、目立たない様子で一言も喋らなかつた。矢嶋は「密かにこれを怪しむ」、「あいつ、本當に理解して志を立てる気があるのかな」と怪しみつつ観察してゐた。ところが、三年後五年後と時々会ふ度に、橋本左内はめきめきと成長して「有用の学」、世のために役に立つ学問を身につけて行つた。日頃からその変貌ぶりを不思議に思つてゐたところ、この度「叙」を頼まれて「啓発録」を読み、「なるほど十四歳の時から橋本左内君は忠孝を胸に人一倍勵んでゐたのだなあ」と十年来抱いてゐた疑問は解けた。それが矢嶋暉の「序文」です。

橋本左内自身の「あとがき」は、数行の短いものです。

右啓発録は、今を距つること十許年前、余が手記する所なり。その言淺近なりと雖ども、當時を顧みるに憤排の奮ひ且つ厲しき、反つて今日の及ぶ所にあらざるなり。嗚呼十年前、既に彼の如し。而して今日此の如し。則ち今より十年の後、それ將た如何ぞや。緡閱の間、覚えず赧然たり。

安政四年五月 景岳紀識す 時年二十又四

十年前書いた「啓発録」を改めて見返すと、やはり幼く内容的にも浅くて恥づかしくなるが、しかし一方では、どうすれば一人前の大人になれるかと思ひ詰めながら心中を燃え上がらせる年頃だった。若手論客として全国に名を知られるやうになった左内も、その点では十年前の純粹だった自分に及ばないなあと回顧するのです。かうして十年前を振り返りつつ今を生き、そして十年後、自分がそして日本の国がどうなるのか、さういふことに思ひを巡らせるのです。

三、「啓発録」を読む

では「啓発録」を読んでみませう。相当長文で見事な文章と内容です。その基本構成は、「少年学に入るの門戸と心得」、元服し一人前の武士となるための心構へを「稚心を去る、氣を振るふ、志を立てる、学を勉む、交友を択ぶ」といふ五項目に分けて記してゐます。

啓発録（抜粋）

去稚心…果菜たぐひの類のいまだ熟せざるをも稚といふ…父母によしかゝる心を起し…皆幼童の水くさき心より起ることにして…

振氣…氣とは…恥辱ちじやくのことを無念に思ふ処より起る意氣張りの事也。振とは…心のなまり油断せぬ様に致す義なり。

立志…志を立てるとは、此心の向ふ所を急度相定…常常其心持を失はぬ様に持こたへ候事にて候。凡そ志と申すは…平生安楽無事に致し居り、心のたるみ居候時に立事はなし。

勉學……學とはならふと申す事にて、すべ総てよき人すぐれたる人の、善き行ひ善き事業を

あはせ迹付して

習ひ參るをいふ……此等の事を致し候には、胸に古今を包み、腹に形勢

そらん機略を諳じ

藏め居らずしては、かな叶はぬ事共多く候へば……吾心膽を練り候事肝要

に候。

扱交友……世の中に益友ほど有難く得難き者はなく候間、一人にても之有れば、何分大切

とくにすべし……

扱益友と申は兎角氣遣な物にて折々面白からざる事之有り候。夫を

篤と了簡すべし。

まづこれから元服を迎へ、大人の一步を踏み出さうとする時に「稚心（をさな心）を去る」
のが何よりの出发点であると言ひます。果物や野菜がまだ熟してゐない、水っぽく青臭い状
態を稚と呼びます。「……父母によしか、る心を起し」、よしか、るは、寄りかかること。お父
さん、お母さんに頼り切る甘へは「……皆幼童の水くさき心より起ること」、未熟な心が原因と
いふのです。その水くさい心を捨て稚心を除かなければ、次の「氣を振るふ」といふ段階に
は行かない。中途半端な腰抜け侍になつてしまふぞと、自分を戒めてをります。

次は「振氣」ですが馬鹿にされたら悔しがる、學問の無知を恥ぢる、それが「氣を振るふ」

ことでせう。しかしいくら意気張つても、眠気を催して先延ばしにしたり、恥辱の思ひが薄れていくこともあるわけですね。だから、やるぞと奮起してもやがては心がなまって油断するといふことを戒めるためには、次の「立志」が何よりも必要になると書いてあります。「立志」を伴はない「振気」は、氷が次第に溶けていくやうに、或いは、酔っぱらつて良い気持ちになつても翌日起きたら醒めてしまふやうに、すぐ後戻りをしてしまふ。気を振るつて何とかしたいといふ気持ちは大切。しかし、それだけでは「今週駄目だったから来週こそ頑張ろう」といふ連鎖を断ち切ることは難しい。やはり「志を立てる」ことだと、止むに止まれぬ思ひで綴つてゐます。

「志を立てる」とは、自分がどこに向かつて行くのか、何を目ざしてゐるのかをはつきりと定めることだと言ひます。「…常常其心持を失はぬ様に持こたへ候事」、ここが「気を振ふ」の段階と違ひますね。心がなまって油断するのではなく、自分が向はうとする心を失はず持ち堪へることが出来る、それが志だと言ふのです。しかし、志だけではやはり「有用の学」をなすには不完全で、立てた志を支へ強化していく二つを欠くことが出来ない。それが「学を勉む」であり、「交友を振ふ」なのです。

学ぶとは、勉強・学問とは何か。それは、尊敬する人、素晴らしいと思へる人、そんな人

の善き行ひ、善き事業を、跡を付いて行つて真似をしてみる。お手本にしながら学ぶこと、それを「勉学」と橋本左内は呼んでゐます。

「胸に古今を包み」とは、古典や現代の優れた書物に正面からぶつかつて精神を練ること。同時に現状分析し戦略を腹に蓄へることも大切だと記します。この二つが「新しい日本人」の必須条件だと中西先生はおっしゃいましたが、橋本左内もそれを自覚したのです。そして、その読書が続けてみれば何が起こるか。精神が練れ、戦略が蓄へられる反面、学を勉めれば勉めるほど、驕慢、ひとりよがりの驕りや慢心が心にすぐ芽生えてくると書いてあります。それを正してくれるのは何といつても友達、「交友を択ぶ」に入ります。

左内は友には二種類——「損友」と「益友」——があると云ひます。損友とは付き合つたら損をする友達で、益友は付き合へば付き合ふほど役に立ち値打ちの出でくる友達のことです。損友は自分の言ふことを何でも「ああさうだね、君が正しいよ」と聞いてくれる友。十五歳の左内は、そんな友達とは付き合つたら損になるばかりだと言ひます。一方「世の中に益友ほど有難く得難き者」はゐないから、益友だと思ふ人が自分の周りに一人でもをれば、この益友を捕まへて絶対離さないといふ気持ちで付き合へと言ひます。気が合つて一緒に酒飲んだらうまいといふ友人も貴重ですが、左内にとっての益友は「兎角気遣いな物にて折々面

白からざる事之有り」、一緒にゐると何か居心地が悪く、「君が昨日言ったことと今日やっていることは違ふじゃないか」、「あれほどこの本を読むと言つてゐたのにまだ半分も読んでない」と指摘する、そんな友です。皆さんも、眞の益友を一人でも見つけたら大事にして下さい。

以上が「啓発録」の内容ですが、佐内は最後に自分の日常を振り返ります。「性質疎直にして柔慢なる故、遂に進学の期なき様に存じ、毎夜臥衾中にて涕泗にむせび」、自分は生れつき緻密でなく単純にものを考へてしまふ。また優柔不断でもあり、こんなことでは本当に立派な大人になれるかと思ひ悩み、毎夜布団の中で不本意だった一日を振り返つては枕を濡らすと告白してゐます。しかし、それと同時に何とかして身を立て、父母の名を顕はさうと努力を続けければ、「後世必ず吾心を知り：吾道を信ずる者あらん歟」。まさに百五十年後の私たちが、橋本左内少年の切々たる思ひに感応してゐるではありませんか。

四、橋本左内と吉田松陰

二十四歳の時に「今より十年の後、それ將た如何ぞや」と将来を見据えてゐた青年、橋本

左内は、二年後の安政六年十月七日に「安政の大獄」により刑場の露と消えます。処刑の一週間ほど前に、佐内が繋がれてゐた伝馬町の牢東奥の同室に勝野保三郎といふ同志の一人が移送されてきました。そして勝野から、吉田松陰が同じ牢の西奥に収監されてゐることを知らされた橋本左内は次のやうな漢詩を作ります。

「曾て英籌を聴き鄙情を慰む」

君を要して久しく同盟を訂らむと欲す

碧翁狡弄何ぞ恨みを限らむ

春帆太平を颯らざら使む

かねてより吉田松陰先生の名声は、越前の田舎にまで届いてをり、一度会つて教へを請ひたいものだと思ふくらませてゐた。今一緒に日本の将来を語り合ひたいものだ。「碧翁」は碧の眼をした翁、つまりペリーのことです。老巧なペリーが、下田から黒船に乗り込まうとした松陰先生を拒絶したことはまことに残念である。あの時、松陰先生の志にまう少し理解を示してくれば、風に帆を張つた船で太平洋を渡り、「開国攘夷」に向けて海外での勉学に勤しんでをられただらうに、といふ詩です。

この詩は、再度西奥の牢に移された勝野保三郎に託されて吉田松陰の手元に届いてをります。松陰は有名な「留魂録」の一節で「越前の橋本左内、二十六歳にして誅せらる、実に十月七日なり」とその死を惜しんでゐます。更に、「左内東奥に坐する（わづかに）五六日のみ。

予、勝保（勝野保三郎）の談を聞きて益々左内と半面なきを嘆ず、当時伝馬町の獄は敷地七千平方メートルぐらゐるので、西奥の松陰の五、六十メートル先には左内がゐた筈です。両者とも今生で一目だけでも会いたかつたことでせう。

左内は獄中で「資治通鑑」の注釈書を作り、また牢獄制度の改革につき意見書まで遺してゐるのです。松陰はその内容も読み「大いに吾が意を得たり。予益々左内を起して一議を發せんことを思ふ。嗟夫」と追悼の意を表します。自自身が今日か明日の命といふ時に、つい二十日前に亡くなつた橋本左内を揺り起して日本の将来を語り合ひたかつたと言ふのです。英雄は英雄の心をこのやうに知り、共鳴するのでせう。

五、「士規七則」の三端

その吉田松陰が二十六歳の時、元服を迎へる甥の玉木彦介に一人前の武士となるための七つの心構へを記した「士規七則」を贈ります。そしてその七項目を書き終はつた後に「右士規七則約して三端と為す」と、次のやうに三つに要約してゐます。まづ「志を立てて以て萬事の源と為す」、「啓発録」の三番目と符牒してゐるでせう。三端の二つ目は「交を擇びて以

て仁義の行を輔く、「仁義の行を輔く」は人として行うべき道、その道が曲がったり挫けたり、独りよがりにならないやうに助けてくれるのは友達だ。「啓発録」の五番目「交友を択ぶ」と全く同趣旨です。そして、三端の最後は「書を読み以て聖賢の訓を稽ふ」、読書の勧めですが、その目的は自己の人格完成などではない。聖人賢者の遺してくれた言葉を通じて、その立派な生き方を、学びかつ咀嚼することが「聖賢の訓を稽ふ」でせう。言ふまでもなくこれは「啓発録」四番目に通じる内容です。

橋本左内・吉田松陰といふ二人の偉人が、十五歳の自分自身へ、或は十五歳の甥に向けて全く同じ教へを遺しました。これは同時に、今この平成の御世を生きる私たちへのメッセージとも受け取ることが出来ませう。

六、先人に繋がる志

最後に、本合宿の先生方のご講義を繋いでいくと、岡潔先生の言葉「ともになつかしむことのできる共通のいにしえを持つ：しあわせ」を改めて感じずにはられません。吉田松陰、橋本左内が、そして元寇を防いだ武士たちや万葉歌人も、それぞれが「輝く歴史の玉の緒」

としてこの世の生を全うされ、それらがひとつに連なって見えることを示して下さった、そんな合宿だったと思ひます。

七百年以上前の文章「蒙古襲来絵詞」を私たちは、志賀建一郎先生のお蔭で昨日のことのやうに読むことができた。柿本人麻呂は千三百年以上前の人ですよ、それを賀茂真淵の研究によつて、また國武忠彦先生の手引きによつて、これまた手に取るやうに先人と心を通ひ合はせることができませんでした。機縁にさへ恵まれれば、私たちにとつては至極当り前のことです。しかし、私の海外経験によれば、千年も前に祖先が遺した書物を当り前のやうに声に出して読むことができる、こんな幸せを持つてゐる民族・国民は日本人以外には殆んどあり得ません。私が足を踏み入れた三十五か国の多くには固有の文字がありません。文字を持つ民族の方が世界の中では少数派なのです。私たちの祖先は千五百年以上も前に大陸から採り入れた漢字から、やがて平仮名、片仮名を確立して和漢混交文を編み出しました。さうした先人の苦闘がなければ、昨日、一昨日のやうな至福の時間を共有することなどあり得ません。

歴史が千年以上連続してゐる国も極めて稀です。隣の国の「論語」は、確かに二千五百年前に生まれました。しかし、志賀先生のお話にあつた「多民族国家チャイナ」では、かつて

孔子が弟子たちに語ったやうな発音で「論語」を読める現代中国人は皆無です。文化が断絶してゐるからです。何も日本だけが優れてゐると言ひたいわけではありません。ただ、私たち日本人はまことに恵まれ、古代と直結した状況でこの平成の御代を迎へてゐる。それを喜び感謝する、ここが私たちの学問の出発点だと思ひます。

皆さん方が今感じてゐる「スピリット」を、そして「振気」を、やがて「立志」へと高めて頂きたい。左内は「凡そ志と申すは：平生安楽無事に致し居り、心のたるみ居候時に立事はなし。」とも書いてゐます。志を確かなものにし、大きく支へてくれるのは「勉学」と「益友」です。この阿蘇の山を下りても、益友を探しながら先人の美しい言葉に出会ふ、そんなわくわくと胸躍るやうな学問の輪を、全国各地で広げていきませう。

会員発表

インテリジェンスについて

FTIインターナショナルリスク日本支社

伊藤俊介



はじめに

私はこの合宿教室には学生時代、大学二年生から毎年参加してをりました。学生時代最後に参加した合宿が阿蘇のこの会場だったのを覚えてをります。それが平成十二（二〇〇〇）年の夏でしたので、十年経ってまた同じ場所での合宿で、今度は皆さんにお話をさせて頂くことになりました。

今回の合宿で中西輝政先生から「インテリジェンス」についてお話がありました。中西先生は「国家のインテリジェンス」といふ観点でお話をされましたが、私からは「民間のインテリジェンス」に関するお話をしたと思ひます。

インテリジェンスとは

私は「FTIインターナショナルリスク」というコンサルティング会社に勤務してをります。実はこの会社が提供するリスクコンサルティングの基礎となつてゐるのは「ビジネスイ

「インテリジェンス」と呼ばれるものです。これは、中西先生が仰られた「国家のインテリジェンス」と比べるならば、「民間のビジネス分野におけるインテリジェンス」といふことになりました。

そもそも「インテリジェンス」とは、日本語では「知性」と訳されることがありますが、他の訳を充てるなら「情報」といふことになります。一方、「情報」は多くの場合「インフォメーション」の訳語として使はれます。では、「インフォメーション」と「インテリジェンス」の違いとは何でせうか。

「インフォメーション」を、私を例に説明しますと「名前は伊藤俊介、男性、三十三歳、身長百八センチメートル」といったものが「インフォメーション」となります。ところがこれは事実の羅列に過ぎません。「インテリジェンス」は、「伊藤俊介は、友人や先輩・後輩からこの様な人物として見られてをり、こんな評価を得てゐる」といった「意味を持った情報」のことを指します。ですから、日本語ですとどちらも「情報」となるのですが、「インテリジェンス」の方が意味のある情報であると思へると思ひます。



「ビジネスインテリジェンスの活用」が私の 仕事

私が勤務する「FTIインターナショナルリスク」の日本支社では、このインテリジェンスを活用して、主に日本企業の海外進出におけるビジネスリスクの低減に関するコンサルティングを行っており、特に海外の企業やその経営者等に焦点を当て、リスク評価を頻繁に行っております。

例へば、日本企業が海外企業と提携を行ふ、あるいは海外企業の買収や海外企業への出資を行ふといった場合に、相手方企業の運営実態や経営陣の実態、すなわち「どの様な会社なのか」「どの様な経営者なのか」について情報収集を行ひ、それらの情報に、提

携や買収・出資におけるリスク評価を付加したインテリジェンスを、依頼した企業に提供してゐます。またさらに、そのインテリジェンスによって判明したリスクの回避・低減に関するコンサルティングを行つてゐます。

「FTIインターナショナルリスク」は英国系の会社です。本社が香港にあるのは、香港が一九九七年七月一日、中国へ返還されるまで英国の植民地だったからです。社長は香港警察の幹部を勤めた英国人ですし、日本支社代表も英国外務省の情報部門に十数年勤めてゐた英国人です。

私もかつて香港に在住し、英国の大学院にも留学した経験があります。英国の大学院では、民間軍事会社に関する研究で修士号を取得しました。私は民間軍事会社の研究を通して、国家が用ひる技術、すなはち軍事力やインテリジェンスといったものは、現代の社会においてはすでに民間化され、会社組織によつて様々な分野での活用がなされてゐるといふことを学びました。現在、私は、インテリジェンスのビジネス分野における活用を日々行つてゐる訳です。

ビジネス分野におけるインテリジェンスの活用事例

ビジネス上のリスクを回避するには、「事前の準備段階」と「懸念事項やトラブルへの対応段階」との大きく分けて二つの段階があるのですが、インテリジェンスはこの両方の段階において活用することが出来ます。

まづ「事前の準備段階」におけるインテリジェンスについてご紹介しますと、現在、中国の経済成長に伴ひ日本企業による中国企業への投資が非常に活発に行はれてをりまして、時に数億円、数十億円もの規模で投資がなされることも多いのですが、例へば投資実行の最終判断前に、投資先の中国企業がどんな企業で経営陣はどの様な人達なのかしっかり確認をしておきたいといふやうなご依頼を頂きます。そこで我々は投資前のインテリジェンス収集プロジェクトを年に数百件の規模で行つてゐます。

そのやうなプロジェクトの中であつた一例ですが、ある中国企業のオーナー社長が戸籍を複数持つてゐる方だつたといふケースがありました。このこと自体は、残念ながら中国では驚くべきことではなく、特に中国共産党の地方幹部の中には戸籍を一人で三分、家族が五

人もいれば十五人分も持つてゐることがしばしばあります。これは何と将来年金をたくさんもらふためなのです。中国では戸籍を管理する立場の人達が、自らの利益のために虚偽の戸籍を作つてしまふといふことが平気で行はれてゐるのです。

それが中国の実情ですが、このオーナー社長が複数の戸籍を持つてゐたといふケースの場合は問題がより深刻でした。オーナー社長の複数の戸籍の内、本来の戸籍といふのが中国の情報機関に所属する人物の戸籍だったので、なぜその様な人がわざわざビジネス用に別の戸籍を使つてゐたのかといへば、結局日本企業から莫大な投資資金を得て、それを中国の情報機関の資金源にしようとしてゐたのです。

このケースの場合には、我々が依頼企業にこれらのインテリジェンスと「この投資は絶対に行つてはならない」とアドバイスを行ったことで、幸い被害を事前に防ぐことができました。ただ、中国ではこのやうなことが横行してゐるのです。

一方、「懸念事項やトラブルへの対応段階」におけるインテリジェンスについてご紹介しますと、ある日本企業が中国において現地の中国企業と五十パーセントづつ出資して合弁会社を設立し、例へば「イトウ中国」といふ名前でビジネスをしてゐました。この「イトウ」といふ日本企業は日本をはじめ欧米でも非常に知名度があり、中国でもたくさん仕事が入つて

来た、しかし「どうも全く利益が伴はない。確認してもらへるか」ということで、我々がインテリジェンスの収集を依頼されました。

すると、合弁会社の社長でもある合弁相手方の中国企業のオーナー社長が、百パーセント自己出資の個人会社として、合弁会社の「イトウ中国」と全く同じビジネスを行ふ会社を裏で設立・運営してゐたことが判明しました。つまり、日本企業との合弁会社で受注した仕事を丸ごと自分の個人会社に下請けする。しかも非常に高額な費用で下請けに出してしまふので、結局受注した合弁会社ではほとんど利益が出ず、オーナー社長の個人会社だけが儲かる、といふ仕組みになつてゐたのです。

この様なケースは会計士が監査をすればわかるのではないか、と思はれる方もあるかも知れませんが、実際には中国において会計監査だけで事業運営の実態を把握するのは非常に困難です。中国では上場企業においてすら粉飾会計は日常茶飯事ですし、ましてや右のケースの様な場合には、日本企業から派遣された役員や社員には全くわからない様にことが進められてゐたからです。

したがって、情報収集ネットワークを活用した相手方の実態に関するインテリジェンスが必要となつたのです。尚、このケースの場合には、我々は依頼主の日本企業に対して収集さ

れたインテリジェンスの提供を行ふと共に、合弁相手方に対する監査権の強化や日本から新たな役員を派遣する等の方法による事態の解決を提案しました。

英国によるインテリジェンス活用の歴史的背景と日本におけるその欠落

ところで、なぜ私の会社ではこのやうなインテリジェンスの収集が出来るのでせうか。それは英国の持つ歴史的背景にあります。いはゆる大英帝国、「太陽の沈まぬ国」とまで言はれた様に、地球の東西どこまで行つても英国の領土があるといふ時代がありました。そして私会社のインテリジェンスは、その大英帝国時代に構築され現在まで存在し続けてゐるネットワークを活用することで収集されてゐると言へます。

大英帝国による世界規模でのインテリジェンス収集ネットワークの構築は、例へば日本においても幕末期からすでに見ることが出来ます。長崎にグラバー邸といふ洋館が現在もありますが、あれはジャーデイン・マセソン商会といふ英国商社の日本代表の方の邸宅であり、当時から日本にも英国のネットワークが構築され出したことのシンボルとしてみる事が出来ます。

現在の英国は人口も日本の半分程しかない国ですしGDPでも日本の半分程です。それだけを見ればなんといふこともない国なのです。しかし彼らは未だに世界帝国の末裔としての意識を持ち、当時からのネットワークが未だ厳然として存在し、国家やビジネスにおける戦略の策定と実行にそれらが活用されてゐるのです。

では一方、日本は英国の様なインテリジェンス収集ネットワークを独自に持つてゐるでせうか。残念ながらその答へはノーなのです。中西先生も「日本ではインテリジェンスを学ぶことが全く出来ない」と仰られた通り、日本は世界規模のインテリジェンス収集ネットワークと呼べるものを一切保有してゐないのです。

例へば、かつて日本のビジネス界では大手総合商社が「民間情報機関」とも言はれてゐましたが、現在では彼ら自身では収集することが出来ない重要情報については、私の会社からもインテリジェンスのご提供をさせて頂いてゐるのが実情です。

また、国家レベルで見ても、英国では有名な「MI6」というインテリジェンス専門の家機関が存在してゐますが、残念ながら日本の政府機関の中には「MI6」と同等のインテリジェンス専門機関は存在してゐません。「MI6」ひとつをとつてみても、英国は過去に大英帝国であったという歴史的な背景があるからこそその様な機関を設立した、また設立する

ことが出来たと言へます。

ところが、日本はこれまでの歴史において世界帝国を築いたことがありませんし、その様な帝国を築かうとしたこともありません。ましてや、江戸時代には鎖国をしてゐた国ですから、現在に至るまで国家レベルでも民間レベルでも有効なインテリジェンス収集ネットワークを構築することが出来てゐません。

尚、先ほどから比較対象として申し上げている英国だけではなく、アメリカ、ロシア、フランス、中国の各国には、国家としても専門のインテリジェンス機関がありますし、また私の会社の様な民間のインテリジェンス機関の様な会社が多数存在してゐます。お気づきかとも思ひますが、実はこれらの五ヶ国は全て国連安全保障理事会の常任理事国、すなはち世界の大国です。世界の大国では、すでにインテリジェンスといふものが民間化される段階にまで活用し尽されてゐるのです。

それらと比較すると、日本の現状といふものは世界の大国からは程遠いものがあります。また同時に、国家レベルでの取り組みの遅れや、そもそも我が国の歴史を振り返ってみても、日本がこれから独自にインテリジェンス収集ネットワークを構築して行くことは、残念ながら非常に困難なことのやうに思はれます。

では、独自のインテリジェンス収集ネットワークが無いために有効なインテリジェンスを収集することが出来ないとなつてしまふのでせうか。ビジネスの分野を例に挙げれば、先ほどご紹介したケースで明らかやうに、海外へ投資した多額の資金が全く利益を生まず、むしろ損失が生じてしまふといふことはもちろんですが、お金の面だけではなく、長い年月をかけて培った技術あるいはノウハウ、さらに場合によってはブランドといったものまで全て海外企業に流出してしまふといふ事態になるのです。

この様な日本のビジネス界の現状について、私は非常に強い危機感を持つてをりますし、また悔しくも感じてゐます。

をはりに

従つて、私は、日本に独自のインテリジェンス収集ネットワークが無いのであれば、外国のものでも良いからどんどん使つて行くべきだと思ひます。

例へば、現在では日本の自動車は品質でも販売量でも世界一だと言はれてゐますが、五十年程前はさうではありませんでした。けれども、海外の技術やノウハウといふものを取り入

れて、さらに独自の改良改善を加へて、今日までの成長に繋げて来たといふ経緯があります（むろん、そこには職人文化にも見られる伝統的な勤労観や良質な労働者といふベースがあったことはいふまでもありません）。

私はインテリジェンスの分野でもそれが可能であらうと思ふのです。ですから、英国のもので、あるいは他国のものでも良いから、活用できるものはどんどん使つて行くべきであり、さうしなければ日本といふ国の重要な基盤の一つであるビジネス界の将来は危ふいと思うのです。その危機感を常に抱きながら日々自身の仕事に努めております。

今回はインテリジェンスといふものについて、ビジネス分野における具体的な実例をご紹介しますながら、私の思ひも含めてお話をさせて頂きました。

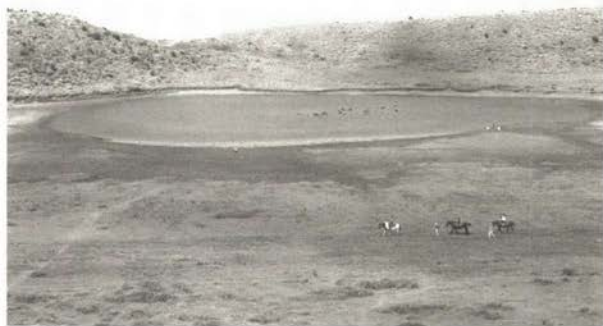
ご清聴ありがとうございました。

短歌入門

短歌創作導入講義
—『短歌のすすめ』を読む—

元富山県立富山工業高等学校教諭

岸 本 弘



- 一、 昨年の学生諸君の作品から
- 二、『短歌のすすめ』刊行の経緯
- 三、『短歌のすすめ』にこめられた願ひ
- 四、人麿の歌と永久生命への没入
- 五、防人の歌、幕末志士の歌、
そして大東亜戦争戦没学徒の遺歌をつらぬくもの
- 六、明治天皇と昭和天皇の御歌
- 七、『しきしまの道』に生きる

一、昨年の学生諸君の作品から

(文中へ)で括った部分は『短歌のすすめ』からの引用を示します)

私の講義に入ります前に、この講義室の入り口に掲げられてゐた二首の短歌のあったことを思ひ起こしていただきたいと思ひます。その内の一首は

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

これは明治天皇の「天」と題された明治三十七年の御製であります。今朝の朝の集ひにのぞみました空の様子がさながらにしのばれるお歌に思はれます。

次に、私の講義が終了しましたあと皆さんは阿蘇火口登山に出発になり、そこで短歌をおつくりになるわけですが、昨年のレクリエーションではどんな歌が詠まれたかを、昨年の合宿記録である『日本への回帰』の中から、身近な作品の例として学生諸君の作品を最初に見ておきたいと思ひます。

大山の御社みやしろにのほりてふりむけば厚木の町は遠くかすみぬ

(福岡教大大学院 平田無為)

「疲れた」と言ひつつも友らは階段を二人みたりならびて駆け登りゆく

(九州工大四 谷口耕平)

蟬の音や川のせせらぎに包まるる山路をたどる一歩一歩と

(学習院大三 藤尾允泰)

かくまでも登るにけはしき岩の道をつくりし人の苦しさいかに

(東北大一 齋藤瑠奈)

かうした作品を心にとどめていただいて、皆さんが歌をおつくりになる参考にしていただけたらと思ひます。

二、『短歌のすすめ』刊行の経緯

私はこの導入講義を命じられましてから、『短歌のすすめ』(以下、本書と表記)やその姉妹編である『短歌のあゆみ』を読み、また『日本への回帰』などで過去の導入講義をたどってゆきますと、昭和四十年代の前後の短歌に関する講義が収録されて、これらの書物にまとめられてゐることに気づきました。

また現在のやうに導入講義があり、そのあとで参加者全員による短歌の創作が行はれ、その作品に対して全体批評が行はれ、また班別による相互批評が行はれるやうになったのは、昭和三十七年の第七回の合宿教室からであることも分つてまゐりました。

その第七回の合宿で講義を担当されたのが、本書の著者のお一人であります夜久正雄先生



(平成二十年)ご逝去・数へ九十四歳)でありました。その時、夜久先生は「短歌の哲学と技術」と題して、短歌創作の意味と作り方についてお話をされたのです。その内容は三十五頁から始まる〈短歌の原則〉六項目であり、五十九頁から始まる〈歌をつくる目的〉三項目を網羅されたものでありました。以後、夜久先生と山田輝彦先生(平成二十一年)ご逝去・数へ八十九歳)の絶妙のコンビにより、同趣旨の講義がより深く、より広いテーマについて展開されてゆくのです。さうした中で、私は一つのこと注目させられました。それは百七十二頁から始まる〈学生諸君の作品から〉が昭和三十八年から始まってゐることでした。つまり夜久正雄先生の最初の導入講義の行はれた翌年に、当時の学生諸君は既にかうした歌を詠むやうになってゐたといふことです。冒頭の長崎大学

の澤部壽孫としつぎさんの九首の連作「大村合宿にて」の中から後半の五首をご紹介しておきませう。

過ぎし日の苦しきことも今はただ集ひしことのうれしさに消ゆ

天地あめつちの生れし様を思はする空あり海あり山もありけり

琴の海をへだてて見ゆる山路みちを幼き時に通ひしものか

なだらかなかの山路を越えゆかばわが故郷ふるさとはありと思ふに

のどやかな光をうけて父母は今日も畑に働きいまさむ

三、『短歌のすすめ』にこめられた願ひ

それでは本書がどんな書物であるのかを、当時の本会の理事長でありました小田村寅二郎先生が書かれた「序文」で見てゆきたいと思ひます。

小田村先生はまづ冒頭に万葉集のことに触れられて、万葉集が上は天皇から下は農民にいたる人々の作品が、貧富の差も地位の差も全く度外視して載せられてゐることから、〈平等の精神を、現実に実行していたのが「万葉集」であり、日本の短歌の世界であった〉と指摘されるのです。このことは〈歌をつくる目的〉の〈②短歌と国民同胞感〉のなかで、平等と秩

序について著者の詳しく解説されるところでもありません。

また小田村先生は、本書が発行された昭和四十年代前後の、大学紛争が熾烈であった当時の時代背景を憂慮されてのことでもありませんが、天皇のことを語るには、まづ歴代の天皇方がお詠みになられたお歌（御製）を読んで、歴代の天皇方のお心を知った上で天皇について語り始めてほしいと指摘されるのです。このことは本書の最終章が〈天皇と天皇の御歌〉で締めくくられてゐることを見ても、日本人が短歌を学ぶことと、天皇のご存在について考へることが、不離一体の関係にあるとの著者の思ひによるものであります。

次に小田村先生は、本書の〈第一部—短歌のつくり方〉と〈第二部—短歌のいのち〉が、それぞれどのやうな意図によってまとめられてゐるかについて、著者から寄せられた一文によつて紹介してゆかれるのです。

第一部については、〈専門歌人と特殊な愛好者に独占されている〉短歌を、〈全くの素人や初心者我身边にまでひきもどす〉ことにあるとされるのです。このことは著者のみならず、戦後、この国民文化研究会の活動を立ち上げられた方々の、その活動の根底に、何としても短歌の創作を位置づけたいと願はれた全体意志にも思はれてまゐります。

次に第二部については、現在、短歌誌や新聞の歌壇に載せられてゐる短歌が、〈主として個

人の「生」の断片的な表現に終始している」ことについての批判であり、〈短歌というものの本来の性格、すなわち、人の心と心の相互の交流という側面〉を取り戻さなければならないといふ極めて重要な提言であります。

かうしたことを念頭において本書をお読みいただくのがよいのではないかと思ひます。

四、人麿の歌と永久生命への没入

それでは本文の〈二、歌のつくり方 (1)短歌の原則〉を見てゆきますと、三十八頁の〈②短歌の形式上の原則——一首一文ということ〉の最初に、一首一文の例として万葉集の柿本人麿かきのもとのひとの歌が引かれてをります。

ひむがし
東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

そして著者は「私は、短歌の原則として、五七五七七、三十一音数律はもちろんです。が、「一首一文」をあげなければならぬと思ひます。このことは当然なことなので、世間ではあまり強く言われていないようですが、大切なことだと思ひます」と指摘されて、〈短歌の原則〉の中でも最も紙数を費やして解説されてゐるところです。

「一首一文」といふことは皆さんが歌を学んでゆかれる中で、自然に納得されることだと思ひますが、一首の歌が、途中で気持が途切れたり、息が途切れたりすることなく、一息に詠み切られてゐるといふことにもなりませう。よい歌の例は、ほとんどこの原則に当てはまると思ひます。

ここでは少し視点を変へて、先に掲げた人麿の歌を含む、長歌・短歌の全体を見てみたいと思ひます。それは次の一群です。

軽皇子、安騎の野に宿ります時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

八隅やすみ知し 吾がわ大君 高照らす 日の皇子 神ながら 神さびせすと 太敷ふとしかす 京を置みやこを
きて 隱口こもりくの 泊瀬はつせの山は 真木立まきつ 荒山道あらかみちを 石が根いしがね 禁樹さへき押し靡なべ 坂鳥さかどりの 朝越あすこ
えまして 玉かぎる 夕さゆふり来れば み雪ゆきふる 阿騎あきの大野に 旗はたすすき しのを押し靡な
べ 草枕くさまくら 旅りやどりせず 古念いにしへおもひて (四五)

短歌

阿騎の野に宿る旅人打ち靡なびき寐いもぬらめやも古念いにしへおもふに (四六)

真草苺る荒野にはあれどもみち葉の過ぎにし君が形見とぞ来し（四七）

ひむがしの野に炎の立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ（四八）

日雙しの皇子の命の馬竝めて御獵立たしし時は来向かふ（四九）

（廣瀬誠著『萬葉集 その漲るいのち』七九頁）

天武天皇のお子様である日並皇子が若くしてお亡くなりになったのですが、その日並皇子がかつて狩をなされたこの安騎の野で、日並皇子のお子様である軽皇子が、父上と同じやうに、今狩を始めようとなさつてゐる。亡き日並皇子をしのび、若き軽皇子の将来に思ひをはせて、眠られぬ思ひで朝を迎へた人麿の目に映つた明け方の光景が、「東の野にかぎろひの立つ見えて」の一首であり、悠久の歴史を見つめる人麿の一連の歌の中にあるわけです。

『萬葉集その漲るいのち』の著者・廣瀬誠先生は、『古と来む世とを今にとりすべて』人麻呂は呆然この大観に立ち尽くした。長歌全体の重みをつしりこの短歌で受け止めた。「菜の花や月は東に日は西に」（蕪村）の自然美の世界とは全く異質の歌なのだ」と指摘してをられます。

このやうに見てゆきますと、安騎野で詠まれた人麿の一連の歌などは、本書の〈歌をつく

る目的)の③に上げられてゐる(永久生命への没入)といふことに当るやううに思はれます。
〔人麿〕「人麻呂」、「東の野にかぎろひの…」〔ひむがしの野に炎の…〕などの表記の違ひは引用原典の
ままとしました)

五、防人の歌、幕末志士の歌、

そして大東亜戦争戦没学徒の遺歌をつらぬくもの

本書を読んで行かれると、著者はかなりのウエイトをおいて正岡子規について論じてゐる
ことにお気づきになると思ひます。その子規の目は万葉集に向けられ、源実朝に向けられて
ゐるのですが、ここでは百二十七頁の万葉集について論じた子規の「曙覧の歌」の一節を紹
介しておきませう。橘曙覧は幕末の歌人です。

〈万葉が遙かに他集に抽んでたるは論を待たず。其抽んでたる所以は、他の歌が毫も作者
の感情を現し得ざるに反し、万葉の歌は善く之を現したるに在り。他集が感情を現し得ざ
るは有の儘に写さざるがためにして、万葉が之を現し得たるは、之を有の儘に写したるが

ためなり。曙覧の歌に曰く「いつはりのたくみをいふな誠だにさぐれば歌はやすからむもの」「いつはりのたくみ」古今集以下皆是なり。「誠」の一字は曙覧の本領にしてやがて万葉の本領なり。万葉の本領にして、やがて和歌の本領なり。我謂ふ所の「有の儘に写す」とは即ち「誠」に外ならず。

著者はこの子規の言葉に対して〈子規においては「写生」という芸術上の方法と「誠」という倫理上の姿勢とがびつたり一つになっていたのです〉と解説をしてをられます。

それでははじめに、万葉集の防人の歌を見てゆきたいと思ひます。百九十六頁以降に次のやうな歌が取り上げられてをります。

父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる

道の辺の荆の末に這ほ豆のからまる君を離れか行かむ

蘆垣の隅処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ

詳しい解説は本書をご覧いただきたいと思ひますが、防人の歌には、一首目の「ことばぞ」が「けとばぜ」と表記されてゐるやうに東国訛が多く含まれてゐます。二首目は、道端のいばらの先からみついてくる豆の蔓のやうに、縋りついて離れないとしいお前と別れて防

人に行かねばならないことであるよと、恋人をいとほしむ歌でありませうし、三首目は、やはり若い防人の、自分との別れを泣き悲しんでゐた妻を切なく思ひ起こしてゐる歌でありませう。

このやうに父母を、恋人を、妻をと、いづれも私の悲しみ—悲喜こもごもの思ひ—をつつみ隠すことなく、それこそ子規の言ふやうに（有の儘に）表現してゐます。

さうした私の悲しみを振り切つたところに、同じく防人の歌ですが、

今日よりは顧みなくて大君の醜しじこの御楯みたてと出で立つわれは

といふ歌があります。ここで「醜」といふのは「勇猛な」といふ意味であると説明され、「私に背そむきて公おほやけに向ふ」と示された聖徳太子の御精神のやうに、「公」と「私」を二つながら目をそむけることなく見つめてゆくことが、防人の歌を味はふ上で大切なことと著者は指摘されるのです。

かうした防人の歌に対する著者の視点は、〈幕末志士の歌〉についても、〈大東亜戦争戦没学徒の遺歌〉についても、変るところはないのです。

幕末志士の歌では、二百三十頁から始まる平野国臣くにのみの歌を見てまゐりますと、

吾が胸の燃ゆるおもひにくらぶれば煙はうすし桜島山

といふやうに国事に奔走する中で歌はれた歌もあれば、

吾がこころ岩木と人や思ふらん世のため捨てしあたら妻子を

といふやうに、国事のためには妻子をも見捨てざるを得なかつた嘆きの歌もあります。また、幽囚の身となつて次のやうな歌も詠んでゐます。

夜は長し風は身にしむ囚屋寝のしとの数さへまさるわびしさ

ここで「しと」といふのは小便のことなのですが、一首全体にみなぎる国臣の心の姿勢があつて、決して汚いものを詠んでゐるといふ感じがいたしません。これも歌の題材について考へる上で大切なことでありませう。

次に二百四十二頁から始まる〈大東亜戦争戦没学徒の遺歌〉を見てみませう。二百六十二頁に江頭俊一さんの次の歌があります。

しらぬひの筑紫の野辺にますらをが立てし誓の消ゆる日あらめや

この方は志半ばにして、昭和十八年に二十四歳で病気で亡くなられた方で、国文研の前身・日本学生協会に連なる方でありました。戦後、この国文研を立ち上げられた方々の心には、こ

の江頭さんの歌に込められた志を忘れてはならないといふ気持ちが強くなり働いてゐたやうであります。このやうに歌といふものは、人の生死を越えてその志を伝えてゆくもの（留魂）のやうであります。

この江頭さんの親友に、昭和二十年八月二十日に福岡の油山の中腹で自刃をされた寺尾博之さんがられます。二百六十六頁にこの寺尾さんが昭和十八年、二十三歳のときに詠まれた次の歌があります。

斃れたる友を嘆かずいつの日か吾もたどりゆく道と思へば

「斃れたる友」とは、江頭さんのことであり、また先立って戦死をされた多くの友のことでもあります。さうした意味でこれは（慰霊）の歌であり、同時に「いつの日か吾もたどりゆく」といふ、寺尾さんの強い意志を示す（留魂）の歌でもあると思ひます。

このやうに身につまされることの多い戦没学徒の遺歌であります。中には、二百五十頁に出てゐる「故郷雑詠」と題された松吉正資さん（昭和二十年五月戦死・二十三歳）の四首の連作もあります。

みんなみに向きてひらける入海の波たひらかに風あたたかし
いりうみの岸べにならぶ家並のうしろにつづき山そびえたり

秋晴れのみ空にかぶ白雲のかけをおとせりその山はだに

海かこむ山のふもとの蜜柑畑みかん熟れたり遠目とほめにしるく

これは出征直前の昭和十八年に詠まれたものでありますが、出征直前といふ切迫したものを感ぜさせません。そのことが却って作者の心の奥底にあるものを伝えて来るやうに思はれます。

このやうに見てまゐりますと、防人の歌にも、幕末志士の歌にも、そして戦没学徒の歌にも、ありのままに「私」の悲しみを歌ひあげながら、同時に敢然として「公」に向ふ、国のためには命を惜しまない生き方が見えてくるやうに思ひます。

六、明治天皇と昭和天皇の御歌

本書の最終章が、〈天皇と天皇の御歌みうた〉でしめくくられてゐることについては先に触れましたが、あまり時間がありませんので、明治天皇と昭和天皇の御歌各一首を見ておきたいと思ひます。はじめに二百八十一頁に「をりにふれて」と題された明治天皇の御歌（明治三十九年）

が出てをります。

国のためうせにし人を思ふなくなれゆく秋の空をながめて

明治三十九年といへば日露戦争の終った翌年であります。明治天皇は暮れてゆく秋の空を眺めながら、しみじみと戦死をした人々に心を通してをられるのです。著者は短歌といふものは〈平等の世界を作り上げてゆくもの〉であると繰り返し述べてをられますが、平等の世界とは、この明治天皇の御歌に見るやうに、心と心とが互ひに通ひあふことをいふのであります。

次に三百五頁に出てをります昭和天皇の「鳥」と題された御歌（昭和四十年）を見てまゐりませう。

国のつとめはたさむとゆく道のした堀にここだも鴨は群れたり

「ここだ」といふのはこんなによく多くといふ意味です。そしてこの御歌のあとに著者の二行の解説があります。

〈四十年歌会始の御歌です。「国のつとめはたさむ」という簡潔なご表現から、われわれはどれだけのものをくみとり得るだろうか、思えばまことに恥かしいことです〉、著者の思ひに重

ねて、私どももさうした思ひを働かせたいものです。

七、「しきしまの道」に生きる

日本人は歌を詠むことを「しきしまの道」と言ってきました。それは短歌を単なる文学や芸術と見る以上の思ひがあったからでせう。と同時に、「しきしまの道」は常に、ごく身近な生活の中にあるのです。最近、著者と同年輩の方々からいただいたお歌をご紹介しておきませう。お一人は下関市にお住ひの宝辺正久といふ方、もうお一人は青森市にお住ひの長内俊平といふ方です。寶邊さんからいただいた七月二十一日付のお便りにこんなお歌がありました。

紅き塗りの文箱ふみもとめつわがこ児ろがおやたちの文入ふみるればよけむ

これは寶邊さんが、親友である長内さんの孫娘の方が結婚されたことを知って、「さうか、祐子ちゃんがお嫁に行ったのか。そんなら僕も何か良いものを贈らう」といって、朱塗りの文箱を求められたといふことです。親友のお孫さんに、まるで我が子のやうに、「わが児ろが」と呼びかけてをられるお氣持がよく伝はってきますね。

そしてこの長内さんからは、この合宿に、「合宿御参加の皆様へ」といふことでお手紙が届いてをりますが、その中に次のお歌がありました。

二夜ふたよのみの睦むつみなりしが朝夕を共にすぐせし友を忘れず

これは、長内、寶邊のお二人にとって親友であった青砥宏一といふ方がをられたのですが、胃癌のため昭和六十一年にお亡くなりになってゐます。その青砥さんが術後間もない体を押し、最後に参加されたのが昭和六十年の第三十回阿蘇合宿であった。その青砥さんと最後に、二夜を共にした阿蘇合宿のことが忘れられないと長内さんは詠んでをられるのです。

そして長内さんは、青砥さんの遺稿集『青砥通信鈔』から次の一文を引いてをられます。この中には先ほどご紹介した、油山で自刃をされた寺尾博之さんのことも出てまゐります。

《今を去る三十年前の学生時代、今は亡き寺尾博之大兄が旧制高知高校生のころ、「生命いのちは交流なり」と言ひ、しげく便りを呉れたことが思ひ出されます》（昭和四十七年十月十八日）

ここに「生命いのちは交流なり」とありますが、私も最近やうやくさうしたことの大切さが分りかけてまゐりました。どうか皆さんもこの合宿で体験された短歌を、折にふれておつくりになり、親しい友人とのお便りなどに書き添へていただきたいと思います。さうした中で、皆

さんはきつとすばらしい歌をお詠みになられることとせう。

まことにまとまらない話となりましたが、これで私の講義を終らせていただきます。
ご清聴ありがとうございました。

短歌入門

創作短歌全体批評

東洋紡績(株)

庭本秀一郎



はじめに
批評と添削
をはりに

はじめに

班別の短歌相互批評の時間に先立って創作短歌全体批評の講義をさせていただきます。短歌相互批評は、読んで字の如く短歌を相互に批評し合ひ、よりよい歌を作り上げていくためにするのですが、その心構へは輪読と同じです。つまり、詠者がどんな気持ちで詠んだのかよく聴き、その気持ちがいよいよ良く伝はる表現になるやうに、班の皆で一緒になって考へることが大切です。

よい歌とはどんな歌でせうか。それをお話するに先立ち、明治天皇御製を紹介します。

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

まごころとは「誠の心、いつはりのない真実の心」といふことですが、私達はこの言葉をどのやうに使ってゐるでせうか。「真心のこもったご挨拶」とは言ひますが、「真心のこもった嫌味」といふ使ひ方はしないでせう。このことから私達は、人の真心は素晴らしいものだ

といふ前提で真心といふ言葉を使つてゐるやうに思ひます。

私達の心の中心にあるのは「真心」であります、その周りには自分をよく見せたいといふ「個我」がまとはり付いてゐます。この飾らうとする心が私達の真心を覆ひ隠してしまふのです。作歌の時に出てきがちな「格好良く詠みたい」といふ気持ちは、他者の評価を気に懸けて自分の本当の心の動きを見ようとしないところから萌してくると思ひます。このやうな「個我」を慎重に取り除き真心を発露させることでよい歌ができるのです。

批評と添削

短歌を詠む際には①素直に、②具体的に、③感動（心の動き）を、④正確に詠むといふことが基本姿勢として大切です、これらを踏まへて批評と添削をしていきます。まづは男子学生班からです。

○

無知のため、知らない事が多すぎるのだが、知りえた事が多くある

とても素直に詠まれた歌だと思ひます。ただ、和歌を詠む際は出来るだけ文語表現や大和



言葉にした方が味はひのある歌になります。この歌のポイントは合宿に来て、知りえた事が多くあるといふところにあるはずですから、この合宿で何を知り、どう感じたかといふことをより具体的に歌に詠みこむとよいと思ひます。とりあへず、

今までは知らざりし事をあまた知り合宿に来て
良かりきと思ふ

としてみました。「合宿に来て良かりき」といふのは私の想像ですから、実際の詠者の気持ちとは違ふかもしれません。短歌相互批評の時、班でよく検討してみてください。

○
火の国に有志集まり話聞く先生の意志友と受け
たし

この歌は上の句と下の句の間に切れ目があり、一

首二文となつてゐます。どの先生のご講義かが分りませんが、例へば左記のやうに詞書ことばがきを使つて直してはどうかと思ひます。「志」とか「思ひ」の中身が、もう少し具体的であると良いと思ひます。

□□先生のご講義をお聴きして

志持つ友どちと先生の思ひを共に受け継ぎゆかむ

参考までに、助言者として同じ班で一緒にしてゐた国文研会員、松岡篤志さんの歌をご紹介しておきます。中西輝政先生のご講義の内容を正確に再現され、感じたことを具体的に詠んでをられますね。

中西輝政先生の御講義を拜聴して

松岡篤志

対馬から佐世保九州沖繩を侵さむとする仇を許さじ

三万の工作員のはびこりてむしばまれゆく刻一刻と

み国いま安政五年の如くなりとただならぬ危機を師は語ります

心と知略共にそなふる新しき日本人出でよとあつく語らる

○

阿蘇山で班全員でご飯食べ味も景色もいと美しき

素直で大変いい歌です。ただご飯の味が「美しき」といふのは不正確です。

阿蘇山のいと美しき景色ながめ友みなと食むご飯のうまし

この歌を直すのには随分苦勞しました。が、私の力不足でうまく直せてゐない感じが残ります。元の歌は、声に出してみると調べが感じられます。作者が班の皆とすばらしい景色を見ながらご飯を食べた、その弾むような喜びが伝はってくるでせう。班でよく話し合つて正確な言葉遣ひになるやうに直してあげてください。

中西輝政先生の御講義をお聴きして

常ならば会えぬお方に質問し我が心臓は張り裂けんとす

この歌を詠まれた方は今年初めて合宿教室に参加し、質問に立たれたさうです。勇気の要つたことだと思ひます。一首一文になつてをり、真剣な気持ち伝はってきます。ただ、心臓が張り裂けるといふのはややオーバーな表現です。

中西輝政先生の御講義をお聴きして質問す

常ならば会へぬお方の前に立ち心昂ぶり言葉出で来ず

このやうに言葉が練れてゐなくても強く切実な感動を詠んだものほど良い歌に直るのです。

心地良い風に乗せられ阿蘇登山活火山の神秘に触れる

上の句の後の切れ目で一首二文になってゐます。また神秘といふ言葉が抽象的で少し分かりづらい。それから風の心地よさと活火山の神秘、この二つに感動の焦点が分れてゐるので、はやけた歌になつてしまつてゐます。風の心地よさに焦点を絞り詞書をつけて、

阿蘇にて

心地良き風に吹かれて中岳に登りゆくなり心も軽く

としてみました。下の句については「神秘」の内容をもう少し具体的に考へていただくと、もう一首歌が出来るでせう。助言者として同じ班で一緒だった国文研会員、北浜道さんが次のやうに阿蘇登山のことを具体的に詠んでられますので、参考にしてみてください。

中岳火口散策の帰路、班員が競うて軽石を拾ふのを見て

北浜 道

火口への道の歩みを共にせしかたみの品と石を求めぬ

細かなるあまたの穴の吹き出せる小ぶりの黒き軽石ぞこれ

いくにちか共に過せし友どちと得しつながりの記念にぞせむ

さてここで、昨年の合宿教室に初めて参加された学生さんの感想文をご紹介します。

私が一番印象に残ったのは、短歌の班別相互批評でした。他の芸術作品と異なり、他の人が思いついてくれた言葉を活用して自分の歌をよりよいものに行うことができる、このことが異様な感じがして不思議に思いました。しかし、さうした中で、なんともいへない心と言の葉の流れが生まれました。その流れから、これまで味はったことのない、一種の力を感じました。

歌づくりことばをかはしてゆくうちに知らず知らずには心は通ふ

(平成二十一年八月 厚木合宿教室 東北大一年 齊藤瑠奈さん)

齊藤さんと班の皆さんは、短歌相互批評を通じてお互いの心と心を通はせあつたのでせう。続いて女子学生班です。

○
阿蘇火口を見て

だんだんと白き煙の晴れてゆきエメラルドグリーンの水面の見える

まるで動画を見るやうな、情景が具体的に詠まれたきれいな一首一文の歌です。一部口語の表現を改めました。煙は「晴れる」といふより「消えゆく」が良いと思ひます。

吹く風に白き煙の消えゆきてエメラルドグリーン○の水面現る

大阿蘇のマグマ流れし後にさえ生えゆく草に命を感じず

繊細な感性の感じられる歌です。感動の焦点は草の命といふところにあると思ひます。「大阿蘇」と阿蘇を強調すると、「草の命」がぼやけてしまふと思ひ、このやうにしました。

阿蘇にて

溶岩の流れし後にも生えて来し草の命の力を感じず

○
今度は社会人班です。

頂で青き天井仰ぎ見れば塞ぐ心も晴れ渡りけり

青い空を見てゐると気持ちも晴れやかになる。「塞ぐ心も晴れ渡りけり」といふところに、とても共感できます。「青き天井」は、辞書に「青天井：青空を天井に見たてて言ふ言葉」とあり、間違ひではないですが、「気持ちも晴れ渡る」といふ感動と「部屋の上を塞いでゐる天井」といふ言葉が不似合ひかと思ひます。普通に「み空」と詠めばよいでせう。

頂で青きみ空を仰ぎ見れば塞ぐ心も晴れ渡りけり

○ 露草をふみてのほりし阿蘇の原朝日にこころあらたなりける

この歌の感動の中心は「こころあらたなりける」といふところにあらうかと思はれます。上の句で切れ目があり一首二文になってゐるためこのやうにしてみました。なほ露草といふ言葉は植物の名前です。正確には露に濡れた草といふことになるのでせうから、

○ 朝露に濡れし草原に朝日浴び心新たになりけるかも
と直しました。詠者のさはやかな気持ちか伝はつてきます。

○ 火口からわきでる熱気目の前に熱く燃える決意あらたに

「熱く燃える決意」といふ言葉から激しい思ひをもたれてゐるのだらうといふことが伝はつてきます。「熱気」は「煙」が正確ではないでせうか？ 少し言葉を整へましたが、決意の内容をもう少し具体的に詠まれると良いと思ひます。

○ 火口よりわき出づる煙前にして新たな決意に我が胸も燃ゆ

○ またいつか妻子と来たい草千里喜び駆ける娘が見える

私も娘がゐますので共感します。妻子といふ言葉が概括的（具体的でない）ですので娘さんのことに焦点を絞った歌にし、奥様の歌をもう一首つくられては如何でせう。

またいつか娘と来たし草千里に喜び駆くるが目に浮かびきて

○

見渡せば広がる阿蘇の山々に生まれし北の景色重ねし

意味がとりづらいのですが、よい歌になりさうな感じのする歌です。「生まれし北の景色」とは「我が生まれし北の景色」なのだらうと推測し、

広ごれる阿蘇の山々見渡せば故郷の山も思ひ出されぬ

と一応直してみました。「重ねし」といふ言葉に何か深い意味をこめられてゐるやうな感じもいたします。何を詠みたかったのか、班の皆さんとよく話し合ってみてください。

○

目を閉じて朝の阿蘇野に耳澄ませば鳥虫の声に心洗わる

朝の集ひの時、皆で目を閉じて聞こえてくる音に耳を済ませましたね。同じやうに心が洗はれる思ひをされた方も多かつたこととせう。詞書を使ってこのやうに整へました。

朝の阿蘇野にて

目を閉ぢて耳を澄まさば鳥の声虫の声して心洗はる

○

国文研班から一首、大津健志さんの歌をご紹介します。

中西輝政先生の講義を聞きし折りに

大津健志

我が国に起りしことを今すぐに生徒に伝へ共に学ばむ

中学校で教鞭を執られてゐる大津さんは中西先生の御講義を受けて感じられた強い決意を素直に、具体的に、正確に詠まれてゐます。「今すぐに」といふ言葉が大津さんの強い決意を伝へてゐます。

最後に合宿教室に寄せられたお歌をご紹介します。いづれの方も過去にこの合宿教室に参加され、歌を詠み友との絆を育んでこられた大先輩であり、私達国文研の会員が「先生」と敬愛してやまない方々です。まづ青森の長内俊平先生です。

合宿御参加の皆様へ

長内俊平

青砥宏一大兄との最後の合宿※となりたりし阿蘇へと急ぐらむみ友らをおもふ

(※昭和六十年第三十回合宿)

胃癌の手術終りて間なき身をおして馳せ呉れ給ひしわが友を憶ふ

二夜のみの睦みなりしが朝夕を共にすぐせし友を忘れず

今生の別れと友は予感せしや帰りて幾月もなく逝き給ひけり

(昭和六十一年一月二十八日逝去)

わがこころ遠く阿蘇へと飛びゆきて友らと共に語らふもころ

今まさに長内先生が飛んでこられさうな感じが致します。青砥宏一大兄とは学生時代から四十数年間の付き合いを持たれた長内先生の友人の方です。松江にお住まいでした。昭和六十年八月、ここ阿蘇で開かれた合宿にご退院直後の体調を押しして参加され、それが最後の合宿となったのです。

続いて下関の宝辺正久先生です。

阿蘇の地を遙かに思ふ

寶邊正久

阿蘇谷の朝風衝きて行く汽車に在りて奮ひしわれらなりけり

共に在りし阿蘇合宿の師も友もいまに笑みつつ在りませるかも

阿蘇岳を振り仰ぎつつ歌詠みし合宿を思ふ今も然るらむ

寶邊先生がどのやうな思ひでこの合宿教室に参加されてゐたか、「朝風衝きて行く汽車」といふ言葉と共に迫ってまゐります。

最後に東京の小田村四郎先生です。

小田村四郎

山なみを見はるかしつつ大阿蘇に学び語らふ友ら偲ばゆ

くだちゆく御世憂へつつもろともにはばし学びの道に励まむ

阿蘇の地に共に語りし友どちの数も少くなりけるかな

新しき友ら集ひてもろともに絆むすぶをはるかに祈る

私達がこの合宿教室で互ひに心を通はし合ひ、心の絆を結ぶことを願ってをられる方々が各地にいらっしやいます。これからの短歌相互批評の時間は班員の皆さんが心を通はせ合つて絆を結んでいく場です。どうか心を開いて素直に相互批評に取り組んでください。

をはりに

もろともにたすけかはしてむつび合ふ友ぞ世に立つ力なるべき

これは講義室の入り口にも掲げてあるお歌ですから、お気づきのかたもゐると思ひますが、

明治天皇のお歌です。日頃から私が仰いでゐる御製です。これから取り組む短歌の相互批評に通じるものがあるやうにも感じてゐます。歌を詠んだ作者の気持ちや推し量りながら、果して表現が正確であるかどうか、適切な言葉遣ひになつてゐるかどうかなど、気づいたことを互ひに出し合つて、作者の気持ちに即した歌になるやうに努めるのが相互批評です。そこでは心の通ひ会ふ世界といふものを自づから体験することになるはずで

す。「友ぞ世に立つ力なるべき」とは、かういふことを指してゐるのだなど、気づくことでせう。さうした体験の一つ一つが生きて行く力になるやうに思ひます。気づいたことを率直に語り合つて、冒頭でふれた「真心」を交感する場として下さい。

ご清聴ありがとうございました。

一年の歩み

——第五十五回合宿教室までの一年——

第五十五回合宿教室運営委員長

福岡中央公共職業安定所

古川 広治



運営委員会の発足

神奈川県厚木市の市立「七沢自然ふれあいセンター」で開催された第五十四回全国学生青年合宿教室は平成二十一年八月二十三日に閉幕。その前夜の合宿三日目深夜に開れた国文研の臨時拡大理事会で次回（平成二十二年）の第五十五回合宿教室の開催地を熊本県阿蘇市とすることが決まった。翌日、第五十五回阿蘇合宿の運営委員長を引受けるやうにとの要請があり、謹んでお引受けした。

合宿教室は運営委員といふ十人前後のスタッフを中心に企画運営・勧誘活動がなされていく。合宿教室はその運営委員を選任するところから第一歩が始まる。

厚木合宿閉幕直後の八月三十日衆議院総選挙があり、その結果、自民党が大敗して民主党政権が発足し、政権交代が現実のものとなった。何かが大きく変らうとしてゐる。そんな中、運営委員への就任を一人一人頼んで行く。できるだけ、若い人にとの助言があったが、私もその意向であった。九月末にやうやく、運営委員会の陣容が整った。二十歳代、三十歳代が中心の例年にない若い年齢構成となった。運営委員を初めて経験する者が大半である。また、

日常の勤務の上でも責任を担ふ立場となつて物理的に働く時間が最も多い年代である。その中で協力を惜しまず引受けてくれた皆の気持ちがありがたかった。小田村寅二郎先生の御著『昭和史に刻む我らが道統』によれば、国文研発足時のメンバーは三十歳前後の諸先輩たちであり「自分らで出来ることは何か」「自分たちでなければ出来ないこと、それは何か」を見定めて立ち上がられたと記されてゐる。先生方を思ひ起しながらの出発であつた。以下、運営委員の氏名を記す。(合宿運営委員長) 古川広治、(関東) 伊藤俊介・小柳雄平、(関西) 絹田洋一・北村公一、(中国) 寶邊矢太郎・秋田崇文、(九州) 酒村聡一郎・横畑雄基・桑木康宏・小林国平・武田有朋・久保田真。

早速、第一回運営委員会を十月三十一日、十一月一日の両日、合宿開催地である「国立阿蘇青少年交流の家」で開催した。合宿の主眼点をどこに置き、日程をどう組むのか、そして参加者勧誘をどう進めて行くのかを討議した。

阿蘇合宿では何を主眼に学ぶか

合宿の主眼をどこに置くのか。民主党政権の発足に伴つて、国家解体政策とも言ふべき

政策が実行され、ますます混迷してゆくことが予想される。一方、厳しい経済状況の下、学生はどうしたら就職できるかを考へ、そのためのスキルを早くから身につけること等に忙しく、大事なことを忘れてゐるやうに見える。自分の人生と国の将来を結び付けて考へるといふ視点を持つことが大切である。そして、国の将来を思ふ時、先人たちは自分の人生と国の運命をどう結び付けて生きてきたのか。先人の生き方を偲び、遺された言葉を味はふことによつて、自分なりの考へを深める機会としたい。小田村寅二郎先生を初め諸先生・諸先輩方が言はれてきた「学問・人生・祖国」の一体的な把握を目指す切っ掛けとなる合宿にしようといふことになった。

そして、具体的な日程を組むにあたっては三つの柱すなはち、

- ① 世界における日本のあり方を考へる
- ② 我が国の歴史と文化をより深く理解する
- ③ 古典や短歌を通じて豊かな感性を育む

を念頭に置いて検討。講義、班別研修、輪読、短歌創作、慰霊祭斎行と続く基本的な流れは変へないこととした。主視点と合宿の形は伝統に沿ったものとするのが決まった。

しかし、日頃勉強して参加する学生が極端に少ない現状（東京の正大寮〔学生寮〕は休止—現

在は再開し、学内の勉強会は防衛大学校、福岡大学、九州工業大学、熊本大学の四校を考へると果して例年踏襲のスケジュールで良いのか、講義の内容は今の学生に合ったものとなつてゐるのか、何故継続参加者が少ないのか、主催者側の自己満足に終つてゐるやうなところははないか等実に自由な議論が交はされた。また、初めて運営委員を経験する若いメンバーである。今まで当り前に行はれてゐたことを再確認、再定義したりしながら、以前は行はれてゐて何故今行はれなくなつたのか等々の率直な意見が出される。一方、運営委員会で議論されたことは国文研の理事会にて承認されないと実現できない。いい加減な考へや提言では、先輩方(理事会)は認めてくれないのである。幾度も先輩方と議論を交し、私たちの本気度は幾度も試された。以下は、参加者に合宿教室の良き伝統を感じてもらふために実現できたささやかな取組みである。

①事前合宿の輪読を充実させる②合宿導入講義の前に自己紹介の時間を設ける③朝の集ひのあり方を考へる④班長会議を行ふ⑤夜の集ひを復活する⑥御製の幟を復活する⑦最終日の講義の後に班別研修の時間を設ける等々。

自分達の合宿を作り上げるべく運営委員会はその後も議論を続けた。翌年平成二十二年二月二十日、二十一日に第二回目を福岡で、六月五日、六日に第三回目を阿蘇の合宿地で運営

委員会を行った。その他、勉強会への参加時やインターネットを活用した会議等、合宿直前まで計十五回の打合せを行った。

各地区勉強会と勧誘活動

阿蘇合宿に向けて、同時に私たちの活動の原点としての勉強会が各地で展開された(以下に記す各地の勉強会に関して、若干の説明を()で付記した。冒頭にその指導又は世話役の名前を掲げた)。

北海道地区

大町憲朗会員の呼び掛けで北海道での新しい動きが始まった。同志が少ない現状の中、手紙、メールのやり取り、合宿参加の呼び掛け等地道な努力が継続された。中でも、大町会員が北海道大学へ合宿パンフレットを一人で配布を試みたといふ報告に強い刺激を受けた。

東北・北陸地区

岸本弘会員による当会副会長長内俊平先生(青森市在住)の論稿をまとめた『文化と文明―祖国再生の道を念じて―』の出版作業が始まり、平成二十二年三月に発行された。この本は長内先生が青森県・春秋東奥社の月刊『春秋東奥』に平成十年六月より二十二回にわたって

連載されたものをまとめた書籍として刊行したもので、編集には二十歳代の学生から六十歳代の方まで総勢二十九名がワープロ打ち等で関った。先生の祖国再生への祈りを感じる御本であつて、私共が取組む合宿教室への参加者勧誘活動、日常的な勉強会の継続も、祖国再生への道を歩むことになるのではないか。私たちが歩む前途に灯りを点していただいた思ひであつた。

関東地区

年度途中、正大寮（学生寮）が休止し、学生主体の勉強会が開かれないう事態となつたが、会員各位が主催する学生を交へた勉強会は継続して行はれた。会員相互の研鑽を深め、合宿教室への参加を呼びかけるマンツーマンの活動が展開された（なほ、一時休止してゐた正大寮は、平成二十二年八月から、再発足した）。

○定例の勉強会

短歌の会（佐野宜志会員…会員と学生による自作の短歌相互批評の会）、四土会（内海勝彦会員…黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読）、聖徳太子研究会（香川亮一先生…四天王寺本『法華義疏』の講読）、国文研塾（小柳志乃夫理事・北浜道会員…会員と学生による勉強会、月二回実施）、防衛大学校輪読会（岡村誠之著『組織を生かす』の輪読）、柴田会（柴田悌輔理事…小林秀雄著『本居

宣長』の輪読)、調つづの会(岸野克巳会員:『本居宣長』、『古事記伝』の輪読)、円覚寺伝宗庵での読書会(関口靖枝会員:『名歌でたどる日本の心』の輪読)、正大寮読書会(野村亮会員:『講孟余記』、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読)、日本の国柄と皇室に関する研究会(大岡弘理事:『明治天皇のみことのり』の輪読と研究発表、隔月)。

○春合宿

平成二十二年四月三日、四日、川崎市青少年の家において「東京地区春季合宿」が北濱道会員の呼び掛けで実施された。「学問を何のためにするのか」といふ根本的な問題をテーマに掲げ学生五人、OB六人が参加した。相澤守君(國學院大學三年)が『皇居勤勞奉仕体験記』と題して発表し、国武忠彦先生による「柿本人麻呂」についての講義があった。参加者が合宿にどう取組み、何を感じたか、春合宿参加者の短歌を次に掲げる。

感想発表にて

東京大学 理Ⅰ 二年 高木 悠

もどかしや言葉を口に出すことに感ずることと離るる氣のして

国武忠彦先生の御講義を聞きて

埼玉大学 教養 二年 山中利郎

いにしへといまのわれとをひきむすぶふみをたづぬるみちをあゆまむ
いにしへのひとのもちたるみこころのわれにもありとおもふうれしさ

学生発表にて相澤守君の皇居勤労奉仕体験を聞きて

(株) アルバック 北浜 道

自らの実感を込め皇室を語らむといふ言の葉つよし

○国民文化講座

平成二十二年五月二十二日、靖国神社「靖国会館」において、第十三期第二十二回の国民文化講座が開催された。講師は拓殖大学大学院教授の遠藤浩一先生。「生存本能としての保守―正念場に立つ日本政治―」と題する講演を二時間余に亘って行はれ、また、間近に迫った阿蘇での第五十五回合宿教室のパンフレットが来場者に配付され運営委員の伊藤俊介会員から、参加勧誘の呼び掛けもなされた。聴講者百八名(月刊『国民同胞』七月号に濱田実会員による講演の要旨が掲載されてゐる)。

関西地区

○勉強会

関西信和会(絹田洋一会員：月一回の輪読、歴史散策、会員の発表)が継続して開催された。

○講演会

七月十一日、兵庫県神戸市・生田文化会館において、本会参与・布瀬雅義氏による講演会が開かれた。演題は「人づくりこそ国家再生への道」。参加者は二十一名、一時間の講演の後

二時間にわたって、それぞれの参加者から質疑が続き盛況であった。参加者が講演をどう受け止めたのか。参加者の短歌を左に記す。

講演会を拝聴して

東洋紡績(株) 庭本秀一郎

まごころを磨くことこそ人づくりの基なりとて大人は宣りけり
家人とも会社の人とも友らとも真心をもて接しゆきたし

毎日の暮らしの中に真心を磨く機会は満ちてありけり

中国地区

寶邊矢太郎、山口秀範両理事による徳山大学への働きかけがなされ、次年度以降への足掛かりを掴んだ。また中村道陽会員、秋田崇文会員を含めた今後の活動が期待される。

熊本地区

○勉強会

久保田真会員の指導で学生の輪読会「熊大松熊会」が週一回継続して実施された。またO B輪読会は月一回開かれ、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読が続けられた。

○講演会

平成二十二年四月二十四日、熊本大学内「くすの木会館」で開催された産経新聞社の企画、

「第十回最前線報告会」いま、教育政策が危ない」に積極的に参加した。講師は産経新聞論説委員の石川水穂氏で、約八十人の参加があった。この場を借りて、合宿教室と熊本地区の勉強会の案内がなされ、その後産経新聞社の関係者も交へて懇親会を持った。そこから合宿参加者や勉強会への参加者が出てくる等、今後の我々の活動に繋がる有意義な集りであった。

鹿児島地区

○勉強会

OBによる輪読会（野間口俊行会員：広瀬誠著『萬葉集その漲るいのち』の輪読）の継続実施。

福岡地区

福岡地区の活動は「国文研福岡事務所」を中心に行はれ、「(株)寺子屋モデル」「NPO法人教育オンブズマン」と連携した活動が展開された。勉強会や運営委員会の場所の提供、合宿教室の案内、広報について、また勧誘等に関しても、協力しながら活動を進めて行った。

○勉強会

梅鶯塾輪読会（小野吉宣参与、九州工業大学三年権藤尚樹君：『講孟劄記』の輪読）、九州工業大学輪読会（九工大三年大森淳史君）、福岡大学読書会（合宿教室参加者による勉強会）、福岡国民文化懇話会（武田有朋会員：福岡地区の中心的勉強会）、八雲会（鏡信弘会員：短歌の創作と相互批評）、水天

宮輪読会（志賀建一郎会員：国文研叢書『日本思想の系譜—文献資料集—』の輪読）、古川会（古川広治会員：時事問題の勉強会）、寺子屋輪読会（福岡事務所における福岡県内大学生の輪読会：小柳陽太郎著「教室から消えた物を見る目、歴史を見る目」の輪読）

○九州工業大学春合宿

平成二十二年三月二十七日～二十八日宮若市の梅鶯塾において「九州工業大学輪読会春合宿」が実施された。九工大では恒例となつてゐるもので、その年の卒業生による卒業発表を中心を組み立てられてゐる。九工大在學生、OBはもちろん、九州の国文研会員も例年参加してゐる。今年は學生五人、OB十二人の計十七人が参加。學生としての来し方と社會人としての抱負、後輩への思ひ等を徹して語り合つた。参加者の短歌を次に記す。

谷口耕平兄の卒業発表を聞きて

九州工業大学 大学院一年 鶯頭祥平

恥づかしくまた懐かしき思ひ出を思ひ出しつつ涙浮かべる

九州工業大学 情報工学部五年 谷口耕平

梅散りて桜咲く頃梅鶯の学びの庭に友ら集ひぬ

忠孝の元なるものは感謝なりと語らる友の氣づき尊し

五年を振り返りつつ発表すれば梅鶯の縁のありがたしと覺ゆ

大森淳史、権藤尚樹両名が輪読会を率ゐるに当り

ますくなる心を持てるみ友らよ自らを尊び励み行きまほし

○九州工業大学OB講演会

四月二十六日、情報工学部三年の大森淳史君を中心に九州工業大学情報工学部構内において、OBの桑木康宏会員による「学生時代にやっておくべきこと」と題する講演会を企画、十一名の参加を得る。ここでも、共に学ぶ新たな友との出会ひがあつた。

○講演会

六月十九日、寺子屋モデル（博多駅東口）の会議室にて産経新聞記者による講演会を共催した。「第十二回最前線報告会……参院選直前、政局の行方」と題して、産経新聞政治部長乾正人氏が講演した（参加者約八十人）。講演会後、合宿教室の開催が案内され、その後産経新聞関係者も交へて懇親会が催された。

第五十五回合宿教室に向けて

今回は合宿参加者の目標数を学生百名、社会人・会員百五十名の計二百五十名とした。さ

らに、地区別、大学別に目標数を具体化して、その達成に向けて取組んだ。結果は必ずしも目標通りには行かなかったが、数値を設定し取組む意義はあったと思ふ。目標達成のためには何をすべきか。付き合ひのある学生が極端に少ない現状と、初めて運営委員を経験する我々である。例年と同じことをしてゐては達成できない。何かを始めなければならぬの思ひで取組んだ。

詰まる所、運営委員各自が勧誘活動の主体となることである。合宿教室とは何か、何故合宿教室に参加して欲しいのか、何故我々は学ぶ必要があるのかを自らに問ひ、そこから生れた言葉を持つことである。一緒に学びたいと思ふ人との接点を持たうと心がけることであり、一緒に学ばうと働きかけることである。そしてその各自の動きを全国の友へ、また、身近な友へと広げることである。皆で知恵を出し合ひ、情報を交換することであつた（今年はいんターネットを活用した会議の開催、勧誘状況の共有等が図られた）。勧誘状況については国文研の事務局（東京）から集計されたものが逐次発信された。その情報を得る毎に、合宿への「参加申込者」の背後に勧誘に心を砕く友の姿が偲ばれ、本当にありがたく感じられた。そして、参加を表明してくれた会員には直前まで勧誘への協力を依頼した。正に「連絡は生成」であり「命は交流なり」である。足を運び、声を掛け、声を交すことの大事さを改めて実感した。

かうして運営委員会を中心に各地の会員に呼び懸けて勧誘活動が展開された。合宿直前までマンツーマン運動が続けられた。

合宿教室のあらし



第一日目（八月二十日・金曜日）

第五十五回全国学生青年合宿教室は、熊本県阿蘇市の「国立阿蘇青少年交流の家」にて開催された。当施設は阿蘇五岳の一つである中岳を眼前に眺み、周囲には青々とした草原が広がり、放牧されてゐる牛の草喰む様子も望見できるといふ絶好の場所に位置してゐた。また例年にならない酷暑に見舞はれた夏ではあったが、時折吹く高原のそよ風に涼を感じることも出来る素晴らしい環境でもあった。

全国各地から参集した参加者はそれぞれの思ひを胸に、受付を済ませると直ちに開会式へ臨み、三泊四日の合宿教室が幕を開けた。

午後二時半から講義室で開会式が行はれ、九州工業大学大学院一年伊藤健司君が力強く開会宣言を行った。主催者を代表して上村和男理事長は「これからの人生をどう生きていくべきかを考へる三泊四日にして欲しい。先人が伝へてきた国の歴史を頭で考へるだけでなく、国柄の大切さを各自が自分の心で感じ取るべく努めて貰ひたい。われわれ一人一人が、日本の国を守るといふ意思と志を持たない限り、国の存続は危ふくなる。学問の目的をしつかり踏

まへて取り組んで欲しい」と挨拶した。次いで日本大学二年小柳辰介君は「初めて参加した昨夏、班の友と語る中で日本の良さを実感した。日本人として如何に生きていくべきかを共に学び語り合つていきませう」と参加者に呼びかけた。開会式に引き続いてオリエンテーションに移り、古川広治合宿運営委員長（福岡中央公共職業安定所）、小林国平指揮班長（福岡・祐誠高等学校教諭）がそれぞれ合宿の趣旨説明及び諸注意の伝達を行った。

式後、班ごと（七、八名で編成）に着席してゐた参加者は、その場で同じ班の仲間達と互ひに言葉を交はし、自己紹介を行った。

小休憩の後、「古典輪読に学ぶ日本人の知恵」と題する日章工業（株）代表取締役社長藤新成信先生による合宿導入講義が行はれた。「輪読に学ぶとは、心を働かせて学ぶことであつて、単に字句の意味が正しいとか知識を身につけるとかいふことではない。「なぜ古典を読むのか、学問の目的は人生をどう生きるかを考へることにある。一人で読んでもなかなか理解することが難しく、他人と一緒に読むことにより理解が深まる。自分の身に降りかかる事態をどう解きほぐし対処したらいいのか。そんな時、先人の言葉は一つの姿を示してくれる。その言葉にどう接するかが大事なのである」と述べ、一つの文章を皆で精読して感想を述べ合ひ、その言葉に耳を傾け合ふ輪読の意義が説かれた。ことに日頃、九州工業大学の学生と続

けてゐる吉田松陰の『講孟箚記』の輪読で気づかされたことや、会社経営者として「いまの不況によって人が育ち、成長させていただいてゐる」との体験を交へながら講義が進められた。そして「他人の話に親身になって耳を傾け、心底からの思ひを語り合ふ四日間として頂きたい」と結ばれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、講義についての感想を述べ合ふ班別研修が行はれた。まづ、講義を聴いて班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて話し合ひ、講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを確認し、そのうえで各々の思ふことを述べ合った。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも行はれた。緊張のせるか、初めのうちは言葉も少なく発言も限られてゐたが、次第に打ち解けて話し合ひも活発となり、時に疑問を呈したり質問を繰り返したりしながら、班員相互の交流が深められていった。

夕食後、元福岡県立小郡高等学校校長志賀建一郎先生の歴史講義「元寇 文永の役の実像―『蒙古襲来絵詞』を読む―」が行はれた。鎌倉時代の二度に亘る元寇（蒙古襲来）に関して、文永十一年（一二七四）の「文永の役」に関する通説を覆す新たな研究が発表されてゐることに触れながら、「九州熊本^{すえな}の御家人であつた竹崎季長は、後世『竹崎季長絵詞』とも呼ばれる絵

と文からなる合戦記『蒙古襲来絵詞』を描かせた。武士としては褒賞を得るといふ現実的要素のため、その記述には、証人を立てて、証人を立つといふ文言が多用されてゐる。次いで高校日本史教科書の記述を引きつつ、文永の役に関する従来の説の誤りを指摘し、「絵詞を読めば往時の日本人の強さ、素晴らしさが分るはず」と、絵詞の一節を参加者全員で声を揃へて朗読した。そして「なぜ教科書は、日本は元の大軍を打ち破った」と書かないのか、日本が勝つたとストレートに書くことを躊躇させるものは何かと問はれ、極東国際軍事裁判（いはゆる東京裁判）の呪縛からなほ逃れられないため、歴史を受け継がうとするよりも歴史から距離を置くことを良しとするやうになると、今のわが国が内包する本質的な問題点を指摘された。そして最後に「仮に一時的にせよ、元軍の上陸を許してゐたら、それを根拠に現在の共産中国は九州はかつて中国領であつたなど言つてゐたかも知れない」と、元軍を退けた鎌倉武士の奮戦の意義を説かれた。

第二日目（八月二十一日・土曜日）

合宿の日程は、早朝六時半、「朝の集ひ」から始まる。参加者は、講堂の裏手に広がる芝生

の丘に集ひ、眼前に阿蘇中岳の雄々しき姿を仰ぎ、遠く眼下には阿蘇外輪山に囲まれた広大なカルデラを見つつ、高原の清々しい朝の空気を吸って一日の始まりを迎へた。班ごとに整列した参加者は、進行役の運営委員、横畑雄基氏（株）寺子屋モデル講師）の提案で、しばし瞑目して遠く近くから聞える鳥や虫の声、牛の鳴き声、また朝風に揺らぐ梢の葉音などに耳を澄ませた。不思議と心の落ち着くひとときであった。日々、巷の人工的な喧騒に囲まれることの多い参加者には、あらためてのどかな自然の営みに気づかされて、心洗はれる体験ともなった。また国文研会員の森田仁士氏（北九州市立医療センター技師）による歌唱指導が行はれ、二日目の朝は『元寇』、三日目の朝は『牧場の朝』を全員で唱った。その後、毎朝、「国立阿蘇青少年交流の家」に同宿してゐる他団体の人達との合同の宿舎行事「朝礼」に参加。国旗掲揚のあと、声を懸けながらラジオ体操をして、心身のコンディションを整へた。

第二日目の最初の講義は、短歌創作を兼ねた野外研修（阿蘇登山・草千里散策）を前に、『短歌創作導入講義「『短歌のすすめ』を読む』が、元富山県立富山工業高等学校教諭岸本弘先生によって行はれた。合宿参加必携書である夜久正雄・山田輝彦両先生の共著『短歌のすすめ』と、同じく両先生による『短歌のあゆみ』（国文研叢書）が上梓された時代背景が説明された。その中で昭和三十七年の第七回合宿教室で行はれた夜久先生による「短歌の哲学と技術」と

題する短歌創作についての講義の一節が紹介され、「短歌創作の意味は、聖徳太子の『自他の二境を分たず』とのお言葉から読み取られる平等感であり、それは心の通ひ合ひを大切にしてきた祖先伝来の日本文化の本質そのものである」と説かれた。そして柿本人麻呂、防人、幕末の志士、そして明治天皇・昭和天皇のお歌を紹介し、また学生の詠草の実例を示しつつ短歌創作の心得が説かれた。

短歌を詠む際に注意すべき要点を聴講した参加者は、それぞれお昼の弁当とお茶を手に四台のバスに分乗して野外研修（阿蘇登山・草千里散策）ため宿舎を出発し、まづ阿蘇の火口へと向った。麓からロープウェイを利用する班が多い中、徒歩で元気よく火口を目指す班もあった。噴煙を白く吹き上げる隙間から火口の底をのぞくと碧色みどりの水が湛へられてゐて、その美しさに息を呑む思ひであった。火口付近を重点的に見学する班はしばらくここに留まり、その他の班はバスで草千里へと向った。一面に広がる緑は「草千里」の名に相応しく、参加者は草原の広がり眼をみはり、馬に乗り遊覧する者もゐた。それぞれの見学場所で班ごとに弁当を開いて、語らひながら昼食を摂った。なほ、地元熊本在住の国文研会員がバスガイドの役を引き受けて、往復の車中で「阿蘇」についての説明が行はれた。

午後は、京都大学大学院教授中西輝政先生による講義「この国はどこへ行くのか」が行は

れた。初めに「現在の日本は、政治の混乱とも相俟つて、経済・教育・安全保障などが心もとない状況に陥つてをり、欧米のマスメディアは今や『ジャパンアズナンバー3』と評してゐる。その立て直しにこれから日本人がどう関つていくべきか」と参加者に問はれ、三つの柱を立てて講義を進められた。まづ一点目に、現在の日本を荒廃させてゐる原因として、逼迫する財政への無策、年々増大する中国の軍拡とその経済力に対する米国の弱腰、かうした米中の動向に対処し切れないわが国政府の対応、そこから生じた日米同盟関係の亀裂等々を指摘され、さらに民主党政権の国柄への無理解・無頓着にも注意すべきと警鐘を鳴らされた。二点目は、このやうに衰亡する日本を救ふ方策は何か。国のあり方をしっかりと踏まへた上で現実問題解決の戦略を練る



「新しい日本人」の登場が待たれる。それは吉田松陰の精神、松下村塾の戦略学に学ぶことであり、「日本人に必要なことは、わが国の伝統へのアイデンティティーを身に体し、皇室のあり方を真剣に考へながら、政治の現実には切り込んでいく勇気を持つことである」と述べられた。さらに三点目として、インテリジェンス（情報）の重要性を強調され、「日本精神と戦略の思想とを合はせ持った救国者に求められるものは、日本の歴史と文明をひもときながら軍事問題を考へる戦略の思想である」と説かれた。

講義後の質疑応答の中で、戦後のわが国では、「軍事力の問題」「情報活動の重要性」「国際金融の問題」をきちんと学ぶことができないと指摘された。

夜は、「柿本人麻呂」と題する講義が昭和音楽大学名誉教授國武忠彦先生によって行はれた。冒頭、大化の改新の二十余年前に亡くなった聖徳太子の御存在に注目され、「天皇弑逆といふ暗澹たる時代に国政を担はれた太子が定めた憲法十七条は今にいたる日本の憲法の原点である」「太子の志は舒明天皇に引継がれ、さらにその御子中大兄皇子（天智天皇）、大海人皇子（天武天皇）に伝へられた」と述べられた。太子が願はれた中央集権国家の樹立、公地公民制の実現、門閥打破による人材登用は「このお二人によってほぼ達成される。天武天皇の後に即位されるのが柿本人麻呂が仕へた持統天皇である」と説かれた。天武天皇と持統天皇の間

にお生れになった草壁皇子（皇太子）は父天武天皇崩御の諒闇明け間もなくして二十八歳で薨去し、その御子軽皇子はまだ五歳であった。そこで軽皇子が大きくなるまでの中継ぎをされたのが持統天皇であった。「持統天皇の胸中はいかばかりか。この天皇に人麻呂がお仕へしたといふ事実を頭に留めて欲しい。七一〇年の平城京遷都に先立つ七十年間も見落してはならない。この歴史の連続性の中で私達の現在の礎ができた」と述べられた。続けて人麻呂が天智天皇の近江京の「荒れたる」様子を詠んだ長歌について、「橿原の御代（初代の神武天皇の時）から詠み始めて天智天皇に至る歴史が想起されてゐる、人麻呂は皇位が脈々と継承されたきた国の姿を偲んでゐる」と述べられ、さらに通常は意味を問はない数々の「枕詞」の意味するもの、神々と人々が表裏するかの如き妙なる調べ等を味はひつつ、人麻呂の歌謡が内包する歴史精神を明らかにされた。

第三日目（八月二十二日・日曜日）

三日目は国立病院機構都城病院長小柳左門先生の「歴史の玉の緒」と題する講義から始まった。先生は岡潔先生の文章を引きながら、「玉」とはわが国の歴史の中で輝きを放つ偉人

の生き方、「緒」とは玉を繋ぐ命であり、それを受け継ぎ後世に伝えたいと思ふ強い心であらう」と標題の意味するものを解説され。太子制定の憲法十七条第一条「和を以て貴しと為し」に触れ、和こそ国民が失ってはならない大切なものとお示し下さったものである述べられ、この憲法には後世、言はれる民主主義の理念が立派に謳はれてゐると指摘された。そして山背大兄王が「一身の故を以て万民を勞するなかれ」と御父聖徳太子の御精神のままに身を捨てられた御心は、玉虫厨子「捨身飼虎図」にも通じるものであり、皇室の伝統として代々受け継がれてゐる誠の心であると述べられ、終戦時の、またその後の御巡幸の折の昭和天皇の御製にそれを辿られ、「戦後、日本復興の礎となつたのは昭和天皇の大御心であり、国民が大御心にお応へすることで経済復興が成つた」と語られた。続いて今上天皇の皇太子時代、沖繩御訪問の折の御歌や琉歌にも果なき御心を辿られた。最後に、国民と共にある皇室の伝統は聖徳太子から今上天皇へと連綿と連なる「歴史の玉の緒」として現実に仰ぐことができることと述べられた。

午後は、伊藤俊介氏（FTIインターナショナルリスク日本支社勤務）による**会員発表**が行はれた。氏は冒頭で十年前の大学生時代に、この同じ場所で開かれた第五十五回合宿教室に参加したことを振り返り、イギリス系企業のインターナショナルリスクにおける経験を基にビジ

ネスイntenテリジェンスについて語った。FTIは大英帝国の時代から全世界に築き上げられたネットワークを活用して、ビジネス戦略上の有益な情報「ビジネスインテリジェンス」の収集・分析業務等を行ってゐるが、その仕事を通じて日本人として学ぶことは多い。ビジネスインテリジェンスのノウハウを持つ外国企業をどう活用するか、日本企業は多くの課題を抱へてゐる。将来はビジネスインテリジェンスを通して国益に関する分野で貢献できるやうになりたいと語った。

ついで二日目午前の野外研修の折に全参加者が詠んだ短歌は、この日の昼までにわら半紙(B4版)十五枚の「歌稿」(参加者各々の歌一首以上が載つてゐる)に纏められ、個々の参加者に配付されてゐた。その「歌稿」に基づいて、創作短歌全体批評が東洋紡



績(株)勤務の庭本秀一郎先生によつて行はれた。まづ「良い歌」とは真心の伝はる歌であると説かれ、良い歌を詠む為には真心を覆ひ隠してしまふ「個我」を取り除いて行くことが必要と語られた。その後、第一班から順に一首づつ取り上げ、「二首一文」の原則や「言葉の正確さ」「より具体的に詠むこと」など「短歌を詠む時のポイント」、そして「添削のポイント」を具体的に述べ、また合宿事務局のアルバイト高校生の短歌や合宿に寄せられた諸先生の短歌も紹介された。最後に、感動を素直に正確に具体的に詠むといふ創作の折の原則を念頭に班での相互批評に取り組んで欲しいと述べられた。

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれ、自分の心の動きを正確に表現し相手に伝えることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が作者の納得できる表現にしようといふ力を尽して時間を超過してしまふ班も多くあつたが、それだけに自分の心、相手の心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることができた。

夕食後は先人をお偲びし、わが人生の意味を心静かに顧みる慰霊祭が執り行はれた。

祭儀に先立ち元新潟工科大学教授大岡弘先生(本会理事)から慰霊祭祭行の趣旨・手順が具体的に説明された。その中で「遠き古より今日に至るまで戦時平時を問はず、『祖国日本』を

守るために尊い命を捧げられた全ての祖先のみ霊を齋庭にお招き申し上げ、ご馳走をお供へして、おもてなしをし、豊かな日本の文化に浴することが出来る幸せを祖先のみ霊に感謝申し上げ、続く者として自らの決意を固める祭りである」と説かれた。祭儀は講義室裏手の草原に設^{しつち}へられた齋庭で厳修され、初めに祓詞に代へて三井甲之の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の短歌を山口秀範常務理事が朗詠し、小野吉宣参与が御製を拝誦した。ついで澤部壽孫副理事長が祭文を奏上した後、参加者全員が「海ゆかば」を奉唱した。

阿蘇の山々に囲まれた草原には満点の星が輝き、亡き師亡き友の面輪が間近く感じられる如くであった。

左は拝誦された「御製」と奏上された「祭文」である。

明治天皇

蟲聲（明治四十四年）

さまさまの蟲のこゑにもしられけり生きとしいけるもののおもひは

四海兄弟（明治三十七年）

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

をりにふれたる（明治三十七年）

石だたみかたきとりでも軍人みをすててこそうち砕きけれ
おのが身にいたでおへるもしらずしてすすみも行くかわが軍びと
いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ
たたかひに身をすつる人多きかな老いたる親を家にのこして
世とともに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを

をりにふれたる（明治三十九年）

ますらをも涙をのみて國のためたふれし人のものがたりしつ

天（明治三十七年）

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

友（明治三十六年）

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

昭和天皇

（昭和二十年）

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

今上天皇

硫黄島 二首のうち（平成六年）

精魂を込め戦ひし人未だ地下に残りて島は悲しき

祭詞

火の国に雄々しく聳ゆる阿蘇山に、緑豊かに連なる山並み、広がる国原、今し天つ日は沈み、夕風そよぐ、これの草原をみ祭りの齋場ゆにはと定め、今宵平成二十二年八月二十二日、われら集ひて、祖国日本の遠き古へより今に至る迄、平時戦時を分たず、み国のために尊きのちを奉げ給ひし数限りなきみ祖おやたちのみたまを、これのみ祭りの齋場に魂よばひまつり、ささやかなれども海の幸・山の幸種々くさくさの品をみたまのみ前に献げまつり、をろがみまつりて、われらは、みたまをなくさめまつらむとす

顧みれば、全国民一丸となりて戦ひし大東亜戦争に敗れし後の米国の占領政策による日本

の文化・伝統の徹底的なる否定は、日本人の精神を蝕み、み国の行末を愈愈危ふくすれども、偏に、昭和天皇 今上陛下の御聖徳に導かれ、み国の生命は守られて来ぬ

しかれども、み祖の生き方に自信と誇りを失ひし心は、教育界を始めとして、政界・財界等全国津々浦々にまではびこり、日本の教育・外交・国防などに独立自尊の精神は失はれ、道をふみ迷ひ、今ただならぬ、憂ふべきみ国のさまとはなりぬ

かかる時、われら、五十五年の歳月を重ねしこの合宿教室に集ひ、老いも若きも、もろ共に心を働かせ 言葉を修め 日本文化の良き伝統を学び 共に 世に立つべき友となりなむと、諸講義に耳を傾け、班別討論などを重ね、朝夕につとめはげむさまをみそなはし給へ今より後は、大君のみことかしこみ、み祖のみたまのみまもりを信じ、つとめの庭に、学び舎に、はたまた教への庭に、世の正道をきりひらき、国の内外にはびこるまがごとを、もろともに力を協せ、打ち払はむと誓ひまつらむ

天翔けるみ祖のみ霊よ、願はくは我らのゆくてを守らせ給へと、ここに第五十五回全国学生青年合宿教室参加者一同に代り

澤部壽孫 謹み敬ひ畏み畏みも曰す

慰霊祭の後、参加者は各班室のもどつて、その感想や感じたこと考へたことを率直に語り

合ふ班別懇談の時間を持った。

その後、再び屋外の草原に集り、「夜の集ひ」が行はれた。差し入れの飲料を手にキャンブファイヤーを囲み、各班が演じる趣向を凝らした寸劇や歌の出し物に盛んな声援や拍手が送られた。また全員参加でのクイズ大会も行はれ、難問珍問尽しの中、正解が発表されるたびに歓声が起り、大いに盛り上った。終りに全員で「元寇」、「進めこの道」（国文研の前身・日本学生協会の行進曲）、「故郷」を唱和して、短時間ながら心に残るひとときであった。

第四日目（八月二十三日・月曜日）

いよいよ最終日を迎へた。最後の講義は、（株）寺子屋モデル代表世話役山口秀範先生の「持続する志―橋本左内『啓発録』に学ぶ―」であった。初めに小田村寅二郎先生（国文研前理事長）の一文を引きつつ「この合宿を通して皆さんの胸中に沸々と湧いてきた思ひをスピリット、『志』と言ひたい。この時間は自分の志の立て方を幕末の橋本左内の『啓発録』から学びたい」と問ひ掛け、左内は安政の大獄に斃れる二年前、「海外の事情第一に御推察之有り度候」と友に書き送つてゐる。「ここに中西輝政先生が言はれた正しく現状を認識した上で戦略

を練る。新しい日本人の典型を見ることができる」と指摘され、『啓発録』に掲げられた五項目は、相互に関連してゐるとして、「一、父母に寄りかかる心を取り去る『去稚心』。二、恥辱を無念に悔しく思ふ意気張りである『振氣』。三、『振氣』はすぐ後戻りしかねないが、その心持ちを失はぬための『立志』。四、その志を支へて強化するのに不可欠な『勉学』。五、学に勉めて行くうちに芽生える傲慢や独善を正してくれる益友を持つ『択交友』である」と説かれた。左内は、同時期に江戸伝馬町の獄にあった吉田松陰とは直接の接触はなかったが、英雄は英雄を知るの譬への如く、松陰が『士規七則』に掲げた『三端』は期せずして左内の言ふ『立志』『択交友』『勉学』と共通してゐる事実を紹介して、『啓発録』は、平成の私達へのメッセージであり、それをどう受け止めるかは私達次第である。日本の歴史は一本に連なつてゐる」と締め括られた。

この後、班別研修が行はれ、第一日目からの諸講義を振り返りつつ、各々が胸中の思ひを語つた。これからどう学業や業務に取り組むかを互ひに語り、班員の言葉に耳を傾けた。ついで地区別懇談が持たれ、今後日常生活に戻つたあとも、連絡を取り合つて学びを深めるべく顔合せがなされた。

閉会を控へて、参加者が合宿教室で何を学び、それをどのやうに日々の生活の中で生かさ

うとするか等々を率直に語る全体感想自由発表が行はれた。参加者の感想発表に先立って古川広治合宿運営委員長が「阿蘇の地に集ひ、皆さんと寝食を共にして学んだことに意味がある。ここで語り合ひ耳を傾けたことを大学や職場に戻った後も、ぜひ生かして欲しい」旨の所感を語った。

その後、次々に挙手をして登壇した参加者は率直に胸の裡を語った。「天皇や皇室は、歴史的権威だけでなく、お一人お一人の人間性が素晴らしいのだと言ふことを和歌を通して感じることができた」、「日本人の崇高な心を引き継ぐようにしないと、我が国は滅亡してしまふ。日本を守る担ひ手となるバトンを渡されたとの思ひがする」、「先人の思ひとか日本人としてとかを考へてもみななかったので心境が随分変わった」、「日々驚きの連続で勉強不足を痛感した」、「具体的なエピソードを通して天皇の民を思ふ御心が感じられた」、「歴史上の人物が伝へようとしたことが実感できた」、「歴史の繋がりを実感したが、目の前の人と感じ合ふことも大事だと思った」、「日本人の大切な心を受け継ぐべく日々努めることが肝要だと思った」、「昔の人が後ろに付いてゐると感じた」、「短歌の相互批評に参加して心持ちをどう表現するかといふことで多くのことを学んだ」…。

参加者の協力により予定した日程は滞りなく進み、いよいよ閉会式を迎へた。国歌斉唱は

開会式の折に比してより力強いものとなった。主催者を代表して磯貝保博副理事長は「皆さんの心に疲労感があるのは多くのことに心を勞したからだと思ふ。歴史の大切さを実感したとか、勉強すべきことの多さに気付いた等々の感想発表をお聞きして、有意義な合宿であつたと喜んでゐる。ここで学んだことを御家族や友達に是非伝へて欲しい」と挨拶した。九州工業大学三年大森淳史君は「この合宿で同じ講義を聞いた班員と熱く議論を交すことができ、て本当に嬉しかった」と感謝の思ひを述べた。そして学習院大学四年藤尾允泰君が閉会を宣言して第五十五回全国学生青年合宿教室は幕を閉ぢた。

参加者

(学生班) (算用数字は参加学生数)

- 北海道大学 1 埼玉大学 1 東京大学 1 東京理科大学 1
- 学習院大学 1 国学院大学 1 日本大学 1 亜細亜大学 1
- 中央大学 2 杏林大学 1 専修大学 1 都留文科大學 1
- 職業能力開発総合大学校 1 同志社大学 1 立命館大学 1
- 岡山理科大学 1 九州工業大学 5 九州女子大学 3

福岡大学 4 福岡工業大学 1 筑紫女学園大学 1

九州大学 1 中村学園大学 3 久留米工業大学 1 佐賀大学 1

東海大学 1 長崎大学 1 琉球大学 1

計 四十名（うち女子十三名）

（社会人参加者）三十九名（うち女子五名）

（招聘講師）一名

（国民文化研究会）六十二名

（事務局・アルバイト）四名

（見学者・慰霊祭協力）五名

総計 一五一名

第五十五回(平成二十二年)全国学生青年合宿教室「日程表」

8月22日(日)	8月23日(月)
起床・洗面	起床・洗面
朝の集ひ	朝の集ひ
朝食	朝食
講義 小柳左門先生	講義 山口秀範先生
班別研修	班別研修
	地区別懇談
	合宿運営委員長所感 全体感想自由発表
昼食	感想文執筆 (第二回短歌創作)
会員発表 伊藤俊介氏	閉会式
創作短歌全体批評 庭本秀一郎先生	磯貝保博 副理事長 (昼食・解散)
班別短歌相互批評 (短歌再提出)	
夕食 入浴 休憩	
慰霊祭の説明 大岡弘先生	
慰霊祭	
班別懇談	
夜の集ひ	
就寝	
消灯	

合宿教室のあらまし

	8月20日(金)	8月21日(土)
6:00		起床・洗面
7:00		朝の集ひ
8:00		朝 食
9:00		短歌創作導入講義 岸本弘 先生
10:00		野外研修 昼 食 阿蘇火口登山 草千里散策 (第一回短歌創作)
11:00		
12:00		
13:00	開会式 上村和男 理事長	
14:00	オリエンテーション 古川広治 合宿教室運営委員長 小林国平 合宿教室指揮班長	休 憩
15:00	班別自己紹介	講 義 中西輝政 先生
16:00	合宿導入講義 藤新成信 先生	質疑応答
17:00	班別研修	(写真撮影) 班別研修
18:00		(短歌提出)
19:00	夕 食 入 浴 休 憩	夕 食 入 浴 休 憩
20:00		古典講義 國武忠彦 先生
21:00	歴史講義 志賀建一郎 先生	
22:00	班別研修	班別研修
23:00	就 寝	就 寝
	消 灯	消 灯

合宿詠草抄



講義

志賀健一郎先生の御講義

埼玉大 教養二 山中利郎

寄せ来たる冠^{あだ}しりぞけしますらをの功し語る姿雄々しき
外つ国に勝ちし戦を明らかにして国の誇りを取り戻したし

中西輝政先生の御講義を拜聴して

学習院大 法四 藤尾允泰

黒船に乗りこむがごとく国護る青年たれと師は宣ひぬ
国を想ひ身をかへりみず生涯を捧げし松蔭に心奮ひぬ

同志社大 法三 佐々木保

さまざまの事を乗り切り力あるスピリットをば我は持ちたし

東京理科大 理四 甘楽泰久

中国の脅威を学び湧き上がるみ国を守らむ強き思ひの

國武忠彦先生の御講義をお聴きして
国学院大 文三 相澤守

ありありと人麻呂の如く語る師の学びの深さ思ひ知らさる

亜細亜大 国際関係三 三輪夏美

古くより伝はり来たる歌の道につらなりわれも歩みゆきたし

九州女子大 人間科学四 西山志織

師の君は感嘆されつつ人麻呂の枕詞を語り給ひぬ

小柳左門先生の御講義を聴きて 都留文科大 文一 神保江里子

師の君のやさしく語ります日の本のことがこころにしみてゆきけり

(宗) 根本山宝満堂 平川秀隆

おほきみの民への思ひ知るときに頬を伝ひて涙流るる

阿蘇登山・草千里散策

中村学園大 流通科学三 相良真史

阿蘇山の道登りつつ想ふかな大志を胸に生きてゆかんと

中央大 文一 廣木摩理勢

つい昨日出会へる友と登りしは阿蘇の中岳仲を深めき

長崎大 教一 浜崎 愛

煙立つ底よりそびゆるむきだしの岩はだ荒くどしりとかまへる

中央大 総合政策三 大小田 紗和子

草千里あたり一面見渡せばどこまでも続く阿蘇のやまやま

(株)九州リースサービス 近藤 正和

草原に語らふ親子の姿見れば在りし日の母思ひ出されり

福岡大学経済学部教授 阿比留 正弘

草千里どっしり座って飯を食み語らふ友の楽しげに見ゆ

研修の日々

友だちと互ひの思ひを語らひし楽しき夜の時を忘れじ

朝の阿蘇野にて

福岡大 経三 岡松 侑希
(株)はせがわ 小山 奈都子

目を閉ぢて耳を澄ませば鳥の声虫の声して心洗はる

(宗) 根本山宝満堂

山下和彦

月の夜の慰霊のまつりに参列し祖先の思ひありがたきかな

(株) ワイドレジャー

澤島 尚

友達と意見を交すこの時間理解の深まり気持ち充ちたり

東京大 教養二

高木 悠

満面に笑みを浮べて友どちの語る言葉は盡くることなし

九州女子大 家政三

松浦成美

友達とそれぞれ想ひを語る時仲の深まり感じて嬉し

東海大 農二

寺井祥一

合宿の講義で共に学びたる歴史のつながり友とのつながり

ジット(株)

鷹野竜一

合宿で祖国の歴史を聴きたれば祖先の偉業に心打たれり

九州女子大

小野香美

言の葉を本音で交し合ふことは人と人との心つながぬ

日本和装ホールディングス(株) 早瀬賢治
日常の喧騒離れ阿蘇に来て自然の涼風に心洗はる

九州大 農二 竹中千裕
縁ありて出会ひし友と歌を詠み言葉を探すひととき嬉し

決意

九州工業大 大学院一 伊藤健司
日本の未来を想ひ過去を知り松陰の念ひに我も応へむ

福岡大 工二 廣木文屋
合宿に来ていろんな思ひに浸りては己が思ひを確たるものとす

九州工業大 情報工三 権藤尚樹
友達の力あふるる姿みて我も負けじと励まむと思ふ

佐賀大 文化教育三 吉本朋代
先人の深き思ひを受け継ぎて日本の歴史に我も続かむ

山口県立熊毛南高等学校教諭

吉津佑紀

学問のかくあるべきを省みて志新こころあらたかに深めゆきたし

合宿終る

中村学園大 人間発達二

久富玲奈

短かしと思へるほどに充実し学びしことは宝なりけり

すずかけ台保育園

田中美里

四日間阿蘇の地にてのこの出会ひ感謝の思ひあふれくるなり

(株)テノ・コーポレーション

吉武篤志

日本史で名を知るのみの人物が心の中で動き始めつ

九州工業大 情報工三

藤瀬拓臣

先生の熱意を感じる講義受け充実とともに合宿を終へる

日本大 法二

小柳辰介

四日間ともに学びし班友と再会ちかひ山を下りぬ

いと早し阿蘇での日々は終れども我がこころには明かりつきたり

鶴花園

鶴

比呂子

時忘れ共に語らふ仲間達もう一度会はう広島の地で

専修大 一

奈良崎 恵 祐

大学教官有志協議会・国民文化研究会

中西輝政先生ご夫婦を熊本空港に出迎へる

国民文化研究会理事長 上村 和 男

奥様とつれだち給ふ師の君のさやけきみ姿見るがうれしき

かけ寄りて声をかくればたちまちにゑみのあふれてなつかしきかな

名和長泰兄（久留米大附高教諭）、突然訪ね来る

忙しきなりはひの中訪ね来し友のなさけの有難きかな

くさぐさを語りし中に今は亡き師の君偲ぶ言葉なつかし

二十一日、朝の集ひ

元日商岩井（株） 澤 部 壽 孫

澄み渡る朝あしたの空に阿蘇の山緑豊かに雄々しく立てり

高岳をおほふむら雲たちまちに風に払はれ薄れ消えゆく
目を閉ぢて耳をすませばをちこちゆ小鳥囀る声の聞ゆる

中西輝政先生の御講義

亜細亜大学・拓殖大学講師 山内 健生

目に見えぬ人の心のありやうに濫れ出で来しとまづ説きたまふ
老いし親の行く方も尋ねず年金を掠めとるとは許しがたしも
親と子の絆さへもが崩れ行くか御講義聞きつつあらためて思ふ
日の本の心を持ちて戦略を練るべきが大事のみ言葉つよしも

(株) 寺子屋モデル 山口 秀範

照りつくる陽射し隈なく注げども高原渡る風心地良し

東屋あづまやの僅かの陰を求めゆき弁当開けぬ友らと共に

久々に見えて昔語りなどしつつ頬ほほばる握り飯うまし

幾度いくたびもこの地に集ひみ教へを賜たまひにし事共蘇り来る

千里原見み放る緑目にしみて一陣の風に生命いのち恵まる

合宿二日目朝

山口県立熊毛南高等学校教諭 寶 邊 矢太郎

朝つゆにぬれたるくさはらきらめきて朝のすがしささらにいやます

朝の気はすがし胸一杯吸ひこめば根子岳高岳まなかひに迫る
高岳に朝日影い射し山はだにかけ濃く残す姿ををしも

いただきをやや覆ひたるうす雲の流れてやがて山の端に消ゆ
くさはらのなだれに群れる牛たちの草食む姿うごくともなし

「朝の集ひ」にて、しばし目を閉ぢるやうに言はれて

(株) I H I エアロスペース 内海勝彦

まぶた閉ぢ耳を澄ませば思はずも鳥の鳴く声間近に聞ゆ
蝉の声虫の鳴く音も加はりて小さきいのちの営み偲ばる
さまざまの生き物たちを育みてはるかに拡ぐる阿蘇の緑は

志賀建一郎先輩のご講義をお聴きして

興銀リース(株) 小柳志乃夫

壇上に仁王立ちして声太く眼光強く語りたまひし

鎌倉の武士ものふかくやありけむと思ひつつ仰ぐ雄々しき姿を

合宿導入講義の御役をいただきて

日章工業(株) 藤新成信

合宿に何語らむと迷ひつつこのひと年は過ぎにけるかな

思はざりし今は亡き師のみ姿の胸にうかびく壇上にたてば

ありし日の師を思ひつつ我が胸の思ひのたけを語り終へけり

中島法律事務所 中島繁樹

をちこちゆ小鳥の声に虫の音もかさなり聞ゆ阿蘇の広野に
夏日射す空のかなたに中岳は岩肌しるくそそり立つなり

慰霊祭にて

大阿蘇の夜のしじまに御製読む言の葉しるくひびき渡れり

最後の班別研修

熊本市役所 折田豊生

澄み透る気の部屋内へやぬちに満ちてあり友らと別るとき近づきて
この日々のくさぐさ思ひ返しつつ友らが語るを面見つめ聴く
おのおのも別れゆくとも呼び交し言ひ交し共に学びゆきなむ
志なほ強くあれいつの日かまたまみえたきこのよき友らよ
み国今ただならぬときおのがじし持てる力を尽さざらめや

朝の集ひの折に

熊本県立大津高等学校長 白濱裕

涼風の吹き渡りたる草原に友らと仰ぐ五岳しるけし

眼閉ぢ耳を澄ませば聞え来るかそけき虫の音秋近みかも

短歌導入講義

元富山県立富山工業高等学校教諭 岸本 弘

今は亡き師の御心を仰ぎつつ講義準備に明け暮れし日々

あのこともこのことをと思ひつつ過ぎゆく時に追はれ語りゆく

慕ひ来しお二人のお歌を結びとて拙き講義今了りたり

草千里にて

元福岡県立小郡高等学校校長 志賀 健一郎

緑濃き草千里の原眺めつつたたずみをれば風渡り来ぬ

草千里を見れば思はる二十年はたとせ前みたり三人の吾子を連れて来たるを

雪積もる千里の原を駆けまはりし子一人失ひぬ悲しきろかも

「日本への回帰」(第四十五集)に寄せて

日の本に生まれながら日の本に回帰もどると言ふはひたに悲しき

日の本に回帰もどるはたての若者の猛き姿を思ひ描きぬ

交通事故総合分析センター理事長 小田村 初男

古ゆいにしへ國を貫く玉の緒に老も若きも繋がりゆかむ

班別討論

鳥栖市役所 西山 八郎

日追ふごとに変わり行く友の眼差しに身の引き締まる思ひするなり

真剣な友の眼差しに己が身を振り返りつつ思ひ語りぬ

友もまた湧きいづる思ひ伝へむと言葉探しつつ語りたまひぬ

草千里にて

宮崎県立都農高等学校長 竹下鉄郎

なだらかな丘の斜面に青々と夏草繁り涼風の吹く

空は澄み真近に山は迫り来て牛はのどけく草喰みてをり

慰霊祭にて

羽後信用金庫石脇支店 須田清文

友どちとなき友しのびあひまつる齋庭にすぎゆく時しづかなり

今はなき恩師友らをしのびつつあひまつりけり阿蘇の齋庭に

友どちとまつる齋庭の空の上に群雲出でて月影あらはる

慰霊祭にて

日本ユニシス(株)北海道支店 大町憲朗

広ごれる阿蘇の齋庭ゆにはにおごそかにかしこみまつりみ魂をまつる

み魂らを迎へむごとくみ子たちの声も聞え来心なごむも

この年もみ魂まつりにつかへまつり心の中のすべられゆくかな

(株)寺子屋モデル 廣木 寧

三十みそあまり七年前に参加せる合宿教室に吾子たちあこと来る

吾子二人わが学び来し合宿に歴史のいのち学び励めや

中岳火口散策の帰路、班員が競うて軽石を拾ふ

(株) アルバック 北浜 道

火口への道の歩みを共にせしかたみの品と石を求めぬ

細かなるあまたの穴の吹き出せる小ぶりの黒き軽石ぞこれ

いくにちか共に過せし友どちと得しつながりの記念にぞせむ

中西輝政先生の御講義を拝聴して

日本青年協議会 松岡篤志

対馬から佐世保九州沖繩を侵さむとする仇を許さじ

三万の工作員のはびこりてむしばまれゆく刻一刻と

み国いま安政五年の如くなりとただならぬ危機を師は語ります

心と知略共にそなふる新しき日本人出でよとあつく語らる

藤新成信先生の御講義を拝聴して

東洋紡績(株) 庭本秀一郎

自らの進路を決むる時まさに生くるが真の学問なりとふ

事にあたり惑はぬ心の強さをば学問を通じ身につけゆかむ

インターナショナルリスク日本支社 伊藤俊介

師の君ら時に涙し語らるる御教へ胸に熱く迫りぬ

我もまた歴史を担ふ一人とて一日一日を歩み行きなむ

合宿地への往路の飛行機にて

(株) ラック 高橋 俊太郎

熊本の山々見えて合宿地にいよいよせまると胸をどりけり

教へ子の初参加

福岡・祐誠高等学校教諭 小林 国平

この一年準備進めし合宿に教へ子三人来たるがうれし

朝の集ひにて

日本青年協議会 三 荻 祥

朝の陽を受けし草原のをちこちに虫の鳴く音を目を閉ぢて聴く

合宿地に寄せられた歌

合宿御参加の皆様へ

青森 長内 俊平

青砥宏一大兄との最後の合宿つとひとなりたりし阿蘇へと急ぐらむみ友らをおもふ(昭和六十年第

三十回合宿)

胃癌の手術終りて間なき身をおして馴せ呉れ給ひしわが友を憶おもふ

二夜ふたよのみの睦むつみなりしが朝夕を共にすぐせし友を忘れず

今生このじんじょうの別れと友は予感せしや帰りて幾月もなく逝き給ひけり（昭和六十一年一月二十八日逝去）

○

わがこころ遠く阿蘇へと飛びゆきて友らと共に語らふもころ

阿蘇の地を遥かに思ふ

下関 寶邊 正久

阿蘇谷の朝風衝つきて行く汽車に在りて奮ふるひしわれらなりけり

共に在りし阿蘇合宿の師も友もいまに笑みつつ在りませるかも

阿蘇岳を振り仰ぎつつ歌詠みし合宿を思ふしか今も然るらむ

東京 小田村 四郎

山なみを見はるかしつつ大阿蘇に学び語らふ友ら偲しのばゆ

くだちゆく御世憂へつつもろともにしばし学びの道に励まむ

阿蘇の地に共に語りし友どちの数も少くなりにけるかな

新しき友ら集ひてもろともに絆よむすぶをはるかに祈る

あとがき

第五十五回「合宿教室」は、昨年八月二十日～二十三日の間、熊本県阿蘇市「国立阿蘇青少年交流の家」において、大学生・社会人及び関係者、合計一五一名の参加者によって、学問・人生・祖国の姿を心ゆくまで語り合ふ真剣な研鑽が行はれた。本書は、その合宿研修において繰り広げられた各種講義等を中心にその要旨を収録したものである。編集に当っては国文研会員の山本伸治、稲津利比古氏に校正・写真整理の労をとって頂いた。心より感謝申しあげるとともに、合宿参加者の皆様にはこの合宿記録をあらためて味読いただき、人生の葉として、また日本のあるべき姿をもとめるための指針として活用されることを願ふ次第である。

さて、今夏の「合宿教室」は、来たる八月十九日（金）から二十二日（月）までの三泊四日間の日程で、広島県「国立江田島青少年交流の家」で開催される。招聘講師として、東京大学名誉教授 小堀桂一郎先生（演題―歴史に學ぶ「公」と「私」の関係―）にご出講いただく予定です。

全国の学生、青年諸氏多数のご参加を願ひつつあとがきとする。

平成二十三年二月

編集委員

山内 健生

磯貝 保博

——日本への回帰——
(第46集)

平成二十三年二月二十八日発行 定価 九〇〇円

送料 二二〇円

編者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

上村 和男

発行所

社団法人 国民文化研究会

〒一五〇—〇〇—一 東京都渋谷区東

一—三三—一四〇二

TEL (〇三三) 五四六八—六三三〇

振替〇〇一七〇—一—六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

大学教官有志協議会 | 編
社団法人 国民文化研究会

